

て *good + for + nothing* の關係から成立してゐる形容詞的の語である。即ち組立作用によりて作られた語であつて文法上からは曲げ (*television*) を爲すのが本體である。然れども之に反して *He is good for nothing* (彼人は何の役) と言ふならば *good for nothing* は決して混合語では無く、それぞれ單獨的に纏つた使命を有してゐる。即ち三の語は獨立した文法を有してゐる譯である。決して前例の場合に於ける如く三者合併して形容詞的のものに成つてゐるものでは無い。アリアン語系の國語には混合語と稱するものが頗る多い。然るにセミティック語系の國語には混合語が極めて少數である。セミティック民族は組立作用を用ひて混合語を作る事を好まなかつたからである。アリアン語系の國語の中で古代希臘語は最も長き混合語を製造したことで古來有名になつてゐる。例へばアリストファネスは次の如き長い長い混合語を用ひてゐる。(英語で直譯し) “*meanly-rising-early-and-hurrying-to-the-tribunal-to-denounce-another-for-an-infracton-of-a-law-concerning-the-exportation-of-figs*” これは一つの觀念を表示してゐる形容詞的混合語であつて英語で實に廿二語を要する譯である。獨乙語は今日に於てもなほ長き形容詞的混合語を用ひてゐる。哲學上の

用語には混合語の長いものが相當に澤山ある。平易な觀念を表はす際にも次のやうな長い混合語を獨逸人は用ひてゐる。曰く “*morgendämmerungshändelmacherer-hisverdermühwanderung*” の如し。又サンスクリットには非常に長い混合語があつて百五十二字で一語を成してゐるのがある。かゝる長き混合語は決して實用向きでは無い。長い綴字は之を用ひる人以外には殆んど實用的効果を奏し得るものでは無い。但し混合語を作り得ざる國民は精細な思想を發表するに不便を感じるのは明かな事實である。混合語は現今何れの國民も極端に流るゝ様な長い形を避けてゐる。ロシア語に相當に長い混合語がある。例へば *bezbozhnichestvovat* (to be in the condition of being a godless person) の如し。

元來混合語であつたもので現在は完全な一つの纏つた語に成つてゐるものがある。此種の語には種類が多い。其中で最も目に觸れ易いものは曲轉的接尾語 (Flexional Suffixes) と分離的接尾語 (Classificatory or Formative Suffixes) との二種である。前者は語と語が混合して一體となつた結果、その一つに纏つた語が或る曲轉的接尾語を其儘に保存してゐるものである。例へば英語の動詞の過去形に (-ed) のつい

を充ててくれるからである。故に余はかくの如き複雑した分科的研究は全部省略することとした。言語の構成上に關して形態學上より見たる概念を説くのが余の目的とするところであつた。

第九章 言語の流動性と流動美

こゝでいふ言語とは語其者を指したものである。語それ自身に本質的に流動性がある事や、又その流動性が審美的である事等を本章に於て説いてみる。而してその當然の歸結として文學と言語の關係が當面の研究題目となるのは余の最初から期待してゐる事柄である。

言語は時間的のものである。吾人が何か話してゐる間はその話に用ひてゐる言語其者は常に時間的に流動してゐる。故に言語は本質的に時間と流動を必要條件として存在するものと稱し得る。随つて言語を文字で表象した文學其者も時間的に流動してゐる内容を具備してをるべき譯のものである。換言すれば文學書の中に書いてある事柄が之を讀む人の心の中で常に時間的に流動し發展し推移してゆくべき筈のものである。若しこの作用が讀者の心の中に起らぬなら

ば少なくとも其文學は失敗に近き作物と見做なくてはならぬ。然れども文學の場合に於ては時間的に言語の表象が推動するといふ事は必ずしも言語其れ自身の場合に於けるが如く必須的要件とはならぬ。たゞこの要件を無視する時はその作物が十中八九迄失敗の作として終るといふ事に過ぎぬ。空間的文學はこの要件を輕視したものである。時間的文學はこの要件を重大視したものである。以下この二者に就て説明する。

文學の形式及内容を批判するに當つて先づ第一に吾人の重大視しなくてはならぬ事柄は作者が其作中に於て描寫してゐる對象を空間的に或は時間的に如何に進行させてゐるかといふ事柄の考察である。換言すれば描寫の發展的形式即ち過程が空間的に又は時間的に如何なる程度迄成功してゐるかといふ問題の調査に存してゐる。

藝術を靜的と動的の二に分類し、彫刻繪畫の二者を前者の代表となし、文學と音樂の二者を後者の代表者とした者はプラトンである。而して靜的とは空間を主として指し、動的とは時間を示した語であつた。即ちプラトンは文學を以て動的

藝術の一種と斷定したものである。爾來此説をもととして文學を論じたものが多い。シャスレル(Schasler)も亦藝術を靜的と動的の二に分ち、前者は空間、後者は時間の觀念なりといふ風に説いてゐる。而して文學を以て動的藝術の一部分なりと言はんとするはプラトンと何等異なる所は無い。ハルトマンの藝術分類はヘーゲルの所謂客觀的分類に局限されてゐて主觀的方面や歴史的方面は等閑視されてゐると世間からは批評されてゐるが相對的批判の立場から觀察すれば餘程進歩した説であると思ふ。ハルトマンの藝術分類中特に文學を研究する者の爲に新たに提供した事柄は空間的觀念と時間的觀念との結合を基とせる一種の藝術の存在を認めたことである。ハルトマンは此種の典型として表情舉動と表情舞踏を擧げてゐる。要するに演劇を以てその典型と認めたことになると思ふ。演劇は文學の一種である。而も文學形式の上から見て最も完全なものゝ一である。故に一種の文學がハルトマンの所謂空間時間的藝術の典型であると斷じ得る。なほ之を分析的に言ふならば空間的文學(靜的)と時間的文學(動的)の存在を認むると共に、その結合の可能性を許し、且つ二者の融合が官能的藝術の最大

最善なるものを生む所以なるを是認してゐたとも推斷し得るのである。

議論は兎も角として事實の上では空間的文學、時間的文學、及び空間時間混合の文學、即ちこの三種が文學描寫の形式上から見て明かに存在してゐる。

(一) 空間的文學

空間描寫に重きを置いてゐる文學を便宜上空間的文學と銘名する。純然たる空間的文學が果して絶對的の意味に於て存在し得るや否やは固より疑問である。予のこゝで空間的文學と呼んでゐるのは決して嚴密な意味に於ては無い。たゞ比較的に空間觀念が重きを占めてゐる文學をかく銘名したに過ぎぬ。猶、空間的文學の特色を検せんに言ふ迄も無くその要素が空間描寫に重きを置いてゐる所にある。その一般的傾向としては文學の必須條件ともいふべき想像の發展作用が形式上に現れずして頗る内在的で且つ複雑多様である。即ち具體的にいへば空間本位の描寫法は次に述べんとする時間本位の描寫と異なりて、吾人の想像の動き方が客觀的には極めて靜止的で且つ複雑なる審美的作用を惹起するものである。故に此種の文學は形式上から客觀的に批判すれば時間本位の文學に比較

して不利益な地位にある。但し主觀的には必ずしもそうは斷定することが出来ぬ。又此種の文學は讀者の美感を綜括的過程によつて直覺的に感應せしむるものである。換言すれば時間本位の文學に見るが如き漸進的想像力を基礎として次第次第に讀者の心を美の領域に誘導するものとは異なつた過程を踏むのである。即ち空間的文學にありては讀者の想像力は極めて強烈な感應作用を生じて、その鋭感な一眸の中に内容の充溢せる客觀の一世界を直覺的に攝取し綜括することが必要とせらるゝのである。之が此種の文學の一長所である。然れども其熾熱せる想像の力が普通の場合にありては時の文學の場合に於るが如く無限大に發展し膨脹し得るものではない。例へばその文學に描寫されてゐる或る客觀の世界を中心とした一つの大きな圓の輪寰以外に讀者の想像力が超脱する事が出来ぬのである。随つて文學者の立場から見ればその一大圓形の内容を無理にも豊富な材料で充實させやうと欲して、時としては陳套な事柄を平面的に羅列する事が生じて來る。又奇拔を禁物とするのは此種の文學の通弊であつて其結果冗漫蛇足の惡弊が常に伴隨してゐる。次に實例について以上の理を明かにする。

時間觀念は空間觀念に比して遅き時代に文學に流れ込んで來たものだと思ふ。それは吾人の日常經驗してゐる事柄からも證明する事が出来る。小兒は大人に比して空間觀念が時間觀念よりもヨリ多く、その精神界を占有してゐる事や、未開人種が文明社會の人々よりも時間的觀念が薄弱である事や、動物が人間よりも時間的觀念が遙に劣つてゐる事等は今更らこと新しく述べる必要も無い。之と同様に古代の文學は後世のものに比して一般に時間的觀念が弱いのは自然の數である。換言すれば今日より非常に遠い昔の文學の大多數は空間觀念を以てその主要素としてゐたことは大體の上から見て大過無き推定であると思ふ。吾國の文學だけに就て見るも時間觀念が著るしく文學に多くなつて來たのは佛教傳來以後にあると思ふ。例へば佛教の未だ渡來しなかつた頃の吾國民性を最も明かに表示してゐる萬葉集に次の歌がある。この歌は麻績王が伊勢國伊良虞島へ流罪になつたのを當時の人が哀傷したものである。曰く

打麻乎麻績王白水郎有哉、射等籠荷四間乃珠藻苺麻須。

右返歌に曰く、

空蟬之命乎惜美浪爾所濕、伊良虞能島之玉藻苺食。

以上の二首の歌は内容に於ても形式に於ても殆ど空間的といふことが生命になつてゐる。描寫は平面的である。時間的に流動してゐる何者も見出す事が出来ぬ。亦その思想そのものも徹底的に空間本位の思想である。即ち空間的に生きやうとする態度が最も明かに表示されてゐる。身は金殿玉樓に生れて寒き風にもあてられた事の無い貴人が伊良虞島へ流されるといふ事其れ自身が既に一大悲劇である。然るに之をしも苦痛と思はず、否、一大苦痛であつたらうが、それにしても人間生存の一大權利を自覺して飽く迄も空間的の生命慾に執着し、毫も運命の流轉を歎かず、刹那に移りゆく時相の變幻に蟬脱して何等の愚癡も何等の泣言もこぼさず、來世の安樂も天國も求めず、悠悠として配所に生を貪らんとする頗る樂天的な而も男性的態度は、實に明白にこの歌に現れてゐる。この精神は吾人の祖先の共通性であつたとも見らるゝのである。かくの如く運命の逆轉が安靜な生活を無慈悲に破滅して仕舞つた場合にも平然として空間的に生きやうとし

てゐた古代民であつたから、山河草木に接しても全然空間的に鑑賞せざるを得なかつた。例へば

わたつみのとよはた雲にいりひさし、こよひのつく夜すみあかくこそ。

此歌も萬葉集にある歌だが空間描寫以外に何物も無いではないか。純空間描寫より較々複雑に進んだ例としては歌聖人麿の次の歌は最も巧妙を極めたものである。曰く、

秋されば雁のはかぜに霜降りて、寒き夕なく、時雨さへ降る。

時間的觀念が空間的觀念と結びついて實に美の結晶と作つてゐる。ラスキンの雲と時雨の美文を讀むやうな心地がする。人麿よりは時代が遙に新しいがこの歌の類例として掲ぐべきは宮内卿の歌である。曰く、
あふ坂や梢の花を吹くからに、嵐ぞかすむ關の杉村。

是等の秀句を一々檢し來たれば空間描寫は吾國の和歌の一大長所であつたや

うにも思はるゝのである。

固より萬葉集や其他の古代の和歌及び一般の文學の中で時間的觀念に支配せられて有爲轉變の世相を歎じ、塵世の無常を悟り、言ひ知れぬ哀愁に綿々の情を動かしてゐるものも決して少なくは無からうと思ふ。然れどもそれは終始空間的觀念を立脚地としたる悲哀ではあるまいか。例へば人麿の「過遠江荒都作歌」を讀むに彼れの眞面目な男性的な素直な熱烈な哀愁の情緒が轟々と吾人の胸底に壓し來るやうな感が起るが、靜に考察すれば其深刻な悲調が徹頭徹尾時間的描寫の力を通じて吾人に感應して來たものでは無い。常に空間的觀念から出發してゐる作者の哀愁が吾人に感應してゐるのである。即ち空間描寫が人麿の歌の骨子となつてをるやうに思はるゝのである。今この日本古代の空間描寫の例を以て英國第十九世紀の天才キーツの大海を見て詠じた詩の句とを比較して見たならば如何に後者が僅々二句に於て時間的觀念を歌ひつくしたか、明かになる。曰く、

“The voice mysterious, which whose hears

Must think on what will be, and what has been?”

(この神秘の聲を聞く者は何人といへども未來と過去とを想はざるを得ざるべし) キーツは空間の世界を離脱して神韻漂渺たる時の宇宙に遊び、靈の國に想を馳せた情感主義の詩人であつた。自然の美は悉く神秘の衣をつけて永劫の昔から永劫の未來に亘つて時といふ大海原の波上に棹してゐるものと觀じてゐた。然ればキーツに於て最も必要と認められたものはその神秘の衣を通して無窮の絶對即ち彼れの所謂時間の相に接せんとする點にあつた。空間觀念は彼れにありては重大なるものでは無つたのである。この點が前掲の萬葉歌人と大に異なる所である。白樂天の夜雨と題せる詩に

早蛩啼復歇。殘燈滅又滅。隔窓知夜雨。芭蕉先有聲。

といふ句があるが、之は其一句一句を取出して見ても悉く空間的に流動してゐる觀念を表徴してゐる。勿論流動といふ以上は時間的觀念が横つてゐる事が否定し難き事實ではあるが、主として言はんとする所は空間的推動美の描出にあつたと思ふ。即ち空間的描寫が此句に於て必要な役目を演じてゐる。然れども吾人が之を讀んで得る所の感想は果して空間美だけに局限されたものゝみであらう

か。否、空間的よりは寧ろ時間的觀念がヨリ多く、讀者の腦裡に印象を残すこと、思ふ。空間を離れた闇夜の淋みといふことが切實に吾人の腦の一角に刻みつけらるゝのである。キーツの有名は蟋蟀と題せる詩も白樂天の夜雨と同様に人の心を刺戟する力を含んでゐる。白樂天は空間的描寫に依りて時の觀念を聯想せしめ、キーツは蟋蟀の聲をかり來つて詩の永續觀念を説いてゐるものと解すべきである。而してキーツの所謂詩とは時といふものゝ内容を審美的に表徴したものに外ならぬと思ふ。故にキーツの蟋蟀は時の觀念を詩といふ色彩で描き出したに過ぎぬものと評し得るであらう。

以上の例によつて見れば空間的文學は描寫の對象を主として空間的に取扱はんとするのが一大特色である事が明かになつた譯である。而して之と共に想像の發展作用が形式上に現れずして極めて内面的である事も明かになつた。即ち白樂天の夜雨に就て見るも一句一句が悉く空間的描寫であつて、客觀的には頗る狭く且つ比較的流動の速度が緩慢であるが、全體を讀んだ後の所謂想像力の總量からいへば頗る強大なものがある。而もその強大な想像の力は之を質の上か

らいへば直覺的のものであつて決して漸進的過程を経て出来上つた規則的のものでは無い。例へば早蛩啼復歇の一句だけを引離して考ひる時は蟲といふ小さな對象を空間的に描出したゞけであつて之れだけの句では吾人の想像力は極めて小局部に限定せられその活動の程度は頗る微弱である。殘燈滅又滅と言つたところがそれだけの句では何等の感興も湧かぬ。以下二句も亦之と同様である。然らばこの四句を結合して讀後の感興は如何と問はれたならば何人といへども文學的感興の甚大なものがあると答へざるを得ぬと思ふ。その理由は如何？。必ずしも此四句の間に思想上の論理的結合が判然として存在してゐるやうにも思はれぬ。時間的抽寫のやうに吾人の想像力を一步一步と秩序的に將た漸進的に緊張させてゆくやうにも思はれぬ。その證據には第二句を第一句と交換し、或は第二句と第三句の位置を轉換したところで、漢詩の形式に通ぜぬ讀者には詩的想像を自由にする上に何等の不便も無く、且つ一句一句を引離して見る時はこの三句は何れを最初に移し來たるも感興を殺がるゝことゝはならぬのである。かくの如く一句一句が徒に空間描寫にとゞまり而もその各句が少なくとも形式上

から見て論理的結合をなしてをらぬ詩が之を全體として見る時は審美的であるといふに至つては其所に何等かの理由が無くてはならぬ。予はラスキンやエマースン等の言うたやうにかゝる原因を文學的想像力の直覺作用に歸せしめんとする者である。此の如き直覺的將た綜合的想像力の發展作用が無くしては空間的文學の産出は作家としては覺束無い事であり、鑑賞家としてはかゝる文學を味識する事が不可能である。元來が流動的であるべき言語を平面的に配置して一つの理想的圈内で纏つた美を表現しやうとするのが空間的描寫の特色であるが故に、この種の描寫は靜的美相の裏面に動的美相を隠見せしめなくては眞の意味に於ての成功を獲得する事が不可能である。随つて作者としての苦心は想像以上に大なるものがある。亦鑑賞家もこの裏面の美迄も見透す明が無くては空間描寫の大文學を味ふ資格が無いと思ふ。空間文學はこの意味に於て造形美術と殆ど大差無き内容を包含してゐるものである。東洋の文學美術はこの直覺的想像力の作用を生命としてゐるものが多い。特に古代のものほどこの種の性質を帯びてゐる。

(二) 時間的文學

文學の對象となるものを時間的に描寫しやうとするものを時間的の文學と銘名するのである。時は流動的である。随つて此種の文學は動的要素を以て生命としてゐる。前述の發展作用は遺憾なく形式上に躍動してゐる。空間的の文學の如くこの作用を間接的に或は讀者の直覺に訴へて後殆めて有效ならしめんとするものとは大に趣きを異にしてゐる。即ち發展作用が頗る有利的に活動してゐるのである。次に時間的の文學は概してその描寫法は分析的である。推理的である。漸進的である。長所は此點にある。然れどもその弊は中心を遠かる所にある。即ち遠心的缺陷を伴ふ事が比較的が多い。

發展作用の経路は種々の形式をとつて現れてゐる。その代表的のものは約五種類ある。曰く、

(一) 直線的描寫。之は其名の示すが如く時間的描寫を直線的に取扱つたものである。例へば

小倉山ふもとの里に木の葉ちれば梢にかゝる月を見るかな。(西行)。

雨そゝぐ花たちばなに風すぎて、山時鳥雲になくなり。(俊成)。

柴の戸に入日の影はさしながら、いかに時雨るゝ山べなるらん。(清輔)。

横雲の風に分かるゝしのゝめに、山飛び越ゆる初雁の聲。(西行)。

たえだえに里わく月の光かな、時雨を送る夜半の村雲。(寂蓮)。

是等は直線的に最も美しく自然の美を描出したものである。歌の中に現れて来る物象は悉く時間的に流動してゐる。その推動の過程は極めて刹那的である。極めて直線的である。かゝる短い形式の中にかく迄時間的流動を詩化し得た例は他に容易に類を見出し得ざることと思ふ。

如上の最も顯著な例は謠曲の道行き文である。東北がたより出でたる僧が刹那にして名所舊跡を残り無く見物し終りて殆ど一瀉千里の勢ひで東海道や奈良の都に到着して仕舞ふ。謠曲の道行き文ほど時間的に經濟を行ふ名文は何れの國の文學にも類例を見出す事が困難であると思ふ。而してその文學的成功の所以を考察すれば全く直線的描寫に由来してゐるのである。多辯饒舌は道行文の大禁物である。一時も早く一刻も急いでシテの活躍する天地へ到着するのが第

一の目的である。英吉利の第十八世紀あたりの散文文學に多く見るやうな冗長な道行文は決して謠曲には見られぬものである。併しこゝに書き加へて置くべき事は如何に冗漫な描寫でも或一つの中心目的に向て一步一步と直線的に進んで行くものであれば、其速度が如何に緩慢であつても直線的描寫と稱し得るのである。例へばスコットの戦争小説の中に屢々見らるゝ描寫や、マスタートールドの『ツラブとラストム』と題する長篇の詩の中に父子相闘ふ有様を描いた句があるが、是等は何れも後者の例として最も適切なものであらう。

(二) 曲線的描寫。之は文學の内容が時間的に抒してはあるが、その進行の過程が單刀直入的で無く、少しづつ中心を遠つてゐるものをいふ。但し描寫の對象から全然脱線して仕舞ふ事は無く、たゞ比較的うねと曲析する位に過ぎぬものである。左傳卷十一、宣公、傳十二年夏六月云々の文は此例に入るべきものであると思ふ。即ち戦争の事を記載すべき場合に當りて戰術に關する講演めいた事を折々挿入してゐる。かゝる筆法は史記等にも澤山に見受けらるゝのである。馬琴の八犬傳にはかゝる種類の物が非常に多い。

(三) 三角形的描寫。此種の描寫は外國の戯曲に非常に多い。一文章又は詩に於ても此種の描寫法は少なく無い。この種の物の特色を示せば先づ記事の發端は時間的進行が頗る緩慢であつて、それが發展するにつれて漸く速度を増し、丁度三角形の頂點に相當する所に達した時に發展作用が絶頂に到達し(劇ならばクライマックスに達せし所)それより再び三角形の底邊に向つて進行をゆるめ、終に底邊に相當する所に到着して筆をとめてゐる。劇でいふならばその底邊なるものは作中の主人公が勝利を得たことになるか又は滅亡して仕舞ふ事になるのである。左傳卷二、桓公、傳五年の條に次の句がある。曰く、

秋、王以諸侯伐鄭、鄭伯禦之、王爲中軍、虢公林父將右軍、蔡人衛人屬焉、周公黑肩將左軍、陳人屬焉、鄭子元請爲左拒以當蔡人、衛人爲右拒以當陳人、曰、陳亂、民莫有鬪心、若先犯之、必奔、王卒顧之、必亂、蔡衛不枝、固將先奔、既而萃於王卒、可以集事、從之、曼伯爲右拒、祭仲足爲左拒、原繁、高渠彌以中軍奉公、爲魚麗之陳、先偏後伍、伍承彌縫、戰于繻葛、命二拒曰、旡動而鼓、

以上の句で發端から絶頂迄の道程がつくされてゐる。三角形の頂點迄發展し

て來てゐる。次の句に至つて頂點の極をつくして仕舞つたものである。曰く、
 蔡衛陳皆奔、王卒亂、鄭師合以攻之、王卒大敗、祝聃射王、中肩、王亦能軍、

此句頗る簡潔であるが要領を得てゐる。千軍萬馬が入り亂れて血煙りたつてゐる一大修羅場が吾人の想像の眼に鮮かに映じて來る。次の句からは勢ひが漸く弛んで次第次第に結末に近寄つてゆく。即ち

福聃請從之、公曰、君子不欲多上人、況敢陵天子乎、苟自救也、社稷無隕多矣。夜、鄭伯使祭足勞王、且問左右、仍叔之子、弱也。

戰爭の光景を描いたものは東西の文學にその例頗る多いが、左傳ほど簡明に雄勁に描出したものは稀れであると思ふ。特に餘韻多き筆致に至つては東洋人の長所を遺憾なく發揮したものと評すべきである。

(四) 多角形的描寫。此種の文學は或る一つの目的に向つて迂回した道をとつて進行し最後に出發點と同じ線上に歸着するやうに描寫するものをいふのである。第二種の曲線的描寫に似た點があるが、それは主として曲折して進行するといふ一點だけが似てゐるので最後に再び出發點と同一線上に戻るといふ點に至て

は第二種の曲線的描寫には見る事を得ざる特色である。又第三種の三角形的描寫に似た所もあるがそれは主として發展作用に一高一沈ありといふ點に類似を見るのであつて、その形式の不規則なるに至つては多角形的描寫は實に極端に走てゐるもので、三角形的描寫の如く三角形の頂點が描寫の高潮に達した所であるなど規則的に説明し得るのである。即ち多角形的のものにありては何れが絶頂であるか容易に判別し得ざる場合が多いのである。バイロンの『チャイルド・ハロルド巡遊吟』だとか、サッカレの小説だとか、日本文學では馬琴物だとか、太平記の或る部分だとか、夏目さんの『猫』だとか随分類例が多い。即ち是等の作中に出づる時間的描寫を通覽するに最初出發せし點より次第に進行するにつれていつしか中心點を離れて比較的に本題に關係の少なき事柄の描寫に筆が走り、最後に再び本題に立戻りて結末をつけるのである。

(五) 斷續的描寫。時間的描寫を爲すに當つて斷續的に之を行ふものをいふ。例へば或る期間の描寫は規則的に進行せしめ、次の期間の描寫は全く之を省略し、或は暗示にとゞめ、更に次の期間に於て規則的な表面的描寫を爲すといふ工合に

斷續的に時間的描寫を行ふものをいふのである。而して此種の或物によりては最初から暗示的で終始一貫するものもあり、或は一部分だけ暗示的の物もある。かくの如く此種の描寫は外形上頗る不規則なものであつて然かもその内面的性質に於ては極めて規則的な又最も心理的な形式であるから普通の作家には容易に成功的に爲し得ざるものである。言はゞ非凡の才を有した文學者で無い限りは多くは失敗に終るのが常である。亦讀者の方面から見ても之を味識し感得する事は容易で無い。少なくともかゝる描寫の妙趣を發見し得る鑑賞眼を具へてゐない者には無意味のものとなる。再び左傳から例を引く。同書卷三、莊公傳廿八年の條に

諸侯救鄭、楚師夜遁、鄭人將奔桐丘、謀告曰、楚幕有烏、乃止。

とあるが、その最後の楚幕有烏の句は實に重みのある文字である。非凡の才筆である。間諜往復の有様を時間的にくだくしく描寫するの愚を避けた手腕、又敵軍が夜陰に乗じて遁げ行く光景を管々しく抒するの煩雜を省き僅々四字の中に時間變動の無限の意を寓したるは流石に千古の名文左傳である。英國十九世紀

の欽定詩人テニソンの「鷺」と題した六行の短詩は全體として空間描寫に重きを置いてをるやうであるが、最後の一行に至つて時間描寫を最も簡潔に又最も暗示的に爲してゐる。曰く、

He clasps the crag with crooked hands;

Close to the sun in lonely lands,

King'd with the azure world, he stands.

The wrinkled sea beneath him crawls;

He watches from his mountain walls,

And like a thunderbolt he falls.

絶壁の上から大海を見下してゐた一羽の荒鷺が電光の閃くが如く突如として波を望んで落ちて来る有様は實に一幅の繪を見るが如くである。此詩全體の格調も流動的に出来てゐて内容と頗るよく一致してゐる。最初の五行で空間的描寫を爲し、最後の行に至つて忽然として時間的描寫に轉じて句を結んでゐる。此詩の長所は實にこの刹那的變轉の手腕に存してゐる。次に暗示的描寫の代表的

筆致は吾國の俳句に如くものは無いと思ふ。俳句はその形式が極めて短小であるが故にその缺陷を補ふ必要上暗示的描寫が大切な要件となる。この方面には多くの天才が現れてゐる。例へば次の如き筆致はそれである。

牛叱る聲に鳴立つ夕かな

支考

初時雨猿も小篋をほしげなり

芭蕉

蝶々や女の道のあとや先

千代

磯山や小松が中を春の水

凡董

以上の句は比較的客觀的の氣分に満ちたものであるが暗示的の分子も多く潜在してゐる。初の二句は空間に即して時間的事相の淋みを詩化したもの、後の二句は全然空間描寫を試みて然も時間的に流動する春光のゆつたりとした美を聯想せしめんとしたものである。即ちこの意味に於て等しく暗示的である。一部分の美を示して全部を想像せしめやうとする筆法である。斷片的の事を提供して綜合的の或物を捕捉せしめんとするのが目的である。

時間的描寫の種類は上述の如く雑多である。以上の外には區別すれば數種に分つ事も出来ると思ふ。かくの如く種類が多くあり得る餘地の存するのは結局時間的觀念が複雑多様にして之を發表する形式が無限に案出され得る事を豫想せしむるものである。今之を近代の藝術に結びつけて考へんに、かの後期印象派と言ひ、或は立體派と言ひ、或は未來派と言ひ、理想派と稱する者といひ、何れもその目的とする所は詮じつめるならば時間的描寫を如何にして有効たらしむるかといふ實際問題に歸着する。各自がこの實際問題を解決する爲め的手段として各自の所信を標榜したのが如上の何々派、何々主義となつたのである。近代の藝術は實に時間描寫に最善最大の努力を拂つてゐる。

藝術的理想の終局の目的物たる藝術的眞理を廣義に解すれば空間的文學は繪畫に比すべきものであると同様に時間的文學は音樂に相當するものである。繪畫は空間的實在の物象を通して眞理の妙諦に入らしむるものである。換言すれば色と形の世界を必要條件としてゐる。随つて有象の世界を脱離し得ざるものは繪畫に面してたゞ色と形の美のみに眩惑されてその奥底の眞如淨法ともいふ

べき所謂醍醐の妙味を掬する事が出来ぬのである。音楽は時の世界を生命としてゐる。時は空間を超脱し遠離れた場合に最も莊美を極むるものである。空間的文学が俗眼に映じ易くして然かも真にその實相を透視し得る者の少數なるは全く之が爲である。時間的文学が俗耳に入り難きも亦之が爲めである。

藝術的眞理を廣義に解すれば時間的文学の理想とするところも空間的文学の理想とするところも如法同一であるは論ずる迄も無い。否、もつと廣汎的に言ふならば宗教の理想とする所の眞理も、科學の究極とする所の眞理も、同心異體として見做す事が出来るかも知れぬ。サンチャーナが宗教即詩歌と斷言してゐる事や、我が畏兄松浦一君が佛陀即ち是れ藝術の本質と斷定してゐる事も見やうによつては當然起り得べき説となるのである。然れども差別的に各種の眞理を觀るといふ事も必要である。この意味に於て時間的文学と空間的文学を便宜上區別して見るならば前者は無象の世界に立脚し、後者は有象の天地に立脚してゐるのである。其所にこの二者の一長一短がある。而してこの二者が調和的に結合した場合に始めて理想的の文学形式が生れ出づるのである。文学上最も重大視

せらるゝ發展作用の推動美といふ事がこの新しき形式を藉りて實現し得らるゝのである。カリエールが美學上で用ひてゐる語を借用するならば所謂發展道程に在る形成美 (Das werdende Schöne im Process der Entwicklung) といふ事がこの新しき形式によつて成就されるのである。近代の文学がこの新形式を如何なる程度迄應用し又如何なる程度迄成功したかといふ事を考査するならば頗る有益な材料を得る事が出来ると思ふ。

言語は流動的即ち時間的のものであるにも拘らず、之れを表徴した文字は文学といふ結晶を形造くる時は上に述べしが如く空間時間の差別相を現し得るものである。かくの如くにして言語は空間に即して時間相を現し、時間に即して空間相を現し、時又時、場所又場所と永遠に將た無限大に生存し且つ瀾漫する性質を有してゐるものである。而して言語の美はその時間的に將た時間を包攝してゐる空間に即して調和的に流動推移する所に存在してゐるのである。言語の藝術相はその流動の美に存してゐる。

向ふのお山はこんもりお山。夜でも晝でもこんもりと。なぜなぜ、そんなにしんとしてる。

お山の婆さん淋しかる。一人ぼつちで淋しかる。しんしんお山で淋しかる。

なになに、ぼつぼが赤いお下駄でまぬります。

なになに、びよんびよん、兎ぢやん、お目めのはしに紅さして、

びよんびよん、びよんびよん参ります。

第十章 音韻と情緒

言語は思想を發表する道具であると共に情緒を發露する方便ともなるものである。情緒を發露するに當つて最も重きをなすものは言語の音韻調節といふ事柄である。音韻の調節は廣況な意味に於ての音の律動リズムに外ならぬ。律動リズムはその語原が既に示してゐる如く流動其者の規則である。吾人の心の作用はいふもさならなり、宇宙間の一切の現象は廣い意味に於ての律動の表現とも稱し得るであらう。然れども予がこゝで言はんとする律動は音韻についてのみの場合である。音韻を通じて表示する、律動は情緒の律動を端的に表示したものと見ることが出来る。言語學を研究する者は多くはこの方面の問題から遠ざからうとするのが常であるが、これは大なる誤謬であると思ふ。音の律動と情緒の關係は極めて密接なものがあつて、それが言語學的見地から考察して種々の有意義の問題を生ず

るものである以上は、この種の研究は音楽詩學、心理學、美學等と相携へて言語學者の討究すべきものであることは論ずる迄も無く明白な事柄であると思ふ。

音韻の律動はこれを音韻の時間的律動にのみ即して認むることが出来ると共に、音の力的律動即ち音の強弱の律動にのみ即して認むることも可能である。亦時間と力を合一的に見た律動を認むることも固より可能である。ローベ(Lobe)、ハウプトマン(Hauptmann)、ヘルバルト(Herbart)、シェンハッセル(Schopenhauer)、ロツェ(Lotze)等は時間的觀念に即しての音韻律動を認めた。英國の學者も多くは此立場に立つてゐた。然れども音の強弱に即して律動を説かんとする者も決して少なくは無つた。ケストリン(Kästlin)はその代表者であつた。音韻の律動は音の力に存在するものであつて、強弱の音が相互に交換されて來る所に靈妙な音韻律動が表示されてゐると説くのが此派の一般的傾向であつた。随つてケストリン一派の音韻上の學説は、*アクセント*を重く見る所に存してゐた。最後に時間と力との二つに即して音韻の律動を説いた者はリーマン(Riemann)である。然れどもリーマンの所論は餘りに音樂をのみ中心とした弊があつて言語學上から

は無理な點が往々にして見出さるゝのである。加之、リーマンの説には時間と力の二つに即して音の律動を二元論的に説かんとする傾向が見える。この二つを平等の重みを以て見てゐるのは固より彼れの長所であるが、この二者を結合して渾一的に見てゐたか否かは多少疑はしきものがある。即ち彼れは餘りに律動の分析的研究に固執した結果、音韻動の二要素(時間的要素即ち音の長短律動と力的要素即ち音の強弱換言すればアクセント上の二要素)を論理的に分類することにのみ没頭し、これを心理的現象から渾一的に觀察することに多少の手落があつたやうに見えるのである。但し彼れの觀察の新しいみはこの二要素を綜合的に見る餘地を保留してくれた事は明かである。この意味に於てリーマンの所説は頗る暗示的であるとも評し得る。

以上は比較的新しい時代に現れた人々の學説であるが、これを歴史的に研究すればリズムの討究は非常に古き歴史を有してゐる。紀元前の昔から多くの學者によつて研究されて來た問題である。宇宙天體の律動が人類内の律動と關係してゐるものであると説いた古代希臘の哲學者から、近くは律動を物理的現象としてのみ説んとする狭い物理學者の學説に至る迄、實に千差萬別の解説が歴史

的に現れてゐる。而して是等各種の説が律動について發表されたといふ事は結局この問題が多方面であり且つ神秘的である事を裏書するものに外ならぬ。音に關する律動のみに就て見るも種々の立場からさまざまの説が成り立ち得るのである。

音楽は音の拍子リズムと調メロディが渾一的に組み合はされた時に音楽としての價值が成立するものである。言語の調節モデュレーションも亦拍子と調を渾一する場合に認めらるゝのである。言語發聲の場合に於ける拍子は音の量を指すものである。なほ他の語で言ふならば音量を時間的に調節し割當てることである。之に反して調又は調子は音の力的表現換言すればアクセントの中に包含されてゐる物である。音韻の拍子に關する規則は今日の英語及び歐洲文明國の國語に於ては餘り重大視されてゐないが希臘及び古典の太古の言語特に詩にありては非常に大きな役目をなしてゐた。今日の歐洲文明國の詩は音韻の力的要素即ち音の強弱換言すればアクセントを本位とした規則を重大視してゐる。

アクセントは思想及び感情の發表的表徴として非常に意味のあるものである。例へば英語の極めてありふれた單語についてもこの事實を見出すことが出来る。一例を上ぐればパン屋即ち *bake-house* にありてはアクセントはパン製造即ち *bake* といふ語に見出す事が出来るのはこの部分に思想及び聯想の主力が集中されてゐるからである。日本語の場合に於てもパン屋のアクセントはパンの部分に在る。同様に酒屋 (*brew-house*)・木材小舎 (*wood-house*) に於てもアクセントは各語の重要な部分に來てゐる。故にアクセントの法則は吾人の思想乃至情緒の發表法則と矛盾することが無いとも推斷し得る。なほ之に類似した他の例を示めせば善人即ち *good man* の場合に於けるアクセントの位置は戸主又は財産主即ち *good man* の場合に於けるものと異なつてゐる。善人といふ場合の *good man* の音韻強弱の法則は所謂揚揚格(作詩規則で所謂スポンディイアンと名づく)であるが、戸主又は財産主といふ場合の *goodman* にありては揚抑格(作詩規則でトロキイフと名づく)である。即ち前者にありては *good* と *man* は同一の重みを有してゐるが、後者にありては前半の *good* が後半の *man* よりも重大な意味を有してゐるのである。随つ

てアクセントの位置はやがて是等の語を通じて表示されてゐる思想及び感情の濃薄を量る標準となつてゐる譯である。但しかゝる場合は主として英語の例に於て見出さるゝ事實であつてアクセントが常に語の初めにあれば其のアクセントを有する部分はアクセントを有せざる部分に比して重大な役目をなしてゐるのは殆ど英語に於て一貫した規則とも見る事が出来るのである。而してこのアクセント尊重の精神が英語の作詩法の根本基準となつてゐるのは何人も容易に認知し得る所である。英語の生れ出た源流國語ともいふべき原始獨乙語は後世の英語と同様に音韻の力的要素即ち音の強弱一名アクセントを標準として詩の格調を整へてゐた。然るに太古の拉典系の言語にありては音韻の量的要素即ち時間的要素換言すれば拍子に従つて詩の格調を整へることに重きを置いてゐた傾向がある。而してこの風習は近世のローマンス語族即ち拉典系の言語に従屬してゐる佛蘭西語伊太利語西班牙語等にも依然として傳つてゐる。故に音韻の律動表現は獨乙系の言語特に英語の場合と趣きを異にしてゐるものがある。随つて一語又は合成語コンパウンドに於て思想及び感情の最も重きを占めてをる部分に必ずア

クセントが來てゐるといふ英語の規則はローマンス語族のアクセントの規則に一致しない場合がありうるのは止むを得ぬことと思ふ。ローマンス語族にありてはアクセントを語の終りに置かうとする傾向が一般的に現れてゐる。これが獨乙語族の國語に於けるアクセント法則と著るしく異なつてゐる點である。ローマンス語族の代表者とも見るべき佛蘭西語にありては發音上の心得としては意味其物を表徴するやうなアクセントを用ひるよりは例へば英語の wood-house の如くアクセントの有無意味の輕重を合成語の間に辨別し得るやうな場合に音韻の律動其物を表徴するやうな發音規則を用ひんとするものが第一要件となつてゐる。而してこの現れはアクセントを成るべく語の終りに置かんとする傾向に見出さるゝのである。語の終りにアクセントが來るといふ事は平易な語でいふならば尻上りの語を用ひるといふ事である。尻上りの語は頭にアクセントを置いた語よりも印象が深い。少なくとも聽く人の立場から言へば記憶印象を確實化する長所を有してゐる。特に長い綴りの語や或は長い句を聽く時にこの事實を認めることが出来る。ローマンス語族の文の構造や詩の形式は獨乙語系の古い詩形に比して概して長いやうである。故に尻上り

の發音は國語の本質上から生れ出た自然的結果であるとも稱し得ると思ふ。この點は獨乙語族のアクセント法則と異なつてゐる大きな點である。獨乙語族の國語にありては力の要素換言すれば觀念の主要素にアクセントを置くのが主なる問題であつた。

アクセントの規則は各國民の性質を表示するものであるといふたのは獨乙の哲學者や地歴學者であつた。即ち尻上りの語を用ひてゐる國民は輕快で敏捷で且つ音韻の美妙的な所を先天的に聽きわける事の出来る文學的民族である。之に反して頭上りの尻下りの語を用ひる國民は沈着で質實で且つ理性に富んだ瞑想的民族である。前者はその缺點として神經が餘りに過敏で意志が薄弱であるとも評し得る。疍ばしつたヒステリーの婦人を聯想せざるを得ぬ。後者はその缺點として神經過鈍又は横着といふ事を裏面に隠してゐる。

音韻と情緒の關係が密接なものであるといふ事は一つの語だけにあらはれて來るアクセントを見ても知る事が出来る。亦一つの文章の抑揚の調子を見ても

知る事が出来る。然れどもこの事實の最も明かに表示されてゐるものは詩の形式である。

希臘人の作り出した詩の形式上の規約はアリストール以後多くの哲學者によりて研究され批評されてゐる。然れども希臘詩形の特徴は後世の歐洲各文明國の詩形の基礎を成してゐるにも拘らず、その出發點は音韻の時量的觀念に在つたことは十九世紀に至りて最も喧しく唱へられた説である。希臘の詩は舞踊のリズム特に拍子を基礎として生れ出たものである。今日歐洲文明國の詩は希臘人の發明した作詩法の規則及び其術語をさへ遵奉し墨守してゐるが、實際的には拍子よりも語勢即ちアクセントが重大な役目を演じてゐる。吾人は西洋の詩形を論ずるに先ちて其術語を前以て了解する必要がある。先づ西洋の詩作上の規則に於て第一に要求されるものは音脚(Foot)の規則である。音脚とは強音即ちアクセントを有する綴り(シラ)とこれを有せざる綴り換言すれば弱音綴りとが結合して一つの最も簡單な然かも獨立的な形を具備した物である。音脚は實に詩の律動の單位を作るものであつて一篇の詩が作者の情緒を最も有效的に表現すると

否とはこの音脚の運用の巧拙によつて決定せらるゝのである。獨乙語族の言語を用ひてゐる國民の詩形にありてはこの音脚なるものは主として音韻の力即ちアクセントに即して作られてゐた。然るに希臘ローマの古代詩にありては時量を標準として音脚を作つてゐた。アクセントは彼等の重大視する條件では無つた。故に彼等の音脚は嚴密な意味に於ての音脚では無くて實はシラブルの短きものを指してゐた。例へば彼等の詩の單位となつてゐた短いシラブルは之を符號で書くならば()の形で示めす事の出來得るものであつた。(アクセント本位でこの音といふことになる)。而して此短シラブルは彼等の時間觀念から測定すれば一長音シラブル即ち()の半分だけの時量を有してゐるものであつた。故に假りに一長音シラブルが用ひられてゐる場合があれば之と時間的に調和する爲には一短音シラブルは二短音シラブルに改められなくてはならなかつた。音脚は獨乙語族の詩形に於て最も大切なものであつて、言はゞ詩の單位なるものが全く音脚に存してゐたのである。然るに希臘やローマの古代詩にありては短綴り即ち短シラブルが詩の基準となつてゐた。音脚はかくの如く今日の歐洲文明國の作詩法

の根抵となつてゐるものであるが此音脚なるものは種々の態を現出するものである。而して此諸趣相を作詩法の上では特に格(Metre)の名を以て呼んでゐる。ミーターとは物の量を測定するといふことである。即ち時間的觀念に即して言へば一つの音脚に盛るべき長短の音韻の量を適當に測定することである。又之を音韻の力的觀念即ち強弱觀念に即して言へば一つの音脚に吹きこむ揚(強)抑(弱)の音の割當を定めることである。こゝにいふ意味で音脚の諸相を區別すれば所謂格には多くの種類がある。古代作詩法で説かれてゐた種類に次の如きものがある。名稱は主として希臘式に呼んだのである。曰く

- (一) 長(強・揚)又は短(弱・抑)二個を包含せるもの。
- (a) スポンデーオス(Spondens)(— —) (b) トロカイオス(Trochäus)(—)
- (c) イアンボス (Iambus)(—) (d) ピリキオス(Pyrrhychius)(—)
- (二) 三個を包含せるもの。
- (a) モロソス(Molossus)(— — —) (b) バッキオス(Bacchius)(— — —)
- (c) アムフィマクロス(Amphimaerus)(— — —) (d) アンテバッキオス(Antibacchius)(— — —)

- (e) ダクタイロス (Dactylus) (— — —)
 - (f) アンフブラキス (Amphibrachys) (— — —)
 - (g) アナバイストス (Anapästus) (— — —)
 - (h) トリブラキス (Tibrachys) (— — —)
- (三) 四個を包含せるもの。

- (a) ディスポンデーオス (Dispondeus) (— — —)
- (b) エピリトトスの四種 (Epitritus) (— — —) (— — —) (— — —) (— — —)
- (c) イオニクス・ア・マヨール (Ionius a majore) (— — —)
- (d) イオニクス・ア・ミノール (Ionius a minore) (— — —)
- (e) デイトロカイオス (Ditrochäus) (— — —)
- (f) コリアンボス (Choriambus) (— — —)
- (g) アンティスバストス (Antispustus) (— — —)
- (h) ディアムボス (Dijambus) (— — —)
- (i) バイオンの四種 (Päon) (— — —) (— — —) (— — —) (— — —)
- (j) プロケレオスマタイコス (Proceleusmaticus) (— — —)

以上は格即ちミーターの種類であるが、このミーターの何れを用ひるにしても、数の規約が伴うて来る。例へばイアンボス格(—)で詩を書くとするればこの一組の音脚を無限に聯らねて一行を作るといふことは規則の上で許されてをらぬ。格の數を示す爲に英語では特にその格に拉典語起原の數詞を加へて呼んでゐる。例へばアイアンビク(前記イア格)・モノミーター (iambic monometer) としへば此名の指す格が一つであることを意味し、若し其數が二つあればアイアンビク・ディミーター (iambic dimeter) 三つあればアイアンビク・トリミーター (iambic trimeter) 四つあればテトラミーター (iambic tetrameter) 五つあればペンタミーター (iambic pentameter) と呼ぶ。實例について言へば次の句はアイアンビク・トリミーター (三つ繰返へ) と同じくテトラミーター (四つ繰返へ) の場合である。

(一) Grow old, along with me 即ち短(弱・抑)長(強・揚)の一組の音脚が三組だけ繰返へされて一行を作つてゐる。

(二) At last divine Cecilia came 即ち短長の一組の音脚が四組だけ繰返へされて一行を構成してゐる。

ことのある人は詩の音楽美を必ずや感じたこと、思ふ。我國語にはこの長所が大に缺けてゐる。和歌の規則には到底この長所が見出し難い。西洋の詩と支那の詩は明かに情緒と音律の共鳴を具體化したものである。支那人は古來耳の發達してゐた國民である。支那の文字は悉く四聲に分たれてゐるのもこの事實を證明してゐる。四聲とは(一)平聲即ち高低抑揚換言すればアクセントの無き聲(二)上聲即ち尻上りの聲、換言すればアクセントが終りにあるもの、(三)去聲即ち語尾の下る聲にしてアクセントが頭にあるもの、(四)入聲即ち韻なくして下が促る聲、以上四種である。次に平聲を上平と下平に分つ。これを平といふ。平なる音をいふ。而して他の三種即ち上記の上聲、去聲、入聲の或は上り或は下り或は促まる聲を仄といふ。故に聲を大別すれば平と仄の二種となる譯である。この二種類を強いて西洋式の詩形規則にあてはめて見れば平はアクセント無きもの、仄はアクセントを有するものと言ふ事が出来る。而してこの平と仄の聲を限られたる數の範圍内で律動的に組合せたのが七言絶句となり五言絶句となるのである。故に西洋の詩も支那の詩も格を單位として行を作り上げてゐる點に於て相一致し

たものがある。我國の七五調、五七調等は格本位の是等外國の詩形に似た所があるが、その音律上の妙趣は到底以上の外國物に及ぶべくもあらぬ。特に西洋の詩の平仄法(の規則)に見るが如き複雑進歩した物は一つも吾國には無いと言はざるを得ぬ。

格又は音脚を當面の問題として論究した以上はこゝにこれと關聯した押韻の規則を研究してみなくてはならぬ必要がある。

西洋の詩の押韻法は種類が頗る多いが大別すれば三種に還元する事が出来ると思ふ。次の如し。

- (一) 頭韻 (Alliteration)
- (二) 半諧韻 (Assonance)
- (三) 脚韻 (Rhyme)

先づ頭韻より述べんにこれは句の中の同じ頭字で押韻するもので子韻押韻とも稱することが出来る。英國古代の詩は殆ど頭韻法で一貫されてゐる。例へば古代のアンゴロサクソンの詩に次の句がある。

“*fysam to fore : him waes Frean engla.*”

即ち子韻 f が頭韻として用ひられてゐる。第十四世紀頃の英詩の例に次の如きものがある。(Piers Plowman 参照)

“*And as I lay and leaniéd : and lookéd in the waters*

I slumbered in a sleeping : it sweyvéd so merry,—”

頭韻の規則は古代英詩に於て普ねく用ひられてゐたものである。その當時の一般的作詩法としては詩の一行は二つの部分より成り、頭韻は第一の部分に於て重要な語の二つに於てこれを行ひ、第二の部分に於て一つの語に三度これを行ふことゝなつてゐた。故に一行の中で三つだけ頭韻が繰返へさるゝのが作詩法の一般的規則であつたとも稱し得る。(前掲の例参照)。然るに後世に至るやこの規則は次第に弛みて殆ど制限無しに繰返へされた。是に於て頭韻は下等な詩、不真面目な詩の押韻として心ある人々から排斥せられた時代もあつた。然れども頭韻の妙趣は短い詩形にありては非常に有意味のものである。特に記憶を確實にする意味に於て大に必要なるものである。日本にも此例が決して珍しくは無く、かの最も

通俗的になつてゐるものに左の例がある。曰く、

よきひとのよしのよくみてよしといひしよしのよくみつよきひとよ
くみ。

漢詩にも此例がある。曰く、

龍池躍龍龍已飛龍德先天天不違池開天漢分黃道龍向天門入紫微邸第樓臺多氣
分君王鳧雁有光輝爲報寰中百川水來朝此地莫東歸

第二種の半諧押韻即ちアソナンスは子韻が異りて母韻だけで押韻するものである。半韻押韻と銘名するのは母韻だけで押韻し子韻が押韻せざるを以てである。即ち半分だけで韻を諧へるといふ意味である。英語の詩には此例が餘り多くは無いが次の例は最も目につく。

“*O strong soul, by what shore*

Tarriest thou now? For that force

Surely has not been left vain!

Somewhere, surely, afar

In the sounding labour-house vast
Of being is practised that strength."

(The Spanish Gypsy. By George Eliot.)

テリスンは Passing of Arthur の中で次の如きアンナンスを用ひてゐる。曰く、
"Dry¹ clashed his harness in the icy¹ caves³

And barren² chasms, and all to left and right¹

The bare black cliff² changed round him, as he based³

His feet on juts of slippery² crag that rang."

即ち同数字の母韻は何れも押韻してゐる例である。

日本語は或る意味に於ては殆ど母韻のみであるともいふ事が出来る。子韻だけで獨立し得るものは殆ど無いとも稱し得ると思ふ。随つて嚴密の意味に於て西洋の詩に見るが如き頭韻も無く將たアンナンス(母韻だけ)も無い。多くはこの二者の組合せるものである。かくの如き押韻を獨乙人は語の遊戯法 (Wort-Spiele) 即ちウオルト・スピールと稱してゐる。ウオルト・スピールは所謂アンノミネーション

ヨン (Anominatin) 即ちパロノメーシア (Paronomasia) 換言すれば地口といふものであつて餘り上品な形式では無い。駄洒落に近いものである。常盤津節に「人も見送る愛嬌は、てんとおてんと天から落ちた天人かの如き、或は千代萩に「千年萬年まつた」と同じ名のつく千松が」とあるが如きは何れもアンノミネーションの例である。

押韻の第三種はライム即ち脚韻である。詩の行の語尾の語を同じ音韻で相諧へる方法である。脚韻は西洋に於てはローマンス語系即ち拉典語族の國語の詩に於て最も長所を有してゐる。ローマンス語系即ち歐洲南部の文明國の國語にありては語尾に力をこめて發音する風習がある。詳言すれば尻上りの語は拉典系の民族の共通的發音情態である。この民族性が詩の形式にも反映して脚韻に重きを置くのが彼等の押韻法の共通性となつたのである。脚韻は要するに語尾を上聲にするといふことに外ならぬ。之に反して北歐獨乙民族の發音形式は語頭を上げて語尾を下ぐるのが一般的風習であつた。故に古代の獨乙や英國の詩は句を短かく切りて押韻を句の初めに於てなすのが共通的であつた。随つて英

國の詩に脚韻法が普ねく行はれるやうになつたのは中世以後のことであつた。而も脚韻法が最も自由に行はれ最も國民的になつたのは近世初期に於てであつた。この事實に立脚して考へれば詩の押韻法は民族的のものであつてその頭韻法を用ふるも脚韻法を用ふるも皆國民的發音法に由來するものなるを證明するに外ならぬ。脚韻法は西洋の詩にはその種類が多い。日本の歌にも一種の脚韻がある。支那の詩には固より完全な脚韻規則がある。以下是等の事柄について少しく述べてみる。

西洋の詩の脚韻はその規則が頗る複雑であるが大體から見て行^{ライン}と行^{ライン}の終りに於て同韻を諧へるといふ點で何れも一致してゐる。但しそれが一行をへだて、押韻する場合もあれば各行必ず同一の韻を諧へるといふのもあつて所謂押韻の間隔は一様で無い。一言にしてつくせば西洋の脚韻法は解^{スタンザ}(Stanza)の種類によつて異なるものである。解^{スタンザ}とは行^{ライン}(Line)の結合した一組即ち一纏りをいふのである。解^{スタンザ}には三行で一解を成立してゐるものもあれば四行乃至五行或は六行・七行・八行・九行で一つの解を組立てゝゐるものもある。解が數箇集合すれば一篇の詩を成

すのである。四行で一解を組立てゝゐる場合のものに次のやうな脚韻がある。

“Sweet babe, in thy face

Soft desires I can trace,

Secret joys and secret smiles,

Little pretty infant wiles.”

(W. Blake)

然るに同じ四行の解でも次のやうな脚韻法もある。曰く、

“Gem of the crimson-colour'd Even,

Companion of retiring day,

Why at the closing gates of heaven,

Beloved Star, dost thou delay?”

(T. Campbell)

即ち最初の脚韻法はabcdで表示することが出来るとすれば第二の例はababで示めすことが出来る。此外(abcb), (abda), (aaba), (aaab), 等の押韻法もある。故に僅

に四行體の詩でもかくの如く脚韻の區別が出来ると譯である。而して是等の脚韻上の區別は何れも之を用ひてゐる詩人の情緒に關係してゐること、詩の内的律動がそれぞれ押韻の形式を變化せしめたものである。例へば前記(aaba)の脚韻の用ひてゐるテニソンの『追憶の詩』(In Memoriam)は内容の眞摯沈痛な情緒と律動の表現法とが極めて調和的に出来てゐるのである。例へば次の句にこれを窺ふことが出来る。

“I held it truth, with him who sings

To one clear harp in divers tones,

That men may rise on stepping-stones

Of their dead selves to higher things.”

亦同様に前記(aaba)の脚韻法が用ひてゐるフィッツジェラルドの『オマール・カイヤム』(Rubaiyat of Omar Khayyám)も内容の律動が詩の形式と調和してゐる點に長所を有してゐる。現實の享樂を謳歌しながらも一種哀愁の情越を寓してゐる此詩は押韻の妙技と相俟つて倍々美點を發揮してゐる。例へば次の如き句がある。

“Yet, ah, that Spring should vanish with the Rose!

That Youth's sweet-scented manuscript should close!

The Nightingale that in the branches sang,

Ah whence, and whither flown again, who knows?”

西洋の詩は平仄即ち音韻高低の規則を巧みに用ひてゐるものほど成功してゐる。平仄は詩の内的律動を最も忠實に寫すべきものである。この意味に於て前掲テニソンの句もフィッツジェラルドの句も非常に成功してゐる。即ち平仄を通じて内容の追憶的な悲哀的な多少教訓的な眞面目な氣分が明示されてゐる。然れども若し假りに脚韻上の形式が非常に活氣のある否、寧ろ喧噪的な音韻形式であつたならば是等の句は内容の美と平仄の美を悉く破壊して仕舞つたに相違ないと思ふ。脚韻の工夫は實に詩の形式上大切な條件である。

四行解^{スタンザ}の簡單な詩に於てすら既に斯の如く脚韻の踏み方に種類が多い程であるから、六行・七行・八行・九行或はそれ以上の多くの行から組立^{ライン}てられる詩にありて

は、脚韻の踏み方が實に複雑となり、その種類も多くなつて來るのは自然の數である。是等の代表的の物にはそれぞれ特殊の名が附せられてをるほどである。希臘・ローマの古い脚韻法が佛蘭西や伊太利で調節せられて英吉利や獨逸へ輸入されたものが決して少數で無い。特に英詩の脚韻形式は國民的發達と言はんよりは寧ろ伊太利や佛蘭西の押韻法に盲目的に模倣した結果生れ出たものであつて、吾國の漢詩作家が支那の押韻法を直譯的に倣ねて作詩すると殆ど同一であつた。吾國の漢詩は支那風に押韻してあるが之を吟ずる時は全く日本讀みにしてゐるから押韻の理由が頗る不徹底である。英國の詩の脚韻は之と比較すれば遙に有意味のものであつて既に前掲の一二の句に於ても其存在の必要を裏書きしてゐる譯であるが、英國國民の言語的通性から立論するならば頗る窮屈な形式である。英國の言語の發音は頭上り尻下りの特色を先天的に有してゐる。故に彼等の古い詩は何れも頭韻を踏むことを以て詩形の本體としてゐる。之に反して拉典系の國語は頭下り尻上りの言語である。故に脚韻本位の詩形が彼等の間に生れ出たのである。英國の詩人は近世に入りてよりこの尻上り國語を倣ねて脚韻本位

の詩を作ることに熱してゐた。其の結果、形式的には頗る上達して來た。英國の押韻法は一本調子の頭韻法から蟬脱して千變萬化の脚韻法に乗換へたことは英詩發達史上大に慶賀すべき事であつた。然れども英國詩人の中で眞にこの脚韻法を自家藥籠中の物とした者は果して多きを占めてをるであらうか。此點に關して吾人は多少疑念を抱く者である。但しそれは拉典系の國語を用ひてゐる伊太利や佛蘭西の詩人と比較しての議論である。若し英詩形を單獨的に考察して見たならばアングロ・サクソン時代の押韻法は到底後世の英詩の脚韻法に及ぶものではない。否、詩形其れ自身が二者の間に優劣あるのみで無くして、その運用上の手腕其物にも兩者の間に著るしき相違を生じてゐる。故に脚韻法の英國に於て發達したことは何れの方面から論じても英詩發達の爲に有利なことゝなつたのである。特に英國人は中世以來國語形式に一大改善を試み、常に拉典系の國語形式に親しむことに努力し、亦かのチャーサーや其れ以後の佛蘭西系の詩人によつてこの氣分が大に増大されてゐた關係上、ローマンス語系の脚韻上の長所を理解することが割合に確實で且つ迅速であつた。故に大體の上から見てこの脚韻法

は英詩に於て成功したものと斷言せざるを得ぬ。

次に日本と支那の場合に於て文學上から此脚韻法を考察してみやうと思ふ。日本の詩には音其物を通じて直感しうるやうな平仄（ハイダク）も無く將た押韻も無い。而してかゝる音韻上の律動美が我國の詩形に缺如してゐるといふ事は明かに作詩上の損失である。たゞ我等日本人は日本人としての傳統的審美心を以てこの缺陷を補ふてゐるのみである。外國人は彼等の心の律動を標準として我國の詩歌の形式を見たならば必然的に我國の詩形を非難するであらう。これは彼等の審美心を以てしては我國の詩形の缺陷を十分に補ふ事が出来ぬからである。吾等日本人は常に抑揚高低の少なき言語を用ひて満足してゐる如く、和歌新體詩に於ても平仄の千遍一律なる者を有して何等の不満足をも感じてゐない。否、感ずることがあつても之を忍ぶことが出来得るのである。我等は神樂舞ひや、能樂の靜かな滋味を味ふ事が出来る國民である。死の如くに靜かな能用の假面を見て言ひ知れぬ美を見出し得る國民である。黄金の燦爛たる光りを棄て、寧ろ銀や銅の滋味のある光りを選ばんとさへする國民である。故に高低の美の極めて少な

き音韻の律動を通してすら我等は心の律動を自由に動かす事が出来るのである。謠曲及び謠曲に伴ふ一切の音樂及び舞ひは我國の國民的趣味を最も忠實に表現したものであると思ふ。而してこの態度はやがて我國の詩歌の形式にも現れてゐるのである。随つて我等は外國人が想像してゐるほど詩形の缺陷を痛切に感じてゐるものではない。然れどもそれは日本人を單獨的に引離して批評した場合の議論であつて、これを絶對的の立場に於て評するならば我國の詩形は實に貧弱のものである。況やこれを西洋のものや支那のものに比するに於てをや。吾國の詩の格（メーター）は希臘ローマの古詩と同様に時間觀念に即しこの音の律動を本位として生れ出たものであると思ふ。故に音の高低強弱即ちアクセントは吾國の詩形の根本的要素ではなくして、寧ろ拍子即ちタイム（タイム）が大切なものとなつてゐる。作者の心の律動は詩歌の音韻の時間的律動と共に流動してゐる所に我國の詩歌の生命があると思ふ。而してこの精神は謠曲に最も忠實に傳へられてゐる。和歌や俗謠には往々にして押韻してゐるものがあるが、それは必ずしも詩形の重要な部分とはなつてゐない。若し押韻するといふことが我等の文學形式上の

大切な規則であるならば縦横自在に詩歌の妙を發揮することが出来なくなると思ふ。吾國の言語にありては韻の數極めて少なく、僅にあ、い、う、え、おの五種に過ぎぬ。故にこれだけで押韻しやうとすれば作詩上非常に大きな束縛をうけることとなる。英國の韻は數に於ては必ずしも多くは無いがその變化は多様である。故に押韻するに當りては大なる不便は生じ無い。我國の韻文に押韻したのもあるが短い韻文ならばいざ知らず長いものになつては押韻の價値は殆ど無い。亦我れの文學上に於ける押韻は西洋の詩の場合に於けるが如く作者が意識的に行つたものは少なく殆ど大部分は押韻しやうと思つて押韻したもので無いと思ふ。特に我が詩歌の押韻は果して詩歌の價値を高める所以となるか否かは頗る疑問である。西洋の詩は押韻したものは一般に詩として美しい感じを讀者に與へてゐる。吾國のものは之に反して押韻したものゝみは押韻しないものに比して優秀であるとは言はれない。勿論押韻したものゝ中で頗る上乘の作もある。例へば

(一) つくばねに雪かも降らるいなをかも[◎]かなしき子ろが布^{ぬい}ほさるかも[◎]。

- (二) つくばねのにひぐはまよのきぬはあれど、君がみけしゝあやにきはしも[◎]。
- (三) 信濃なる菅の荒野に、ほとゝぎす啼く聲きけば時過ぎにけり[◎]。
- (四) なつそびく海上かたの沖つ洲に、舟はとゞめん小夜ふけにけり[◎]。

(萬葉集第十四卷)

以上のうち(一)は[△]おの段の韻を以て押韻してゐる。(三)と(四)は[△]いの段の韻を以て押韻したものである。俗謡として有名な次の二句も亦押韻してゐる。曰く、
 咲いたさくらになぜ駒つなぐ[△]駒が勇めば花が散る[◎]。
 坂は照る照る[◎]鈴鹿はくもる[◎]あひの土山雨[△]がふる[◎]。
 前者は脚韻として[◎]とる[◎]即ち[△]うの段の同韻で相諧へてゐる。亦頭韻をすら踏んでゐる。後者に於ても[◎]即ち[△]うの段で押韻されてゐる以外に頭韻があらはれてゐる。◎印以外の記號は何れも頭韻を區別したものである。

かくの如く我國の詩歌俗謡にも脚韻頭韻の例は決して乏しくは無いが是等は概ね無意識的に現はれて來た諧調であつて、作者が最初から豫定してゐたことでは無からうかと思ふ。特に俗謡の如きは人心自然の要求として記憶に便利で且

つ流暢で而も活氣に溢れた形式のもの、みが流行するやうになる。故に如上の例もこの自然的原则に一致した自然の表現であると見做すべきであらう。

支那の詩は脚韻を踏む規則が整頓してゐる。たゞ西洋の詩の脚韻法に比して種類が少ないのが缺點である。頭韻は支那詩に於ては日本の和歌よりも耳と目に印象を迅速に且つ強烈に残す。古代英詩と頗る類似した點がある。例へば次の如し。

龍池躍龍龍已飛 龍德先天天不違 池開天漢分黃道 龍向天門入紫微、

又

與君相向轉相親 與君双棲共一身、

又

此日遨遊遨美女 此時歌舞入娼家、

日本の和歌の頭韻は目にも耳にも印象的でない。例へば

あひ見ての後の心にくらぶればむかしは物を思はざりけり。

此歌の頭韻はうの段で同韻を諧へてゐる所に妙味があるが(段の音なり)直覺

的には耳にも目にも印象づけることが少ないと思ふ。次の歌は音其物を通して直に頭韻の存在を知覺することが出来る。

たきの音は、たえて久しくなりぬれどなこそ流れてなほ聞えけり。

然れども次の例は餘りに細工がすぎて音韻的には餘り美しいとも思はれぬ。

かくの如き例は西洋の詩にも澤山ある。即ち頭韻で種々の名を讀み込んだり、又は諷刺的の文字を寓することが多い。

からごろもきつゝ慣にしづましあれば、はるばる來ぬるたびをしぞ思ふ。

業平朝臣が頭韻的技巧を種々に應用して、かきつばたの五字を訓み込んだ所に手腕があるが、音韻的には果して成功してゐるか否かは疑問である。西洋の詩ではかゝる細工を一種の遊びごと、しか見てをらぬ。

支那の詩は連鎖韻とも稱すべき押韻を用ふることに長所を有してゐる。これは獨乙語系の詩形にも見ることが出来るもので所調ケッテンライム (Kettentrüm) と呼ぶものがそれである。前きの句の最後の韻と同じ韻をその次の句の首に置くがこの押韻法である。支那の詩は此の押韻に成功してゐる。例へば前掲の

龍池躍龍龍已飛 龍德先天天不違

或は

胡人向月吹胡笳 胡笳怨兮將送君

或は次の如きものがある。曰く、

布衣輕故人 故人有湮淪

支那の音韻法則は日本のものよりも遙に完全してゐるといふことが出来る。

以上西洋・日本支那の作詩上の規則、特に音韻を本位とした規則の大様を紹介した譯であるが、音韻の律動から生ずる吾人の感情は是等の詩形のうちに遺憾なく集めうるとは斷言することが出来ぬ。人々の感情及び意識の状態は嚴密な意味に於て決して一つの纏つた形式の中に統一することが出来ぬものである。故に假りに平仄の形式が() 即ち弱強格であつたとすればそれに對する各人の感じは必ずしも總ての場合に於て同一であるとは言はれ無い。その場合() に應じて各個人の感じに相違のあることを豫想しなくてはならぬ。然れども大體の上

から推斷して極めて概括的な結論が下され得ると思ふ。ドロジニスキ氏の心理學的研究によれば古來音韻の律動原則を説いてゐた多くの學者の議論は單に音の強弱高低をのみ研究の對象に置いてゐてテンポの速度を等閑視してゐた弊がある。ドロジニスキ氏はテンポの速きもの、中位のもの、遅いもの、即ちこの三種について實驗を試み、音の律動と感情の關係を考查することに渾身の力を注いだ。同氏のテンポ速度の標準は速いものを〇・二六乃至〇・二八秒となし、中位のを〇・三三秒となし、遅いものを〇・五〇秒となしてゐた。今この三種によつて同氏が考查した事をもととして英詩を観察すれば次の如きものがある。

先づ強弱格即ち前記の(下)の記して表示し得るもの、換言すれば前掲の Trochee (英語でトロッキと呼べるミロッキ) は中位の速度のテンポに於ては興奮した情緒と快感とを結合した氣分を表示する形式である。予は同氏のこの説が英詩の場合に最も適合することを認むるものである。英詩に於て此格は輕快にして流動的な情緒を表

Bacchus | ever | fair and | young.

言語學況論

この句は青春と酒と快樂の神バッカスの性質を表示してゐるものであるが、音韻調節の長所は明かに此句の意味を印象的になしてゐる。然れどもテンポが稍遅くなれば内省的な氣分を現はす事となる。例へばアーノルドの *Forsaken Me-man* や *Rugby Chapel* にこれが現はれてゐる。

次に弱強格(一)は前者と反對のものである。前記 *Iambus* 即ち英語で *Tambic* と稱せらるゝ形式である。テンポの速度が餘りに増す時は不快と興奮の氣分が伴つて來るが速度が減少すれば緊張を増して來て興奮の氣分が著るしく増大して來る。中間を得てさへをれば雄大な情緒が伴ふものである。例へばバイロンの傑作『シヨンの囚人』(*The Prisoner of Chillon*)の一句に左の如き雄大莊重の調が宿つてゐる。

“There are sev | en pil | lars of Goth | ie mould.”

亦テンポの速度の増減によりては内省的又は物語的の句を潑刺たるものとなすことも出来る。テニヌンの *The Idylls of The King* とミルトンの傑作 *Comus* 及び *Penseroso* 等は何れもその典型である。英詩の有名な物はこの弱強格で書かれ

たものが多い。前述強弱格の輕快なるに比してこの弱強格はどつしりとした氣分に溢れてゐる。

次に強強格(一)即ち前記 *Spondens* は重い感じを與へるものである。テニヌンの句に次の如きものがある。

“With an | empire's | lament | tation,”

葬禮の感じを述べるには適當してゐる調を帯びてゐる。

次に弱弱格(一)即ち *Pyrrhæus* を見るに強強格とは全然反對の形式を有してゐる。平坦な感情を宿すものである。

強弱弱格(一)換言すれば *Dactylus* は最も美しい形式である。前記 *Trochæus* (一)と殆ど同類形式に入るべきものであるが、それよりはもつと流動的な氣分、もつと輕快な氣分を與へる。上品な氣分もこの格に伴ふてゐる。例へばロングフエロ一の *The Evangeline* の中に次の例がある。曰く、

“This is the | forest pri | meval, the | murmuring | pines and the | hemlocks,”

輕快流動の氣分を遺憾なく發揮してゐる例は『一里半なり一里半』(*The Charge of*

み真なるに非ずして日本人と日本の詩歌の場合、或は支那人と支那詩の場合に於ても同一であると思ふ。特に吾國の母韻の如きは音其物に感情的表現が多量に宿つてゐると思ふ。支那人が音韻に對して鋭感性を有してゐた事は既に予の述べた如くである。而してこの鋭感性なるものは他の一面から觀察するならば音韻に對する情緒的聯想の極めて鋭敏なることを意味するものである。故に支那の詩形は情緒の律動と密接不離の關係に立つてゐるものと評しても大過なき事と思ふ。西洋の心理學者や美學者は……例へばヴントやリップスの如き大家は音韻の律動美や藝術上の律動形式の美的意義に關してそれぞれ貴重な研究的貢獻を社會に提供してゐる。然れども音律動の形式と情緒の關係をテンポの原理から論究し、或は人類各個人の主觀的狀態に即しての此方面の説明は未だ十分なるものが試みられなかつたやうである。これ等は今後なほ殘された問題として心理學者や藝術家や音韻學者の研究をまたなくてはならぬ。

* * * * *

ちゆう、ちゆう、雀がぶらんこに乗つてゐる。

山茶花

横むき、前むき、うしろむき。ちゆう、ちゆう、雀が鳴いてゐる。

雀、雀、ぶらんこ好きか。さあ、さあ、お乗りよ、貸してやる。

風のおぢさん呼んで来て、しづかに押しておむらひな。

どれどれ、私も押してやる。

* * * * *

言語研究の将来

言語學の前途はなほ多忙である。心理學から離れ、人類學地理學から獨立して一人前の仕事をなし得る迄には、まだまだ多くの時日がある。然るに言語の教育的立場は日一日と教育界に重きをなさんとしてゐる。科學として重みを置かるゝ以上は、其れ自身で自己の生立ちを明かにしなくてはならぬ義務がある。言語學者の仕事はこれ迄のやうに少數の者だけで而も世間と沒交渉で行はるべき譯のものでは無い。今日は實際的の大きな問題をこの仕事の中に包含してゐる時代となつた。言語學の將來は遠いが課せられた仕事は急を要するものゝみである。吞氣であつてはならぬ。

言葉の教授

言語教授論

第一章 言語教授の教育的価値

言語の教育的価値は言語の種類即ち國語であるか外國語であるかによりて多少異なる點がある。亦國語の發表形式の區別例へば言語が音となりて發表されてゐるか、文字となりて表現されてゐるかによりて教育的価値に多少の相違を來たすものである。同様に言語發表の標的が性質上差別を生ずる程度に準じて教育的価値を異にすることもある。例へば言語で發表された内容が文學的であるか科學的であるかによりて言語教授の教育的価値が異なるが如きはそれである。かくの如くたゞ漫然と言語といふてもその種類形式性質等に於て大に複雑した

ものが包含されてゐる。故に言語の教育的価値を論ずるに先ちて是等の言は、言語各分科の内容なり特色なりを考査する必要がある。然れども是等の分科的の事柄に關しては不完全ながらも既に前篇言語の研究、即ち言語學汎論の各章に於て述べたことであるが故にこゝで再び同一の問題に就いて説くことを省き度い。言語を頗る廣汎な意味に解して極めて綜括的にその教育的価値を説かうとするのが予の目的である。

言語教授の教育的価値はその言語が邦語であると外國語であるとを問はず、或はその形式が音その物であると文字であるとを問はず、將た又それが文學書であると科學書であるとを問はず、被教育者の思想を整頓し、文化生活に親しましめんとする所に眞の値打が存在してゐる。被教育者の思想を整頓せしめるといふ意味の中には被教育者をして自己の思想を口又は筆を以て正確に明確に將た流暢に且つ有效的に發表せしめるといふ自然的結果が包容されてゐると同時に、他人が口又は筆を以て發表した思想を確實に又迅速に了解せしめるといふ事柄も包含されてゐる。自己の思想を發表するにしても、或は他人の思想を理解するにし

ても、要は自己の思想の整頓といふ事柄に歸着する。思想整頓の實體相は是等の種々の箇條になつてあらはるゝに過ぎぬ。次に文化生活に親しましむといふ意味は最も手近き例をとつて言ふならば自國の文學や外國の文學を味ひ、或は一般の思想上の書物を讀むことが出來たが爲に文化生活を營み、所謂人道的に或は人文的に教化され得たといふことである。以上の如く言語教授の教育的価値は被教育者の思想の整頓と文化生活誘入の二點に存するものであるが、かゝる効果は觀察の仕方によりては他の學科といへども收め得るものであると稱し得ざるにあらず。例へば數學科の如きは思想の整頓に効果あるものである。廣い意味に於ての歴史科は文化生活を理解せしむるに有益な學科である。然れどもかくの如き議論は極めて見界の狹小なることを裏書するものである。數學科は論者の言ふがごとく思想の整頓を習慣づけるには効果がある。然れどもそは數の觀念に即しての思想整頓といふことに局限されてゐる。吾人は數學科の必要を認めるものではあるが從來のやうにその教育的価値を廣汎な意味に於ての思想、換言すれば普遍的の意味に於ての思想整頓といふ所に置かんとする説には大に反對

する者である。數學科が思考又は推理力の精密確實ならんことを被教育者に習慣づける點に於て價值がある。注意力と觀察力の訓練といふ點に於ても價值がある。然れども是等は單に數學科のみが獨占し得る長所では無い。随つて是等の所謂長所又は特色といふものを、抱括的に銘名した思想整頓といふやうなことは必ずしも數學科のみに授けらるゝ名譽の賜物では無い。數學科の教育的使命はどこ迄も數の觀念に即しての局限されたる思想整頓に繫依すべきものであらねばならぬ。言語教授は言語と思想との矛盾なき統一を目的としてゐる。言語無き思想、思想無き言語は吾人の到底認識し得べからざる事柄である。故に言語科の使命は人類の全體性に統一をつけるといふ點に存在してゐる。これは如何なる學科といへども所有し得ざる特色であると思ふ。次に文化生活誘引の利益に就て述べんに、歴史科の如きは最もこの使命を果すに都合よきものである。然れども歴史科の當面の目的は過去の思想の時に即し、民衆に即し、場所に即しての総合的推斷又は摘出であつて、決して言語科で爲すやうな時に捉らはれず、民衆に捉らはれず、場所に捉らはれざる分析的解説で無い。随つて古今の區別を設けず

して自由に大きな時間の領域を濶歩し或は民衆又は多數の人々の意思表現のみに固執せずして個人の思想にも多大の敬意を表し、或は或る空間のみに執着せずして何れの天地にも文化の果實を收穫しやうとする態度は歴史科には多少缺如してをる事柄である。特に文化の分析的解説は到底歴史科の爲し得ざる仕事であると思ふ。或る特殊の文學を詳細に解説してその作品を通じて現出してゐる國民又は個人の内面的氣分を被教育者に教授するが如き事は歴史科の目的とするところでも無く、將たこれを目的としやうとしても達成し得ざる事柄である。この點に歴史科と言語科の使命の相違があると共に教育的價值の差も存するのである。

以上は大體の上から見た言語科の教育的價值である。これより言語科の内容上の區別を標的としてその價值や使命を考察論究して見る。先づ國語科に就て述べてみやう。

國語科は教授の對象として國語を取扱ふものである。國語科は小學校に於け

る各科目の中で最も重要な位置を占むべきものである。それは何れの國民にありても自國の言語を用ひて自らの思想感情を發表することが自らの生存其れ自身と同様に緊要な必須事件であるからである。同様に自國民の思想感情の表現を知る爲にはその言語を理解することが何よりも必要であるからである。國語科の教育的使命は此意味に於て國民の生存それ自身の手段を授ける所に存在してゐる。他の學科に比して絶對的價值を有してゐるのは實に國語科のみであるといふことが出来る。國語科はこの重要な責任を遂行する爲に三つの仕事を完全に行はなくてはならぬ。即ち(一)自己の思想を口又は筆を以て正確に明確に將た流暢に發表することが出来、(二)他人が口又は筆を以て發表した思想を確實に將た迅速に理解し、(三)國民的な優良な文學を味識して自己の精神的財産として取入れ、これによりて國民的文化生活に誘引されなくてはならぬ。以上の三つを被教育者が國語教授によつて體得すれば國語教授の眞價が教育的に認められたこととなるのである。而してこの三者を國語科の各分科に割當て、見れば(一)は話方及書方綴方の教授に於て達成し得らるべきもの、(二)は講讀讀方又は聽方によりて

實現し得らるべきもの、(三)は講讀音讀聽方話方所作事唱歌等によりて目的を達し得るものである。

國語科は教育的價值の最も大なるものを其れ自身の立場に於て所有してゐることは何人といへども是認するところである。然れどもこれを餘りに重大視しやうとした結果、却て國語科の眞價を下すやうな結果を將來した學説が東西何れの文明國に於ても其實例を見出す事が出来る。而して此種の言は、偏頗な國語尊重論は外國の思想が自國內に横溢した時にその反動として唱へられたものが多い。外國の思想を自國の思想に取入れるだけの精神的雅量の無い國學者、乃至は外國の優秀な思想に對抗するだけの能力を所有してをらぬ淺學の國學者が、國粹論者といふ美名の下に隠れて外國の思想や外國の言語を排斥しやうとする時に、自國語の尊重すべき理由を遺傳的に高唱する場合が頗る多い。ゲーテが言ふた如く、自國語の貴き所以を知る者は自國語のみを知つてゐる狹量な人にあらずして、寧ろ外國語を了解してゐる人にありと評すべきである。物の貴きを知らんとすれば比較によらなくてはならぬ。國學者の間から唱へ出された國語尊重論

は眉唾物であると思ふ。亦國學者にあらざる教育學者の間にもこの種の偏狹な國語尊重論が唱へられたことがある。而してその説の唱へられた理由を考察するに多くは國家的事變に促されて國家的教育論の出現を必要とする事情があつたからである。例へば一八七〇年に普佛戦争によつて大敗した佛國が近世國家主義の教育界の權威者フイエーの國語尊重論を生んだ事や、大戰前の獨乙政府が國家統一の外的事情に迫られて外國語驅逐の暴舉を斷行したやうなのが適例である。而して是等は何れも失敗の歴史を残してゐる。吾國に於ても明治初年以來此種の狹量な國語尊重論が唱へられたことが屢々あつたが、その運動が實際的には餘り効果が無つたやうである。フイエーの説によれば國民教育の根本は國粹思想である。佛國の國粹思想は佛國の古文學及びその源流たる希臘及拉丁の古文學の中に宿つてゐる。近世の語學或は近世の文學、就中、英獨の文學は假令其れ自身に於て大なるものであるにせよ……沙翁やゲーテ又はシルレルの大文學といへども益なし……佛國民を養成するに何等の利益をも與へるもので無い。佛國の固有の精神は古代から傳統的に來てゐるものであつて、智的にも

道徳的にも將た審美的にも或は政治的にも最も永續性に富んだものである。この精神は即ち國粹と銘名すべきものであつて獨り佛國の古文學にのみ見出さるべき財産である。故に佛國民の教育上最も必要なるは佛國の古文學及び國語である。外國の思想や言語は國民精神啓發の上に何等の利益無きのみならず却て害を興へるものである。フイエーの此説は一面の眞理はある。然れども狹量な説たることは辯解の餘地が無い。若し此説を是認するならば思想上の鎖國主義を固執して若き國民を教養しなくてはならぬ。眞なる意味に於ての國粹は決してその國民の過去の精神にのみ局限さるゝものではない。過去の精神の醇なるものをのみ固守することが國家教育の本義であるならば國民の精神に新しみが加はることが出来ぬ。進歩の階梯を見る事が出来ぬ。國民思想の開發は祖先の美しき精神に立脚して新たなる氣を加へんとする向上努力に繫依してゐる。フイエーの國粹論は其動機が正しかつたにもせよ極めて狹量の説であつたことが明かである。獨乙の言語教授が近年に至る迄國家的、換言すれば排他的といふ意味に於ての國家主義で一貫されてゐた事は何人も認めてゐる事柄である。

但し小學教育に於ては、國民に強ゆるに獨乙の政府はこの排他的國家政策を以てした。國語尊重といふことが其儘の姿で外國語驅逐といふ事に解されてゐた。國民は政府所定の言語形式以外のものを用ふることをあれば科料に處せらるゝといふ有様であつた。獨乙の文運はかゝる不自然な政策によつて國家的に發達した。然れども人道的に將た社會的に此國の文化は如何程迄に進歩したであらうか。大戰を通じて見た獨乙の文化は極めて鎖國的のものであり、極めて反人道的で反社會的のものであつたことが證明されたでは無いか。故に國語科の尊重といふ意味が頗る寛大な度量を以て解釋しなくては國民教育の上に却て災厄を與へることとなる。

國語科尊重の理由を言語的見地から論じた學說の中で最もいや味の無いのはパーカーの議論である。スタインタールやヴント等と同様に言語の本質論と心理學とに立脚してゐる所に面白味がある。徒に愛國的といふ美名の下に立論したり、國語尊重論者といふ看板の影を追うて行く學者の説より遙にあつさりとした所がある。その最も特色ある點を掲ぐれば言語は人類進化の過程と密接不離

の關係に立つてゐる者で、言語なければ思想なしとさへ稱し得ると斷言した所にある。即ち言語は思想其れ自身であるが故に言語教授特に國語科の小學校に於ける位置は頗る重大なものであると斷定した所にパーカーの特色がある。その説く所によれば言語と思想との關係は精神と身體との關係に類似したものがあつて、身體の態度及び身振りは精神の性質及びその身體の上に及ぼす影響を表示するものである。種々の精神は無意識的に吾人の全身を動かすものである。故にこの事實を延長して考察するならば精神は常に肉體を支配するものであると斷言することが出来る。同様に精神の肉體に及ぼす影響は肉體の諸機關を通じて表明されるものであるとも稱し得るのである。この意味に於て精神は常に肉體を創造してをるものである。言語を創造した人民と言語との關係は精心と肉體との關係に類似したものがあつた。故に言語の發達した國民は思想の發達した國民であることが明白である。こゝにいふ意味で言語を解釋するならば言語學は文化學とも稱し得る。言語を研究することがその言語を用ひてゐる國民の文化發展の過程を研究することに外ならぬ。國語科の教育的價值はこの立脚地に立

つて定めらるべきものである。即ち精神活動の合理的で且つ審美的な心相がそれと調和的な言語形式を通じて表示さるゝやうに被教育者を導くことが國語教授者の使命であらねばならぬ。パーカーは一般の國語科教授がやゝもすれば偏狭な國語尊重論に束縛せられ、徒に國語の形式をのみ教授することに努力し、言語と思想の間に密接な関係があることを等閑視してゐることを攻撃してゐる。パーカーの根本思想から言ふならば、話方及び綴方は國語科に於て重大な位置を占むることゝなる。それは被教育者の思想上の活動が話方と綴方とを通じて最も有効的に表示さるゝからである。而してこの思想を徹底せしむる爲に國語科の教員は兒童に思想の活躍を促す必要がある。兒童が活氣のある精神活動を生ずるやうに教授者が誘導し、常に兒童をして發表的氣分に充實せしめるのが最も大切な事である。パーカーは國語科各分科に就て最も實際的な説を發表してゐるが是等はこゝで管々しく紹介することを省く。たゞ國語科に對する根本觀念を紹介するのが予の當面の目的であつた。言語學的基礎に立脚して國語科教授の理想を明快に説いた所にパーカーの長所がある。その發音教授や朗讀教授に關

する學説は多少非難すべき點もあるが、言語教授は思想と分離しては成り立ち得べきもので無いといふ根本理想そのものは國語科の各分科論に互つて一貫してをるものがある。

フレイベルの國語科に對する説も吾人にとりては頗る興味あるものである。言語科の教育的價值を定むるに當りてこの教育界の巨人の説を一通り知ることには必ずしも無益の事ではない。フレイベルの國語科に關する見界はパーカーのものに比して餘りに抽象的で餘りに主觀的である。言語其物の立場に於て論じたといはんよりは寧ろ唯神論的立場に於て論斷した傾向がある。隨つてその所論の真相を捕捉することは容易で無い。晦澁の點が決して少なくは無い。蓋し餘りに深遠の思想に充實してをるのであるか、然らざれば言語學に對する理解が餘りに抽象的方面に濃厚になつた結果であらうか。その論ずる所によれば言語はこれを話す人の自己表示である。而して人類は自然の産物であるが故に言語は自然其物の性質を表示したものであらねばならぬ。この意味に於て言語は人類の自己表示即ち内部の表現されたものであると共に外界を表現したものであ

る。この事實は恰も數學が内外兩界に關係してゐると同一である。且言語は人間の思想表示であるのは恰も自然が神の意思表示であるのと同一である。又言語が人類の思想の表現であるのみならず、自然其物の表現であるのは、人類と自然の精神は共に同一のものであつて等しく神から出たものであることを證明する所以である。故に言語は人類と自然の意思及び知識を含み、その全體性としては神の意思を表示してゐるものである。随つて言語を教授するといふことは人と自然の契合、即ち神の調和的意思を授くる事に外ならぬ。言語は本質的にいふならばかくの如く神意を最も忠實に表示してゐるものであるが、言語の音韻その物は各、異なりたる使命を帯びて神の意思を代表してゐるものである。例へば母韻は神の内部的純一性を表示してゐるものであるが故に人類の口を通じて發せらるゝ時は神の自己表示即ち人類の純なる意味に於ての思想表示となるのである。之に反して子韻は外部的個性を表現してゐるものであつて、人類及自然の各個性が遺憾なく表示されるものである。神の意思が人類及自然に移つされてそれが種々様々の色彩を帯びて外的に表現さるゝ時は吾人の所謂子韻なるものが

生じて來るのである。故に子韻は個人を研究するに最も必要なものである。母韻は渾然とした統一相を表示してゐるのに反して子韻は差別相を表示してゐるものである。而して半母韻は此兩者の中間に立つものであつて兩相を具備してゐる。かくの如く發音其物は決して物理的又は生理的のもので無くて、何れも人類の内部的生命から發生したもので極めて意味の多い、極めて情趣の多い複雑性を帯びたものである。特に國語の音はその國民にとりて最も親しまれてゐる關係上、この複雑性が極めて濃厚につきまとうてゐる。故に國語科の教育的立場はこの點に着眼して國語の音韻的感化を被教育者に授けることにあらねばならぬ。國語の文字と音韻に多大の注意を拂つて教授することが國語科教授の最も大切な點である。就中、音韻の律動即ちリズムに對しては教授者たる人は深き理解を有してゐなくてはならぬ。リズムは言語の各音に必ず先天的に存在してゐると共に、纏りたる句又は文にも明かに存在してゐる。リズムは或る意味に於ての言語の自然的本性であると共に言語の生命とも見做すことが出来る。兒童は言語的リズムに對して殆ど先天的と見ゆるほどに興味を有し且つ理解を有してゐる。

故に國語教授者はこの點に最も細心な注意を拂つて兒童の音律上の理解を迅速にし且つ純潔なものとしてやらなくてはならぬ。

フレーベルの言語に對する根本觀念は明かに唯神論的である。音韻に關する解説の如きは最も興味のある内容を包含してゐる。今日流行してをるやうな機械的な聲音學に比して遙に内面的色彩を多く有してゐる。然れどもフレーベルの議論は言語學の科學的智識に缺如したものが多々ある。これはフレーベルの爲に惜むべき事であると思ふ。言語教授の教育的價值を定むるに當りて神と人と自然と言語即ちこの四者を相契合せしめたのは或る意味に於ては大規模の立論ではあるが、或る意味に於ては既にその出發點に於て餘りに概括的で餘りに唯神論的であつたとも評し得ると思ふ。

言語を心理學的立場から論究し、或は言語學の立場から心理學を論じ、さらにその研究の結果を教育的に應用した學者は十九世紀以來英獨佛特に獨逸に多く現れてゐる。それ等の中で言語學の方面から見ても重要な位置を占めてゐる人々の名や學說の大様は既に前篇に於て予の述べた所である。教育的にこの問題を論

じたもの、中でも大に傾聽すべき説が多い。予が今述べたフーイヤーにせよ、パーカーにせよ、フレーベルにせよ、何れも各自獨特の立場に於て教育史上に大なる貢獻をなした人々である。但し予は此三人を掲げて佛英獨の言語教授の大勢を紹介しつくしたと自認する者では無い。此三人の説は言語教授の根本精神を最も明白に且つ端的に發露したものであるが故に特にこゝに紹介したに過ぎぬ。言語の教授上の問題や教授法に關する研究等はルーデを筆頭に獨逸の殆ど各教育者は發表してゐる。吾人は是等の研究によつて國語科教授法の上に多大の恩恵を被つてゐる。然れども予のこゝで取扱はんとする問題は言語の教授法や言語各分科の細目にわたつての取扱方に關する事項では無い。言語の教育的價值といふ根本問題に關する事柄である。故に教授法に關する一切の問題は省略し度い。

予は亦言語の教育的價值を結果の上からのみ定めんとする者でも無い。言語教授の結果をのみ唯一の材料としてその教育的價值を定めるのは見様によりては非常に危険な遣り方である。結果は必ずしも原因の全部を裏書するものでは

無い。結果の善悪は常に原因の良不良と正比例するとは限定されぬ。然るにこの一見見易き事柄が較々もすれば賢明なる學者によりて裏切らるゝ場合がある。比較的の小範圍にわたつて行れた統計や、或は部分的の心理學的考查には折々此種の冒險的推斷が伴隨するやうに思はるゝのである。英國心理學者スピーヤマンの心理學的考察によれば古典語や外國語の出来る生徒は智能も發達してゐるといふ事である。スピーヤマンは誰れも知る如く近代の最も眞摯な最も篤學な且つ最も卓越した心理學者である。故に吾人はその研究に對しては固より敬意を表する者である。然れどもその議論の出發點は大體から見餘りに結果に重きを置き過ぎてをるやうにも思はるゝのである。吾國心理學界の一大權威者松本亦太郎博士も前述スピーヤマンの研究紹介と共に同博士が親しく東京府立第一中學校四年生に就て智能測定を心理學的に考查し、その結果を發表されたことがある。言語問題と直接に關係があるから左に同博士の『智能の相關』中より參考になる部分を抄録する。曰く、

「先づ假りに總點數を以て學生の一般的智能を最もよく示すものである。斯う

私も世間並に假定して見る。さうして此總點數と諸々の學科に對する成績との相關を一中の四年生に就て測つて見ました結果はこゝに擧げた通りであります。即ち

語學數理	.85	何史語	.81	文畫文理物	.70
	.85		.76		.70
	.83		.73		.69
	.83				.69
					.68
英化代物		幾歷國		作圖漢地博	

即ち總點數と英語、總點數と化學、こゝにいふやうに別けました。さうすると總點數に對して一番關係を持つてゐるものは英語で、是は係數が〇・八五になる。其次は化學で次は代數、物理、是等が總點數に一番關係を餘計に有つてゐる。是等は八五乃至八三であつて大に關係が深い。其次の幾何、歴史、國語、この三者は八一乃至七三であります。それから作文以下博物で、博物は六八で、關係があることはあるが重大な關係は無い。博物などで高等學校の選抜試験に失敗した人があるとするならばそれは寛恕しても宜い。大體の智的才能をさう代表してゐるものではない。地理博物等の暗記學科を他の學科と同じ様に取扱つて、大體の智能を表す

ものであると云ふやうに均一に取扱ふのは考へ物である。英語化學代數物理等は總點と深い相關があるから是等の學科で出来る生徒を採つて置けば大抵間違は無い。此邊で極めて採れば中らずといへども遠からず所では無く、八〇%は先づ間違は無いと見ることが出来る。選抜試験の事は吾々の今茲に論じやうと思ふ事では無い。これは別問題で更に委しい考察を遂げた上で斷案を下さねばならない。それは措きまして以上の結果を見ると先づ一般才能を代表してゐると假定した總點に、各智的作業の表はす關係が斯う云ふやうに段階になつて現はれて来る。上から下の方が段々下つて、上の方が關係が多く、下になるだけ段々關係が少なくなつて来る。相關が下の方になるに隨つて薄弱になつて来る。之を見ると諸々の智的作業には先程申しました通り共通に必須的の要素が含蓄されてゐると見られる。而も其必須的要素といふものは、總點數中に最も能く代表されてゐると考へて差支無いと思ひます。智的の働きを營むのに極く必須的の、如何なる場合にも現れて來なければならぬやうな共通の要素は、總點數の中に一番多く含蓄されてゐる。其共通の要素の分配を餘計に受ける智的作業程、總點數に相

關の度が多くなる。だから吾々の心に先づ一般智能といふものがあるとするれば、其智能の分配を受けてゐる事の多いものほど總點數に關係が多いといふことになる。段々下るに隨つて一般智能の分配を受けることが少なくなつてゐるといふやうに認められる。そこで大體此結果を見ると、吾々個人には一般智慧といふやうな根本的の智能があつて、それが段階的に諸々の智的才能となつて發現して來るのではあるまいかといふ考が出て來る。一般智能といふものが根本に存在してゐて、それが種々の働きに表はれて來る。その發現するのは段階的になつてゐる。一般智能の姿を最もよく表はすものと、それ程表はさないものと、極く微かに表はして來るものと、云ふやうに一般智能の實現が模様を變へて段階的に表れて來る。抑も人間の智慧の根本になるものがあるといふ考は、是は必理學哲學の方面に於て随分古くから出てゐた考でありますが、相關係數の測定といふやうな分量的の研究を基礎にして、一般智慧といふものが存在してゐるのであるといふ説を立てたのは英國の心理學者のスピーマンといふ人であります云々。

松本博士の心理學的智能測定によれば少なくとも吾國中等學校生徒の一般智

能の總點を支配するものは言語特に英語科及び化學等の所謂數理觀念に立脚せる學科である。國語科が英語科に比して遙に下位にあるは意外とする所であるがこの場合に於ける國語科なるものは小學校に於ける國語科と比較して言語科としての色彩が弱いものと見做さなくてはならぬ。即ち言語としての國語といはんよりは文學的又は文法的の意味に於ての國語が中學校の上級に於て教授されるのである。随つて嚴格な意味に於ての言語科的の國語科は中學校上學年に於て見る事が出來ぬのである。言語教授の眞髓は吾國中學校の上級にありては國語科に非ずして寧ろ英語科にありと評することが出來ると思ふ。故に前掲松本博士の所謂國語科なるものは言語科として見るよりは寧ろ他の意味に解するのが穩當で且つ實際的であると思ふ。英語科は全然これを言語科と解してよからうと思ふ。かくの如き意味に英語科と國語科を解釋して見るならば言語科は智能の總點を支配する大きな力を有することゝなる譯である。故に結果論から言ふならば言語科は中等學校に於て最も重きを占める資格があるものと斷定することが出来る。少なくとも教育的價值の最も大なるものを有してゐると斷言

することが出來ると思ふ。然れどもかくの如き智能測定の結果は果して何れの場合にも適用し得らるゝものなりや否や。こは頗る疑問とすべき事柄である。言語はその種類も多く其分科的性質も互に異なり且つこれを授けらるゝ生徒の年齢其他外的事情によりてこれを獲得する程度内容も著るしく異なるものである。故にこの種の心理學的測定法は果して如何なる程度迄普遍的法則を吾人に指示すべきものであるか容易に判決し得ざる事柄であると思ふ。吾人は松本博士の實驗成績によつて大に啓發せらるゝ所があつたが未だこれを確定的のものとして言語教授法に取入れる勇氣は無い。況や此説を利用して英語即ち言語科の教育的價值を力説するに於てをや。

外國語の教育的價值は既に前にも述べた如く言語の教育的價值の中に當然包括されてゐるものである。即ち思想の整頓と文化生活への誘引といふことが教育的價值の主なるものであらねばならぬ。たゞ外國語の場合にありては國語科と異なりてその教育的價值を定むる對象が内にあらずして外にあるといふこと

が認めらるゝのである。即ち國語科が言語科の内面を表示するものであれば外國語科は言語科の外面を表示するものと稱し得るのである。二者共に言語科たる點に於ては同一である。たゞその表現の相を異にするに過ぎぬ。外國語科の教育的使命は被教育者の思想を深く且つ廣くし、國語以外の形式を用ひて思想の發表法を授け同時に外國の思想を取入るゝ道を授け、或は外國語學習の手段によりて自國語を精確に理解せしめ、或は廣汎な意味に於ての世界的文化に接近せしめ、或は外國語研究の手段によりて精神上の訓練を授ける事等が主なる目的である。而して是等の目的は詮ずれば予の所謂思想の整頓と文化生活への誘引といふ事に結晶して仕舞ふのである。思想が種々の形式を帯びて種々の過程を経て系統的に調和的に統一され整頓さるゝならば言語科の大きな理想が實現された譯である。而してこの整頓された思想が文化生活へ導かれ、人文生活へ誘はるゝならば、そこに言語科の教育的使命が遂行されたこととなる。文化生活・人文生活の内容としては眞・善・美の三つの大きな力が種々の相を現じて不斷に動いてゐる。而してこの三つの力に共鳴する資格があるやうに被教育者を育成するのが言語

科の教師の天職であらねばならぬ。言語科は言語それ自身の立場に於て眞とし、善とし、美とせらるゝものを教育者は被教育者に授けるのが其使命である。其所に言語科の教育的價值が存在してゐる。外國語を教育的に取扱ふとする爲には特にこの點に注意を拂はねばならぬ。就中、美といふことを言語的に尊重しくなくてはならぬ。外國語とさへいへば徒に外國の知識を取入れるに必要な手段のみ授ければ十分であると信じてゐる者は我國の知識階級に多い。故に我國に於ては外國語教授の改良を企つる一手段としてこの功利的見界を打破することである。教育的に外國語の價值を高めやうとするならば皮相な功利説は根本から打破しなくてはならぬ。外國語の價值を教育的に高める手段としては審美的要素を濃厚にしなくてはならぬ。例へば外國語の音韻を通じて美の意識を啓發し、或は外國語の教科内容を通じて情操の陶冶を試みるが如きは焦眉の急である。現在の中學校に於て普ねく行れてをるやうな受験英語の教授、方程式様の机上英語の教授では到底美的觀念への誘導は行はれ得べきもので無い。

第二章 言語教授法の歴史的考察

言語教授は其対象が國語であると外國語であるとを問はず古來さまざまの方法によつて試みられた。現今に於ても教授の方法は必ずしも一定したものがあるとは斷定することが出来ぬ。教授法は絶對的のものでは無い。常に時代と共に變じ、対象物と共に推移するのが寧ろ自然の數であると思ふ。何々の教授法によらなければ教育的効果があらぬと斷定するのは頗る不合理なことである。教授の方法は相對的價值によつて優劣を定むべきものであつて決して絶對的の價值を有するものでは無い。而してこの事實は歐洲に於ける言語教授法の歴史を考察することによつて明かにすることが出来る。

言語教授の中心點は讀書にあることは論ずる迄も無く明かな事柄であると思ふ。國語に於ても外國語に於ても讀書は言語科の各分科を綜合する重大な職責

を有してゐる。故に讀書教授法の歴史的考察は或意味に於ける言語科全體の教授法を考察することに外ならぬ。西洋に於ける讀書教授法は獨逸の教育學者によつて改善せられたものが多い。今日吾人が國語科及び外國語科に於て實際的に用ひてゐる教授法なるものは多くは獨逸に於て發達したものである。獨逸で新しい教授法が行はれるに至つた以前迄は歐洲の各國は概ねアルファベットの教授に重を置いてゐた。即ちアルファベット即ち日本でいふならば、*あ、い、う、え、お*の各文字の名前を教授し、これを語に結びつけしむることを以て言語教授の根本方針と見做してゐた。例へば英語でいふならば、*dog* (犬) なる語を教授するに當りて語其物を直接に授くる事をなさずして、アルファベットから先づ授けてみようとする。即ち *dee-o-see* といふ工合に文字を一つ一つ分けて授けるのである。被教授者は忠實に而も盲目的に *dee-o-see* と綴るのである。故にアルファベットの獲得にのみ兒童の注意が向けられて、*dog* といふ纏つた智識を發音的にも概念的にも獲得することが兒童に出来ぬのである。歐洲文明國に於て此不自然な教授法が昔から流行してゐた。吾國に於てもこの教授法が徳川時代から明治年間に至る迄流

行してゐた。而してこのアルファベット教授法 (The Alphabet Method) の非教育的なることを初めて看破した者は獨逸の教育學者イッケルザーメル (Ickelsamer) であつた。イッケルザーメルの新式讀本が初めて公にせられたのは實に一五三四年のことであつた。マルブルグで出版したのはその初ての試みであつた。イッケルザーメルはアルファベットの名と發音とが相違してゐるものであつて之を區別するところが言語を初めて學ぶ者にとりて非常に困難である事を指示し、且つこの困難を取去る爲にはアルファベットの名よりは寧ろ發音を前以て教授するに如かずと主張した。而して此目的の爲にイッケルザーメルはアルファベットの文字を發聲機關の位置に應じて分類し、生理的事情と調和のとれるやうにアルファベットの發音順序を定めた。例へば初めて言語を學ぶ者には發聲に最も容易である母音 *o* と *a* を授けた。又かゝる簡単な且つ生理的に發音に容易であるアルファベットの音を授くるに當りて決して抽象的に教授するやうな没趣味の事を行はなかつた。即ちアルファベットの發音教授は常に實物教授と結びつけたのである。例へば前掲母音 *o* を教授するに當りては馬をとゞめる時に用ひる御者の口吻を藉り、或は母

音 *a* を授ける時に *axe* (斧) を兒童に示して發音するのである。かくの如くにして語の音と、その語の音を表示する文字とは相携へて同一の時に兒童に教授さるのである。イッケルザーメルは一語を分析してその音的要素に還元することに力を傾けた。而してこれを試みるに當りて彼れは常に其音を表示するに最も適切な具體的事物を以てした。例へば *Mais* (五月) なる一語を教授するに當りて此語を一字一字の意に解剖し、その一々の音を實物によつて暗示するのである。即ち *Mais* (メッシュ) の *m* は牝牛の鳴聲によつて聯想せしめ、*a* は鶯鳥の聲、*i* は犬の唸聲、*s* は雀の囀聲によつて聯想せしめるのである。亦この實物音を明確に兒童に知らしめんが爲に特に牝牛、鶯鳥、雀等の繪を示すのである。

言語教授を發音的方面から進めやうとしたのはイッケルザーメルであつたが、この精神を倍、高潮して自然的にこれを行んとしたものは獨乙の教育者ブーノー (Bunno) であつた。ブーノーは實物教授によりて發音教授の成績をあげやうと欲した極、餘りに娛樂的教授法に重を置いた。而してこの風潮は予の次に述べんとするバーゼドー (Bisadow) に至つて極端迄娛樂的に進んだ。ブーノーは言語教授

の初歩は全然自然物を藉りて最も容易に最も娛樂的に發音教授をなすにありと主張した。一六五〇年 Dantzig で公にした彼れの讀本はこの精神を最も明かに表現したものである。彼れはアルファベット教授即ちいろはの文字の名を教へることの頗る非教育的なること力強く論じた末、アルファベットは自然物の形象を以て教授すべきものなりと説いた。例へばbを表すに莓の形を以てし、rを示すに鼻の嘴を以てし、hを表すに牝雞の形を以てした。

ブーノール以後言語教授法の改良案は斬新の物があらはれなかつた。何れもブーノールの案に多少の改良を加へたに過ぎなかつた。

バーゼドー(自一七二三年至一七九〇年)はブーノールと同様に言語教授を最も平易に最も娛樂的に行ふべきことを主張した教育家であるが、特に教科書の内容を遊戲的材料で組立てた點に於て異彩を放つてゐる。即ち彼れの教科書は食物、就中、兒童の好むやうな美味の食物を教科材料として取入れてゐる。亦娛樂遊戲の間に國語(獨乙語)や拉典語を教授することに努力した。而して兒童の最も成績よき者には美味の食物を賞典として與へた。故にバーゼドーの言語教授法は文字通りに遊戲であ

つた。

第十八世紀の言語教授は獨乙に於てはかくの如く興味本位、娛樂本位の説が唱へられてゐたが、之に反對して罵倒の聲を上げた者も決して少なくは無つた。佛國に於てはルッソーは(Rousseau)第十八世紀後半の全部を通じて自然的で且興味本位の教育主義を力説してゐたが、その反對説も亦非常に勢力があつた。英國にありては殆ど進歩的教授法は見る事が出来なかつた。ルッソーの説が獨乙に於て多くの共鳴者を得たが英國に於ては他の思想界に於てその感化力があつたにも拘らず、教育的には餘程後年に至りて其影響が現れて來たに過ぎなかつた。

十八世紀末に至りて獨乙に於て言語學教授法は著るしく科學的に進歩して來た。例へばオリヴィエール(Olivier)・ハイニッケ(Hinicke)・ペスタロッチ(Pestalozzi)等是最も教育的に言語教授の方法を案出した人々である。先づオリヴィエールは言語教授の發音的方面に最も重を置かなくてはならぬと主張した。曰く、教授すべき文章は之を讀むに先ちて教師は生徒と口頭にて話して十分にその内容を生徒に了解せしめ、且つ生徒の發聲機關を練習せしむる爲に明白強勢に發音せしむるをよし

とすと。オリヴァイエルは文章を教授するに先ちてかくの如き前提的教授をなした。次に文章中に現れて来る語をシラブル即ち熟音に分ち、その分たれたる熟音は更に母韻と子韻とに分つた。子韻の發音教授は純粹の子韻の音に一種の母韻結果を結びつけるやうな氣音を出來得る限り排除して授けなくてはならぬと主張するのがオリヴァイエルの發音教授の根本義であつた。其の他次のやうな方法も試みられたのである。例へば一つの母韻又は子韻の前に來てゐる子韻を發音する際に不十分な母韻のeを其後に加へて教授し、又其反對に一つの母韻の後に來てゐる子韻を發音する際は同様に不十分なeの音を其前に加へて發音教授を行ふのである。又子韻の結合した場合の發音教授は合併したまゝで教授した。例へば *leit* (肉) (フライシ) の子韻 *leit* (シ) の發音を教授するに當りてはその合併子韻の前に母韻 e を加へて *leit* (イシ) と發音するのである。故に *flaio* シの音が *flai* シと響くのである。即ち子韻を精確に且つ容易に發音せしむる手段として e 即ち *i* の母韻を其前に加へるのである。かくの如き教授法によりて生徒が語の基本的音韻に一通り通曉したならばこゝに初めて文字の教授法が行れるのである。

子韻は其發音に使用せらるゝ發聲機關を標準として區分せられ且つ銘名されるのである。文字を教授する爲に繪畫的記號を用ひてゐた。但し此際に特に注意した事柄は繪畫的教授法の印象的であつた事實である。例へば *Phillip* (フィリップ) なる單語を教材として文字を教授する場合に、繪畫又は記憶に便なる表を作り、最後の子韻の發音によつて文字 *ip* (逸語、トッルバ、カウ) を思出させるのである。最後の子韻の音によつて文字を聯想せしむる所に特色がある。多くは語の最初の音韻によつて文字教授を行ふのが常であつた。又最終の熟音は赤文字で印刷して教授した。生徒は書いてある熟音や語を讀む事が出来るやうになつた後はいよく書物を授けられるのである。讀本が用ひらるゝやうになれば教師は既に生徒が習得してゐる語や文章を委しく教へることゝなる。

オリヴァイエルと同代に出で、言語教授の方法に貢献した者はハイニッケであつた。オリヴァイエルと同様に言語教授は文字教授より入るべきもので無くて音教授より始むべきものであると主張し、且つこの主張に反對した説を思切つて罵倒した人である。發音教授の出發點を子韻に置いたこともオリヴァイエルと同一であつた。

かくの如くにして多年行れて來た文字本位の言語教授は終に政府の力を以て根本的に覆へされて仕舞つたのである。然れども發音本位の教授法は時代の進むにつれて漸く複雑性を帯び來り、一字一字の音韻を非常に複雑に區別し、所謂煩雜なる聲音學的分類によつて發音教授の方案を立てるやうになつて來た。

言語教授の方法が以上の如く變遷してゐた間に書讀法 (Schreiblese-Methode, Write-Read Method) なるものが獨乙で試みられた。この教授法はその源は頗る古。古代の希臘人も羅馬人も此教授法を用ひてゐた。コメニウス (Comenius) やラティヒウス (Ratichius) 等は十七世紀に於てこの教授法の長所を大に唱へ出した。その結果、獨等に於て流行するやうになつた。十八世紀及十九世紀に入りてこの教授法に對する贊否兩論が諸國に於て唱へられてゐた。この方法は言語教授に當りて讀方と書方を常に結合して行ふといふ所に理想がある。即ち單語を最初に書いて示し、次にこれを讀ましめるのである。この教授法の長所は目と耳の教授を同時に行ひ且つ生徒に自發的氣分を生ぜしめ、之に加ふるに興味を増進せしめる點に在る。而してこの長所を世界に認めしむるに至つた人はグラージェル (Graser)

であつた。今日では此方法は獨佛英米等に於て普く用ひられてゐるが、多少折衷された方法に變じてゐる。即ち前記ステツファニーの發音本位の教授法、換言すれば音讀法 (Lautiermethode) と折衷した方法が用ひられてゐるのが一般である。但し此教授法に對して反對する學者も少なくは無い。その理由は此教授法は同時に二つの事柄即ち耳と目の教授を要求する結果却つて生徒に苦痛を與へ非教育的なものとなるといふことにある。然れどもその杞憂は此方法を運用する手腕によつて容易に取去ることが出來ると思ふ。理論的にはこの教授法は最も自然の法則に適合したものである。

分析綜合教授 (The Analytic-Synthetic Method, Analytisch-Synthetische (Normalwort) Method) 一名範語法は佛蘭西のジャコット (Jacotot) によつて一八一八年に公にせられた。獨乙人ゲディケ (Gedike) は是を獨乙に紹介した。ジャコットの此教授法に關する學説は議論としては多少不徹底の點もあるが其實用上の手腕は非凡のものがあつたやうである。ジャコットの分析綜合法は先づ第一に文章の各單語を生徒に發音して見せ、その後から生徒にこれに隨つて發音せしめ、生徒がいよゝゝ其單語

の音と形を理解したならば之を綴に分解し、次にその綴を文字に分解して理解せしむるものである。この場合に綴も文字も生徒の眼によつて印象せしむるのである。かくの如くにして一つの単語を理解したならばさらに新たな単語を授け、終にその文の最後の単語に至るのである。即ち讀方に於て分析法を採りて進むのである。然れども書方にありては文字から出發して綴に及び次に単語に進み最後に文章に到達するのである。換言すれば書方は綜合法によるのである。かくの如く讀方に於ては分析法を用ひ、書方に於ては綜合法を用ひてゐるから、これを一つに纏めれば分析綜合教授法となるのである。(Enseignement universel Langue maternelle, par. J.J. Jacotot 参照)

ジャコットの言語教授法に於て長所とすべき點は、統一的材料から出發して一々の単語を分析し、これを確實に生徒の頭腦に印象せしめる點に存してゐる。たゞ實際的の缺點はその材料が餘りに困難のものが多く、所謂易から難に進むといふ教授上の一大原則に背反してゐる所に在る。獨乙の教育家ゼルツァム(Belzsum)はジャコットの教授法を宣傳することに非常に努力した人である。

分析綜合の言語教授法は獨乙に入りて種々改善せられ、終にクレトメル(Krämer)の範語法(Normwort)と成つた。この方法はフォーゲル(Vogel)によりて世界的のものとなつた。範語法は話方、讀方、書方の三つの教授を直觀教授と結びつけて行ふと共に範語を基準として教授する方法である。而して此方法によれば教授者は範語を示してこれを分析し、次に綜合し、最後に生徒に書かしめるのである。前述の書讀法にありては書方が最初に行はれてゐたがこの範語法にありては讀方が最初に行はれるのである。フォーゲルは範語を選択するに當りて直觀と言語練習に重きを置き、成るべく書方の難易に標準を設けて範語を定めたのである。

生徒をして最も自然に且つ最も容易に言語を習得せしめやうとする氣分は年と共に流行して來た。而してこの自然的傾向は繪畫的形式を藉りて言語の發音及び文字を教授する氣分を作り出した。但しかゝる傾向は既に第十七世紀に生じたものである。例へば一六五七年にコメニウスの發表した新教科書はこの事實を證明してゐる。即ち其著 *Orbis Pictus* (繪畫世界) によれば繪畫の補助を藉りてアルファベット・綴り等の發音を最も容易に理解し得るやうに示してゐる。而してこの

主義は英獨佛に於て一時は非常に流行したものである。この機運に促れて種々の言語教授法の道具が工夫された。例へば木片又は骰子を用ひてアルファベットの教授を行ひ(木片又は骰子の上部にアルファベットを刻む)或は木片に繪具を塗りて文字の形を示し、或は非常に手数のかゝつた道具を用ひて文字の形を教授するといふやうに様々の工夫をこらすやうになつた。

以上述べ來りしことを綜合していふならば言語教授の方針なり方法なりが時代と共に様々に變化して來た。文字の名稱を記憶させてゐた非教育的の時代から漸進的に變遷して來て、次第に發音本位の教授法に接近し、最後に繪畫又は他の手段を藉りて最も自然に將た最も印象的に言語を教授するやうに進歩して來たのである。これを最も簡單に言ふならば聲音學の原理を利用して音韻教授の方而から言語を教授するやうになつたといふことが出来る。例へば聲音學上から見て最も發音し易き音より出發して言語を教授することに大體の方針が定つたことである。文字に即しての意味の教授は第二期的のものとして取扱れ、先づ第

一に音韻の教授特に發聲機關に最も好都合な類似音を一通り授け、而もその音韻に關係して極めて簡單な意味を包含してゐる語を最初に授けるのが言語教授の根本義となるに至つた。但し何れの教授階梯にありても練習は缺く可らざる必要條件となつてゐる。生徒が練習をなすに當りて多大の興味を有するやうにならなくてはならぬのは言ふ迄も無い。言語教授の出發點はかくの如くにして發音本位のものとなつたのである。耳と口の練習が出來た後に目の練習に進むやうになつて來た。他人の思想を取入れると共に自らの思想を發表し感情を表現することが出来るやうにするのは言語教授の最後の理想であることは言ふ迄も無い。然れどもこの理想に到達する迄には多くの階梯を通過しなくてはならぬ。言語の發音や文字と發音の連絡作用や文字を通じての思想感情の理解や音韻其物に伴隨してゐる情緒の理解等が一通り會得された後で無くては他人の思想感情を精確に受入れる資格が無いのみならず、自己の思想感情を自由に發露することは出來ぬものである。而してこの事柄は國語の場合に於ても外國語の場合に於ても根本義に於ては同一である。たゞ外國語の場合にありては言語形式が自

國のものとして著るしく相違してゐる關係上、換言すれば思想感情の表示形式が甚しく相違してゐる關係上、これを正しく理解し或は之を正しく應用することは頗る困難である。

言語の各分科についての教授法の歴史的考察は、一々これを述べれば非常に長さものとなる。予は是等の事柄に關してこゝにくだしく説くことを好まぬ。それ等の事柄に關しては既に内外の教授法の参考書は委しく記してゐる。たゞ言語の根本的問題に觸れて今日迄發表された教授上の革新案を大體にわたりて紹介すれば予の希望は滿されたものである。學校の種類によりて言語教授法の異なるべきは自然の數である。然れども教授上の根本精神に於ては異なるものがあり得べき筈は無い。言語の種類被教育者の事情等によりて教授の方法に多少の相違を生ずることは當然のことである。然れどもそれ等は方法に即しての相對的區別の問題であつて決して教授上の根本義に即しての問題では無い。故に予は言語科が國語科なると外國語なるとを問はず、或はそれが小學校に課せら

れた場合であると中等學校に課せられた場合であることを問はず、一樣に如上の根本精神によつて大體の上から方針を定め度いと思ふてゐる。國語や外國語を文學として見做すならばそれは別種の意味に於ての教授法によつて論ずべきものである。予は本章に於ては言語其れ自身の立場に於て本質的に教授法を論じてゐるのである。故に以上の根本的精神に立脚した結論以外に何事も述べることが出来ぬのである。

第三章 智徳教育の方便としての言語教授

言語は思想及び感情の聲音的表現であるが故にこれを教育的に取扱ふとすれば相當に大きな問題が附帶的に考察されなくてはならぬこととなる。即ち吾人の觀念、其物、思考の本質及びその内容、廣義に於ての情操問題、想像及び記憶に關する問題、其他吾人の生理的事情に關する種々の問題が考查されなくてはならぬ。言語存在の根柢は是等の物心兩方面に關係する諸問題の解決によりて徹底的に認めらるべきものである。然れども是等の事柄を論ずることは言語學以外の智識に俟たなくてはならぬ。故に予は言語といふ單獨な現象を他の物心兩方面の現象から姑く引離して研究の對象としたい。又茲で予の教育的に見た言語、換言すれば學校に於て言語科として取扱ふてゐる言語、即ち模範的な言語は、言語其れ自身の爲の言語を指したものであつて、かの文學や科學の結晶を指したものでは

無い。どこ迄も言語として議論を進める豫定である。言語は文學其物の形となつて表現されなくても、或は科學書又は廣義に於ての實科讀本となつて表出されなくとも、或は唱歌となつて表示されなくとも、言語其れ自身の平凡な姿に於て教育的價值を發揮し得るものである。言語を *as such* の形に於て教育的に取扱ふことが可能である理由を述べんとするのは予の大なる目的の一つである。

言語教授の階梯を造るならば讀方書方綴方(作文)等に區別されるかも知れぬ。或は讀本で言語の統一教授を試みるといふことも稱し得るであらう。この外、文法教授とか、發音、話方、聽方、習字教授とかいふ工合に細目を設けることも可能であると思ふ。或は教授の大方針を直觀教授に置くことが可能であるかも知れぬ。而して是等の分科的階梯は其れ々、自分の本領とすべきことを其れ自身に於て遂行し得るかも知れぬ。例へば讀方教授は生徒に對して言語的形式を籍りて生活に必要な知識を授けると共に、徳操と美的情操を授けるのが主なる目的である。又綴方教授は生徒に思想の整頓を習慣づけ、てやると共に、觀察力を精確迅速ならしむるのが本領であると稱し得るかも知れ

ぬ。かくの如く言語各分科にはそれぞれ單獨的に大きな使命が與へられてゐるものであるが、これを総合的に考察するならば言語科の生命は生徒の思想を整頓して文化的生活に誘導する所に繫依してゐると思ふ。而して予の如上の見界の内容としては廣汎な意味に於ての眞善美の三要素が包含されてゐる。即ち思想の整頓といふ包括的な言葉の中には眞なるものを知り且つ發表するといふ意味が潜在してゐると同時に、善なる物美なる物を認識し且つ表現するといふ意味が包含されてゐる。智徳情の三つの心的内容を廣汎な意味に於ての思想の中に統一したのである。即ち予のこゝで指す所の思想の整頓なるものは精神内容の完全性と包括性を意味したものである。而して文化的な生活への誘導といふことは如上の過程を経て完全性を帯びた思想が文化的に結果を現すといふことに過ぎぬ。如何に完全化された思想でも其儘の姿で停滯してゐては社會的に換言すれば人類的に何等の価値も無いことである。吾人は自分の思想を完全にすると共に他にも其影響を與へ且つその反動によつて自らの思想の停滯を防ぎ、倍々積極的に進歩することが人間として必要である。

言語教授が智徳情の三つの方面に教育的価値を發揮するものである理由を證明する爲に、予はこの三者の一つづつについて分類的に考察してみたい。而して此章に於ては先づ智徳の二つを研究の標的として論じて見る。

智徳教養の方便としての言語科の使命を論ずる手段として、或はその順序として、心理學的觀察を言語に下すことが最も合理的で且つ最も穩當な方法であると思ふ。言語と觀念との關係や、言語學と心理學との關係等に就ては既に本書の前篇言語學汎論に於て詳論したことであるが故に是所で再び同じやうな議論を繰返へすことを避け度い。心理學的に見れば言語發生は吾人の視覺と聽覺に即しての觀念表出運動と見ることが出来る。而してこの觀念表出運動は言語成立を確實化すると共に、觀念其物を反射的に確實化するものである。故に吾人の觀念は言語を成立せしめると共に言語によつて己れ自らを確立せしむるものである。こゝに言語の教育的価値と使命とが存してゐる。然らば言語は何が故に觀念表出の運動其れ自身であるか。吾人はこの理由を先づ第一に明かにしなくてはな

らぬ。ペーン博士は吾人の觀念が運動的要素に富んでをることを唱へた人である。觀念運動が實際運動となつて表出さるゝことは吾人の容易に目撃し得る事實である。特に甲乙の兩人が互ひに自らの觀念を交換しやうとする時に最も明かにこの事實が認められる。但しこの兩人が國籍を異にし國語を異にしてゐる言語的には觀念の交換が出来ぬものであれば倍々好都合である。かゝる事情の下にありては甲乙の二人は先づ身振りに依りて思つたことを發表するのである。而してこの兩人の身振りが互ひに共通的に模倣されるやうになれば、その模倣運動は社會に即しての言語の起原である。故に觀念の運動が實際的に身振運動となり、その身振り運動が多くの人々によつて共同的に模倣さるゝやうになれば、其の身振り運動は一種の身振言語である。吾人の所謂言語なるものはこの身振り運動が聲音的に表現されたものに過ぎぬ。随つて言語は吾人の觀念の運動表出であると斷定することが出来る。即ち言語は觀念の流出である。心理學者で同時に言語學者であつたヴントはこれと同様な意味のことを頗る合理的に述べてゐる。其説によれば兒童の言語は發達の順序からいふならば他の意思行爲より

も後に現出さるゝものである。而して言語の發達に影響を與へるものは大體から見て二種類ある。一つは神経系統の中樞に於ける習慣的狀態であつて遺傳的のものである。他は他人から受ける言語的感化である。此點からいふならば言語發達は全く言語以外の他の表出作用の發達と類を一にしてゐる。即ち言語は觀念の表出運動の一種に外ならぬといふのがヴントの説である。但しヴントは此事柄を心理學的實驗によつて極めて興味ある方法で説明してゐる。即ち其理論によれば言語を發生すべき機關によりて發し得べき最初の音聲は特に適宜の感情及び情緒から發したる反射作用に由來するものであつて、既に二ヶ月目にあらはるゝものである。かくの如き初發の言語又は言語の先觸ともいふべき音聲をヴントは表出音聲と稱してゐる。而してこの表出音聲は二ヶ月目から漸進的に發達し、倍々其數を多くしてゆく。且つ之を繰返へす度數も非常に多くなる。但しこの種の音聲は事物の差異、發表目的の確乎たるものを區別的に有してをらぬから實際的には言語と稱することが出来ぬものである。表出音聲が次第に言語的性質を具備するやうになるのは普通二ヶ年目の始め頃からの事である。而

してこの純粹の言語を完成するに最も力あるものは模擬運動である。模擬運動は模擬者の方面から見て二様に區別することが出来る。第一は兒童が大人を模擬する場合で、第二は大人が兒童を模擬する場合である。而して最も多く起り得る場合は大人が兒童を模擬する場合である。例へば兒童が無意識的に發した音聲を大人が模擬して之に一定の意味を附するのである。言語が本質的に教育的であることが此點からも證明することが出来る。兒童が大人の言語を模倣するのは餘程之より後のことである。即ち大人が兒童の發した音聲に一定の意味をつけて話すのを兒童が聞き、己れ自身もこのときその意味を解した大人と同じ音聲でそれを發しようとするのである。その時期こそは兒童が大人の言語を模倣する時である。但しその模倣は大人の言語その儘のもので無いことは明かである。大人が兒童をしてその言語を了解せしめるために必要とせらるゝ條件は身體的動作である。身體的動作とは身振りのことである。身振りは二大別するところが出来る。一は言語で發表しやうと思ふ物體を指示する動作であつて、これを指示的身振りといふ。二は打撃とか歩行とか或は睡眠等を表示しやうとする動

作の表現である。これを敘述的身振りといふ。兒童は自ら發した音聲を是等の身振りによりてその意味を了解することが出来るのである。而してその了解した自己の音聲的言語を模倣的に發することによつて言語的發表の習性を獲得するのである。故に言語の發達は全體的に見れば兒童とその外部に在る大人と相互的影響に由來するものである。但し言語成立の源流ともいふべき兒童初發の音聲は兒童その者の聲であるのは固よりの事である。これを言語となすのは大人其者である。

言語成立の過程はヴントの説けるが如く全く反射作用である。兒童が初めて發した音が大人の身振的言語によつて註釋を與へられ、それが兒童の模倣的發聲によりて反射的に兒童の心に還元せられてこゝに初めて意味表示の言語と成るのである。故に言語成立の過程其れ自身は既に教育的である。この點に言語教授の根本主義が置かれなくてはならぬ。言語成立の過程に立脚した言語教授の中で最初に重きを置かなくてはならぬ事柄は、思考の問題である。換言すれば思考の力を養成することが言語教授の一つの使命となるものである。思考とは智

に即しての人類の精神的活動の別名に過ぎぬ。言語教授はこの思考力養成の使命を實現する所に教育的價值が存してゐる。思考と記憶と想像とは吾人の内的活動の三大要素である。言語教授はこの三つの力の教養に最も多く貢獻するものであるが、就中、思考の方面に大きな効果を與へるものである。ラッドの説きしが如く吾人の思考作用は三つの段階を有してゐる。即ち概念作用、斷定作用、推理作用である。但しラッドのこの三階梯は氏自らも言ふてをる如く心理學的に見るならば三つともに思考の本質を表示してをるものではない。而してこの事實は斷定作用に最も明かに示されてゐる。即ち思考するといふ事は何物かを斷定することに外ならぬ。概念作用も個々の知的活動ではあるが、その實、斷定と何等異なる所は無い。故にこの二つの作用も亦斷定作用に還元することが出来る。概念を構成することは斷定的作用であるが故に若し斷定といふ心的活動が無ければ概念は成立しない。推理も亦同様である。即ち推理は種々の斷定が集合して成立するものであるが故に斷定作用が無ければ推理作用が成立する理由が無い。推理は斷定の未來相である。かくの如く觀ずれば斷定の中に思考の全部的

性質が包括されてゐる譯である。ラッドの此觀察は言語の教育的價值を定むるに最も都合よき暗示を吾人に與へるのである。ラッドの説を敷衍すれば言語の成立は吾人の思考の成立を表示するものであつて、本質的には斷定作用の表出であらねばならぬ。言語即斷定といふことが結論として生れ出づる譯である。この點に言語教授の有難味が宿つてゐる。他の何れの學科に比しても常に最高の位置を教育的に占めなくてはならぬ理由が獨り言語科にのみ見出さるゝこととなる。思考の高尙な活動を表現するものとしての言語は之を教育的に取扱ふことによつて、人類の内的活動の一切を淨化することが出来るのである。而してこの思考作用即ち斷定作用の高尙な活動表示ともいふべき教育的言語は、記憶、想像といふやうな知的進行の發達を指示することゝもなるのである。亦この記憶、想像、思考の知的發達は高尙なる感情、換言すれば情緒及び情操の發達を支配するものであるが故に、言語は其れ自らの姿に於て情緒と情操に密接不離の關係を有つことゝなるのである。正に對する觀念、善に對する觀念には義務と服従の高尙な感情が伴隨し、美の觀念には審美的情操が伴隨し、眞の觀念には信仰、遵奉の清き情

操が伴隨するものであるが、是等は言語成立の道程に於て必然的に生じ來たるものである。随つて言語成立の過程に立脚してゐる言語科は是等の道德的・審美的情操を、思考即ち知的情操と共に被教育者に授くることは當然の責務である。

思考と道德心を教養する意味に於て言語教育を最も猛烈に且つ極端に行つた例は羅馬及び中世時代のローマ教感化の文明國に見出す事が出来る。羅馬人は言語教授を全く方便的に取扱つてゐた。情操陶冶の爲よりは智と徳の兩方面に言語科を利用してゐた。文法學と論理學とが殆ど同じ意味に於て取扱れてゐた。當時の教育社會にありては言語が思考力を練りあぐる唯一の學科であつた。修辭學も雄辯學もローマ國民の最も重大視してゐた學科であつた。然れどもこの二つの學科は詮ずれば思考力教養の爲の言語科の分科に過ぎなかつた。かくの如く言語を授けることが思考力即ち智の力を教育してゆくことであつたと共に、その教授上の手段は常に道德的のものであつた。言語教授の教科内容が思考力を育成してゆくに都合の好いものを含んでゐたと共に、常に道德的の物を包含し

てゐた。即ちローマの教育機關は言語教授の教科内容を智と徳の兩方面にのみ求めてゐたのである。然れどもこれは主として教科書の内容に關しての事柄である。ローマ人は教科書以外に於てもなほ言語習得の過程其物に智と徳の意味を附加する事を忘れなかつた。即ち言語の内容が如何なる物にもせよ、これを學ぶこと其れ自身に於て思考力の教養が實現せられ、道德的情操が陶冶さるゝものであると信じてゐた。その理由は言語を鍛練的學科として見做してゐたからである。言語を猛烈に學習することは心の鍛練となるものである。而してその鍛練的效果は主として知識的將た道德的修養となつて表現さるゝものである。故に言語教授は成るべく鍛練的方法に據らなくてはならぬといふのが一般的主張であつた。生徒を壓迫的に教へこむことが其弊となつて表現さるゝに至つた。而してこの所謂詰込み主義の言語教授は中世に入りて最も猛烈に行はるゝに至つた。早朝から夕暮に至る迄生徒を狭き室に閉籠めて文字通りの鞭撻教育を言語科に於て試みたのである。文學本位の言語教科書や、娛樂本位の言語教科書は、知徳教育に害あるものであるとして悪魔の如く呪詛されてゐたことは固よりで

ある。ローマの大文豪ヴァージルの作品を私かに讀んだ爲に重き罰をうけた僧院の生徒すらあつたと傳へられてゐる。かくの如く言語教授を理性と道念の教育的方便に用ひた教授方針は、言ふ迄も無く狭量な頑迷なものではあつたが、その反面に於て大きな獲物を手にしたことは否定し得ざる事實であつた。中世の所謂闇黒時代に於てローマ教の壓迫的な專制的な僧院教育を受た人々は、後世の學者からは狭量で頑迷な者として罵倒され嘲笑されてゐるものゝ、古代文明と近世文明の橋渡しをなす上に多大の貢獻をなした事は明かである。而して彼等の長所は勿論人格的方面にあつたとは斷定することが出来ぬが、古代語で鍛練されたその思考の力と局部的の道德觀念とは必ずしも排斥すべきものでもなかつた。彼等には狭いながらも何處となく根強い或物が宿つてゐた。言語の鍛練教授は暗誦主義に於て最も能くあらはれてゐるものである。それは古今東西を問はず同様である。古代のローマ主義の言語教授は固よりである。中世のローマ教主義の教授方針は倍々此傾向を極端迄發表して來た。太古のケルト式の教育、就中、ドゥルイヅ教團の鍛練主義の教育方針は殆ど暗誦以外に何物も無いと評すること

も出来ると思ふ。印度の聲明の學は暗誦の一點に言語教授の教育的價值が集つてゐたと見做すことが出来る。勿論その學としての存在の意味はもつと深遠な所に在つたことゝ思ふが、その教授上の方針は暗誦主義であつて、暗誦其れ自身の中に教育的價值が存在するものと見做されてゐたことは明かである。佛蘭西も英國も言語教授とさへいへば鍛練教育と解し、これを暗誦主義で教へこむ事が思考を練り、道念を鍛へる所以であると近年迄信じ來つたのである。特に十八世紀頃の英國教育界はこの風潮に漲つてゐた。佛國は最近迄この思想を持續して來た。ローマ式の言語教授法を最も忠實に最近迄保持したものは實に佛國であつた。米國は言語教授の理想を實用主義と精神鍛練主義の兩方面に置いてゐたことは明かである。特に教育界の重鎮と目されてゐた人々は言語教授に於て生徒の智徳及び情操の教化を實現すべきことを主張したのである。

言語教授はその出發の當初から智と徳の教養的方便として取扱はれてゐたが、これに近代的色彩、即ち情操教育の氣分を加へ、廣義に於ける文化的、人文的氣分を加へる様になつたのは伊太利文藝復興の影響である。伊太利の近世文藝復興の

精神は最も平易の言葉でいふならば文化主義鼓吹の思想革命であつた。而してその理想的表現は古代の希臘拉典の古文學復興に存在してゐた。古代の高尙なる希臘羅馬の文化を味識して近代人の思想を高尙なものとしなくてはならぬといふのが文藝復興運動の基調であつた。而してこの運動は古代の希臘羅馬の言語を研究することに出發點を見出したのである。然れども彼等はその古き言語を學ぶと共にその言語を通じて高尙な情緒を獲得することに努力した。こゝに近代的文化主義が言語科を通じて表現さるゝに至つた起源がある。中世時代の言語科は智徳教養の方便であつたが、文藝復興運動はこれを文化への誘引の手段として取扱ふに至つたのである。こゝに言語科の教育的立場に就ての革命があつたのである。文藝復興以後此文化主義の言語教授は暫時歐洲各國に於て流行してゐたが、功利的將た唯物論的教育方針は久しからずして言語科の領域を浸蝕し、其れが最近に至る迄歐洲文明國の教育社會に於て言語科の立場を覆へしてゐた。此間、獨逸の教育界のみは日に新たなる進歩を言語科教授の上になしてゐた。然れども其他の文明國は言語科の根本義に對して多少誤りたる信仰を有し、或は

その教授法に於て一方に偏したものがあつた。かゝる間に世界的大動亂が勃發した。大戰以後の歐洲文明國は教育的に革命を起さざるを得なくなつて來た。而してその基調は文化主義人文主義への教育といふ所に在つた。特に言語教授の立場は文化主義への誘導といふことが重要な條件と見做さるゝに至つた。文藝復興運動が初めて伊太利に起きた當時の氣分が再びこゝ、一二年間に現れて來たやうである。然れども現在呼ばれてゐる文化主義なるものは、伊太利文藝復興當時のものとは比して、遙に民衆的であり、遙に現實的である。言語科の教育的立場は伊太利文藝復興當時に流行したやうな古典語復興といふやうな消極的のものでは無い。智徳教養の爲の便宜的手段として言語科を取扱ふことのみが、今日の言語教授の目的で無い。亦古語を教授してその文化的香氣を過去の物から嗅がしめやうとする消極的理想に言語科の使命を見出さうとするものでも無い。過去現在未來の三世にわたつて眞と善と美の三つの理想に生きさんが爲に言語科を取扱はんとするのが吾人のアンビションである。こゝに現在の言語科の教育的立場が無くてはならぬ。

第四章 美意識の教育と言語教授

本章に於て論ぜんとする事柄は言語を本質的に見た場合にその教育が美意識の教育に多大の効果を奏し得るものであるといふ事實を研究しやうとする所にある。而してこの研究は言語を成るべく其れ自身の立場に於て取扱はんとするものが主眼である。それは前章に於て智と徳の教養を論ずるに當りて言語を言語其れ自身の姿で取扱つたのと同様である。言語を論ずるに當りて其文學的形式を帯びたものゝみを特殊的に取出して本章の研究題目とするが如きは予の欲する所では無い。

言語の音韻及び律動即ちリズムが詩の形式に取入れられた場合に、それが其儘の姿で、即ち内容を假りに度外視しても、音韻と律動其物だけで、十分に吾人の心の律動美に共鳴し得るものである事は、既に本書の音韻及び詩の形式、特に平仄押韻

の規則を説明した章で論じた如くである。故に本章に於て再びこの事實を繰返へし度く無い。

言語の教育的價値は智と徳の教育に存在してゐることは固よりであるが、美の意識を育成し、美的情操を涵養する點にも其の價値を存してゐる。而してこの美的意識と美的情操を培養する手段としての言語教授は、其理想を遂行する爲には、少なくとも次の三つの教授上の方針を包含してをるものと言ふことが出来る。

曰く、

(一) 語 (word) の精確なる音韻と、その律動^{リズム}を單獨的に生徒に意識せしめ、且つ其語を通じて言語的美意識を作らしむること。

(二) 感情に立脚せる藝術的鑑賞力の養成を目的とすること。

(三) 理解力に立脚せる藝術的鑑賞力の養成を目的とすること。

以上の三つの教授上の方針に就て、批判的に論じてみる。

先づ第一の場合を考查するにこの事項は言語を教授する一つの方針としては必要な事柄である。特に言語科を單獨的に言語科其物の爲の言語科として取扱

ふ時に此事項は必要な教授法の一となると思ふ。然れども此教授法は餘りに限定的であるが爲に較々もすれば言語の音韻教授のみにとまつてそれ以上一步も踏み出すことが出来ぬといふ弊が伴隨してゐる。音韻に對する耳の訓練が相當に成績を示すであらうが、それ以上に美意識に伴なう美的情操が容易に育成される、ことが出来ぬ。即ち千篇一律のドレミファ教授に終るのが通弊であると思ふ。言語學上から見て所謂聲音上の教授や練習は遺憾なく遂行し得らるゝであらうが、その方法は餘りに機械的で餘りに功利的に流れ易い。吾國現在の中學校一年級第一學期に行はるゝ英語發音教授は多くはこの方針で進行されてゐる。言語教授の功利的見地に於てはこの方針は所謂成功を收め易いものである。然れども外國語を音韻又は音律動の美的方面から生徒に教授してゆくにはこの方法が果して教育的なりや否や頗る疑問である。國語に於ては外國語以上にこの疑問があると思ふ。吾國の小學校第一學年の讀本は果してこの音韻及びその律動、美なるものを如何なる程度迄重要視して編まれてゐるか頗る疑問とすべきものがある。

第二の場合を考察するに、これは言語教授の方針を生徒の感情に立脚せる藝術的鑑賞力の養成に置いてをるものであるが故に、その教授上の手段としては語其物よりは、語の集合體たる一つの纏りたる文章、又は一つの纏りたる詩歌に教授上の重みを置くこととなる。換言すれば文章なり、詩歌なりの纏つたものを概括的に感受して、感情の上で生徒が或る物を獲得すれば、この教授上の方針が最大目的を實現したこととなるのである。故にこの主義を極端迄延長すれば生徒の理解に訴へるやうな語句の説明は教授者の差控へなくてはならぬことである。感情に立脚せる藝術的鑑賞力の養成が主なる目的である以上は、どこ迄も理知の干渉は避けなくてはならぬ。然れどもかゝる極端な事は苟も教育社會に於ては是認せらるべきものではない。若し此極端な解釋に立脚して此教授方針を教育界に於て行はなくてはならぬものとすれば、既にボーナス (Bonus) の杞憂した如く、詩歌及び詩歌に類した言語教授は全然小學校から驅逐しなくてはならぬこととなる。吾人はかくの如き狭き意味にこの教授方針を解釋したく無い。純然たる感情に立脚せる美的情操の涵養は、その教授上の方法さへよろしきを得れば相當に立派

な成績を示す事が出来ると思ふ。故にかゝる教授の方針は必ずしも誤謬であるとは斷言することが出来ぬ。要はたゞその運用の如何にあると思ふ。又これを相對的に批判するならば第三の教授方針たる、生徒の理解力に立脚せる藝術的鑑賞力の養成を目的とする教授方針に比して劣つてをすることは明かである。教育的價值論に立脚して判斷するならばこの第二の方針は第一と第三の中間に立てるものである。蓋しこの第二の教授方針は廣い意味に於ての唱歌教授の形式的陶冶の精神に共鳴するものがある。即ち唱歌の教授方針の形式的方面に即しての眼目は、吾人の音を通じての美的陶冶といふことであらねばならぬ。吾人は唱歌の教育的價值を認める理由は、吾人の一生涯を通じて、人生其物に價值ある歌を自己の財産として收得することが、吾人自身の實質的陶冶と成ることであると信ずることに原因するのみでは無くて、純潔な唱歌を學ぶことが、其唱歌の主要素たる高尚な感情に接することが出来るからである。純潔な唱歌は高尚な感情を最も美的に表現してゐる言語其物である。故にこの美化され淨化された言語結晶はこれを學ぶ者の精神の全部を淨化して、人としての最も幸福な生活を內的に送

らしめるものである。但し是等は主として吾人を受け身の立場に於て考察した場合であるが、さらに積極的立場に於て唱歌の利益を考察するならば、吾人はこれを練習することに依て吾人自身の精神を整頓し發聲機關を調整完備してゆくことが出来る。かくの如くにして吾人は吾人の心の美を音聲の義に結びつけて發表することが出来る。唱歌科の教育的價值は實に名狀すべからざる程大なるものがある。然れども予は當面の問題としては單に感情に立脚せる美の情操を養ふ手段としての言語問題にこれを結びつけることが出来れば十分である。唱歌は音の律動其他音を中心としての聽覺を單位として美的情操を陶冶するのが、その教授上の大方針であらねばならぬ。それと同様に感情に立脚せる言語教授法は音の律動及び音韻を中心としての教授である。而してこの二者は音韻又は音の律動を單獨的に取扱はずして綜合的に取扱ふ點に於ても亦一致してゐる。纏りたる詩纏りたる歌詞、纏りたる文の音韻的美要素を全體的に取扱ふ點に於て、予の所謂感情に立脚せる言語教授法も唱歌教授法も全然同一である。たゞ音の理想的表徴となれる樂器と音符とが言語教授に於て用ひられぬのみである。

意味を離れて音と音律動だけにて言語的美意識を刺戟し得る例は、音韻の妙趣と音律動の玄妙味を直感し得た詩人の名句に、これを見出す事が出来る。英國第十九世紀の鬼才ロゼッティ (D. G. Rossetti) の *The Blessed Damozel* の句に

“We two,” she said, “will seek the groves
Where the lady Mary is,
With her five handmaidens, whose names
Are five sweet symphonies,
Cecily, Gertrude, Magdalen,
Margaret and Rosalys.”

この句は最後の二行に音及び音律動の上から見て頗る興味が多い五人の女の名を掲げてゐる所に妙味がある。たゞこれだけの固有名詞を通じて吾人は言ひ知れぬ古典的な美感を惹起するのである。この詩の内容が天國に去つた愛人と下界に残された愛人の間の情緒を寫したものであるが、吾人はその詩の内容の如何なるものなるかを問はざるも、將た如上の句が此詩篇の如何なる部分に挿入されてゐるかを問はざるも、たゞ此句の二行を誦したゞけで何となく音律の美感に打たるゝのである。こゝに言語の美的要素が認めらるゝのである。沙翁は殆ど意味の無い事柄を書きつらねて然も音韻的に言ひ知れぬ面白味を讀者に與へて

ゐる例が多い。

“Be thy mouth or black or white,
Tooth that poisons if it bite;
Mastiff, greyhound, mongrel grim,
Hound or spaniel, brach or lym,
Or bobtail tike or trundle-tail,
Tom will make them weep and wail:”

(Act III. Scene VI. King Lear.)

(意譯)

ささまの口が黒うても、白うても、
噛めば、その齒に、毒がある、
猛犬、獵犬、惡魔づらした雜種犬、
獵狗、矮狗、龍狗、手飼ひ犬、
短い尾、卷いた尾の野良犬どもめ、

きやんく／＼なかずど、トムさんが、

多くの犬の種類を音韻的に將た律動的に巧に書き列ねた所に興味がある。特に頭韻と脚韻を踏んだ所に作者の手腕が窺はれる。意味の上では何等の重みも是等の各語に見出す事が出来ぬが、音韻の響きその物が全體的に快感を吾人に與へてゐる。詩は或程度迄は音と音律動だけでも存在し得るといふ推定は此句に就て見ても下し得ると思ふ。母韻の美しき響に富んでゐる伊太利語には此種の實例を求むることが容易である。英國第十六世紀を中心として一時非常に流行したロンドー(Rondeau)の句を調節的に繰返へすもの(同一)は伊太利詩形の系統を踏んだものであつて、この形式の如きは耳に快感を與へる以外に何等の詩的意味を有するもので無い。

音韻の美感を鑑賞することは或程度迄は個人の先天性に由らなくてはならぬが、多くは音韻の美を感受するやうに教へこまるゝ外部的事情に原因するものである。而して此事實は我國の封建時代の音楽家の家元教育に見出すことが可能である。是等の家元教育は言はゞ藝術界に於ける閥族教育(クワン)に外ならなかつた。

笛の家元・太鼓の家元・琴の家元・大鼓小鼓の家元、其他音曲に關するものゝみを見渡しても、所謂家元と稱ふるものゝ數は實に多かつた。この點に於て我國の作曲家の發達の歴史は、太古の希臘國のそれに頗る類似したるものがある。太古の希臘國にありては神を祀るに必要な音楽の演奏者は世襲的であつた。而してその所謂音楽なるものは種類の異なるにつれてこれを演奏する者も異なつてゐた。演奏者の異なるつてゐたといふことは家元の異なつてゐたといふことに外ならぬ。この神樂演奏者は後年に至るや一般の演劇從屬の奏樂師に變じた。アッティカに於てこの家元なるものゝ數が最も多きを占めてゐたと傳へられてゐる。かの希臘及び拉典の古文學上に於て最も雄大な詩形を發揮するに至つたピンダル詩は、實にピンダル家の家元が作り出したものである。戰爭詩の一形式として古代から近世に至る迄、歐洲各國の詩形に最も大なる感化を與へたこの詩形は、ピンダルト稱する詩人の發明したものであるが、ピンダル其人こそは明かに家元の家に生れた天才であつた。故に彼れは生れながらにして耳で聽く詩の審美的鑑賞力が具備せられ、且つ教養されてゐたものである。吾國の現代の俗人の中にもこの

種の先天的の教養を受けてをる人は少なく無い。印度には古來此種の伶人又は詩人が多いと言はれてゐる。

音韻の美を鑑賞し、音律動の妙趣を捉へうるやうになる爲には、時間的に長い間の教養を必要とする。故に苟も言語其物の音韻美を教育的に生徒に授けやうとするには、音に對する美意識を習慣的に作りあぐるものが緊要である。此點に於て言語教授の美的情操教養の方策は、唱歌教授と密接の關係を結ぶこととなるのである。然れどもこの二つの學科はそれぞれの立場に於て必ずしも一致するものでは無い。二者互に調和の點を見出すことに努力すべきものではあるが、一方が他方を征服するといふ關係のものでは無い。然るに世人はやゝもすれば何れかの一つに他を還元せしめやうとする傾きがある。例へば國語科又は外國語科の教授をなすに當りて、その發音上の教授を音樂科に委ねんとするが如きは其最も極端な場合である。音樂科に於て授くる音韻の發音はその性質上、極端まで誇大化しなくてはならぬ場合が多い。故に音樂科のみによりて、或は音樂科の必然的に行ふ所の發音の誇大的なることによりて傾向的教育を受けた者は、やゝもす

れば言語の纏りたるもの、即ち一つの文章なり、一つの詩篇を讀誦するに當りて、容易に矯正することの出來ぬ習性を發揮するものである。この事實は英語の發音教授に於て最も明かに證據立てることが出来る。故に意味よりは音其物を通じて直接に美的情操を生徒に與へうるやうになす爲には、言語教授と音樂教授は各自の共通點に立脚して矛盾の無いやうに生徒を教育しなくてはならぬ。

次に第三の場合、即ち理解力に立脚せる藝術的鑑賞力の養成を目的とする場合を考察するに、この方針に立てる言語教授は最も教育的である。吾人はこの教授上の大方針によつて始めて言語科の美的價値を發揮し得ることとなる。即ちこの方法を用ひんとすれば吾人は先づ生徒に、生徒の判斷力に相當した言語教授の材料を與へ、これを適當に解釋してやる必要がある。理論的に生徒をしてその教科材料の審美的價値を了解せしめるのである。次にその材料即ち内容を盛つてゐる語其物の綜合美を音韻と音律動に即して、自然的に味識せしめなくてはならぬ。理論的に美の意識を鮮明にするといふ所に教育的價値がある。吾人はこの場合に於て動もすれば起りがちな過度の理論的解釋を警戒しなくてはならぬ。美を

論ずる學者の中には美的情操は理知的分子の潛入によりて破壊さるゝものなりと唱へる人もある。若し此説が絶対の眞であるならば言語の美的要素を知らしむる爲に、詩の語句に對して説明を加へることは絶対的に避けなくてはならぬこととなる。然れどもかゝる説は必ずしも絶対的眞を置く可きもので無いと思ふ。詮ずるに理知的解釋といふ事柄の程度によつて、解釋を與へることの可否が決定する譯である。何れの學説でも極端に走つた場合を豫想して批評すれば、何れかの點に於て缺陷のあることは免れ難いと思ふ。故に審美的情操の涵養を害せざる方法によつて語句解釋主義が行はるゝならば、反對論者の杞憂する事柄は霧散する譯である。

心と耳とに訴へて最も自然的に吾人の美的情操を喚起する一例として、英國詩歌の鼻祖たるチヨースターの傑作『カンタベリー物語』の中から次の數行を掲げなくてはならぬ。

“Whan that Aprille with hise schoures swoote
the droghte of March hath perced to the roote,

and bathed every veyne in swich lieour,
of which vertu engendred is the flour ;
whan Zephirus eek with his swete baeth
inspired hath in every holt and heeth
the tendre croppes, and the yonge sounne
hath in the Ram his halve cours yronne,
and smale fowles maken melodye,
that stēpen al the nyght with open yē——
so priketh hem nature in here corāges——
thane longen folk to goon on pilgrimāges,
and palmeres for to sēken strange strondes,
to ferne halwes, couthe in sōndry londes ;”

以上を當時のチヨースター式の發音で誦するならば次の如くなる。

: wban : thata yrille : wihis fures swoote
 -the druxtof martf -hath persedtooth roote,
 -and bathed:evri veinin : swifli kuur,
 -of : whifver teen -en d'gendredisthe fluur :
 -wban zefirzsek : wihis sweete brath
 -in spiredhathin evri holtand heth
 -the tendre kropes, -andthe jurge sznne
 -hath:inthe ; ramnis halve ku ursi rzanne,
 -and smale finles maaken : mele die,
 -that sleepen althe niclwith open ie——
 : so prikethem:naa tyrinherku raadzes——
 : than larygen:folktoo gonon:pilgri maadzes,
 -and palners : fortoo seeken strandzge strandes,
 -too ferne halwes, knuthin sundri landes ;

(發音符號の説明をすれば左の如し。先づeはヒ、thはズ…:thenのthと同じ。hはン(ク)…:singの如し。sはシ…:tanの如し。thはス…:thinのthの如し。Xは獨逸語の anch のchと同じくフに似たり。rはヂユ即ちmeasureメッシュアのZに同じ。oはeで例へば there のeの如き音。oは。即ちoのoと似たる音なれども長い。inは。+nの音なり。)

以上の句をチョーサー時代の發音法によつて吟誦するならば音韻其物の美しき感じが耳を通じて、何人にも捕捉することが可能である。假令、中世英語の知識を有してをらぬ者でも、將た外國語を全然耳にした事の無い者でも、この句を流暢に讀むのを聞いたならば、何となく一種の美的感情を生ずることは明かである。故に此種の美妙的な音韻の響を有し且つ音韻的に非常に美しき律動を有してをる句なり文章なりを、各自の國語の中から或は學科として課してある外國語の中から探し出して之を生徒に教へたならば、言語の音の美感を教育的に授けることは容易であると思ふ。次に以上の句の意味を解説してみるならば大體次の如くである。

「卯月の天が甘露のやうな雨をしとしとそゝぎかけたので、乾ききつてゐた彌

Why wilt thou fly after spring to the south,

The soft south whither thine heart is set?

Shall not the grief of the old time follow?

Shall not the song thereof cleave to my mouth?

Hast thou forgotten ere I forget?"

(Swinburne's Tytus)

(Swallow 即ち燕は前世に於て高貴の人の愛女であつた。其姉妹と共に父母の寵愛を受けてゐたが或る事情の爲に我兒を殺して夫に怨を報いた。その崇りにて自らは燕に化し、其兒は雉となつて生れ、姉妹は夜啼鳥即ちナイティンゲールと化身した。然るに燕は我兒の不運なる有様をあはれとも思はず、且つ自らの前世の罪を悔ゆることなく、陽氣に天空を駆けながら戯れてゐた。これを見て姉妹たる夜啼鳥は大いに概歎した。この詩は夜啼鳥が燕に對して概歎の情を寄せた意を諳つたものである)

天空を陽氣そらに飛んでゐる燕の有様は目に見るやうに描かれてゐる。而も其れは意味の上からのみでは無くて、此詩の音律動其物がかゝる感じを吾人に與

へてくれるのである。スウィンバーンの詩は英語で書かれた多くの詩の中で蓋し音律動の妙技を發揮したものである。古今獨歩であると思ふ。

散文詩人として將た民衆詩人として古今東西に殆ど其比を見ざる自然的大詩人ホウイットマン (Whitman) は、近代の米國文壇をたゞ一人で占領してゐるのみならず、現代の世界民衆の思想を代表してゐる人であると思ふ。その詩形は英詩の傳統的規則を超越してゐるのみならず、その思想も明かに行詰つた歐洲人の思想を打破して、真人として將た全人としての立場に戻つた所がある。彼れの詩は心のリズムを以て味識すべきものである。吾人は彼れの詩を繰返へして誦する毎に心の律動が形式の律動と不斷に共鳴することを意識する。詩の内的生命が形式の律動と共鳴して吾人の生命其物に透徹するやうな心地がする。故に彼れの詩の音律動に親しみ、彼れの詩の内的律動に吸収される、ことが、吾人にとりては眞純な美意識を睡眠の中から喚び起すことゝなるのである。例へば次の數行に就て其一端を窺ふことが出来る。

Song Of The Open Road

Afoot and light-hearted, I take to the open road,
Healthy, free, the world before me,
The long brown path before me, leading wherever I choose.

Henceforth I ask not good-fortune—I myself am good fortune ;
Henceforth I whimper no more, postpone no more, need nothing,
Strong and content, I travel the open road.

The earth—that is sufficient ;
I do not want the constellations any nearer ;
I know they are very well where they are ;
I know they suffice for those who belong to them.

* * * * *
Now if a thousand perfect men were to appear, it would not amaze me ;

Now if a thousand beautiful forms of women appear'd, it would not astonish me.

Now I see the secret of the making of the best persons,
It is to grow in the open air, and to eat and sleep with the earth.

(意譯)

徒歩で、呑氣に私はのんびりとした路をとつて往く、
私の目前の世界は健全で自由の天地、
長い褐色の行路は私の面前にある。私の好む所へ通じてゐる、其路が。
今より後は私は幸運を求めない……私自身が幸運其物だ。
今より後は私は再び啜り泣きはしない。ぐづぐづすることもやめだ。何物
も必要としなす。
私は強く、且つ満足してのんびりとした大道を往く。

ある。ヴントやビュッヘル(Bücher)は心理學上の立場から音律動を説くに當りて詩に關係をつけて議論を進めてゐた。例へば詩の音律動は極めて醇なるものであつて音韻の律動はこゝに表現されてゐる。然もその源流を尋ねれば詩は作業(動作)と舞踊の律動に發生してゐる。かくの如く説くのはヴントやビュッヘルの一般的傾向である。然るにヴェルリエールは全く之と反して散文の中に詩の起原を見出し、且つ音律動の美を日常會話の中に見出したのである。即ちその説く所によれば吾人の常に話してゐる會話的言語(散文)の中に所謂散文的部分と呼ぶべき物があつて、其部分こそは音律動の標準を構成し、詩の發生を呼び出す基準となるものである。然らば是等の散文的部分は其性質は如何なるものであるかと問はんに、その時間的性質が長短何れなるにせよ、時間價の上から見て没交渉のものである。言ば、時間價の相場表の上では休止的と記さるべき性質のものである。然れどもこの休止的圈内に入れられた散文的部分は無制限的に長き部分を占領してをることは不可能である。故にその比較的長い部分の物でも三綴り即ち三つの熟音以上に超過することは無い。これを動作的に引直して見るならば比

較的に緩慢な歩調で一足歩くだけの距離に相當する。各人の自然的律動、換言すれば聲的歩(Vocal step)はこの散文的部分の平均的の長さによりて統一せらるゝのである。而してこの自然的律動は各人にとりて實に言語的に必要な役目をなすこととなる。即ちこれによりて其人の言語測定量の單位、換言すれば基本的標準が作らるゝからである。ヴェルリエールが三人の英吉利人について實驗した所によれば、英國人には是等の散文的部分を平等の時間に割當てやうとする傾向が無意識的に具備されてゐるやうである。其證據として最も共通的な事實は、是等の散文的部分の綴り即ち熟音の數が増加するにつれて、音がそれぞれに短縮さるゝからである。換言すれば綴りの字數が増加するにつれて音が短くなるのが英語の發音上實驗的に證明され得ることであると言ふに外ならぬ。英語の散文は二拍律動から三拍律動の間を調節的につけてゐるとヴェルリエールは想像したのである。而してこの推定を延長して次の如きことを述べてゐる。曰く「發音上の律動と歩行の律動との間に從屬關係が存在してゐるか否かは姑く措て問はざるも、此二者は唯一的の而かも同一的原因を有してゐる。然らば其所謂唯一的且

つ同一的原因とは何であるかと問はんに、吾人の筋肉運動がそれぞれ同一の物となり且つそれぞれの調節を試みなくてはならぬ必要が自然的に生じて来る。これが即ち以上の原因と銘名した物である。而してかゝる必要の生じて来る理由は一言にしてつくすならば、筋肉運動を律動化して勞力の不經濟的消費を輕減するといふ人類自然の本性に基くものに外ならぬ云々。

以上の説の科學的價値の批評は専門家の力をまちて決定する事であるが、少なくとも、音律動を日用語に即して説かうとした所に吾人の共鳴を見出す點が多いのである。音律動を吾人の平常の生活に關係づけて説いた學者は希臘時代から近世に至る迄無數にあつた。故にヴェルリエールの説は必ずしも斬新である譯では無い。然れどもヴント派の學説と反對の説明過程を採つても、かくも實驗的に何物かを築き上げやうとした努力は何人も認めなくてはならぬと思ふ。吾人は此説が言語教授の上に多くの暗示を與へてをることを認むる者である。音律動の美的認識は日常の平凡な言語に關係づけて生徒に徹底させる餘地がなほ十分存してをることを認めざるを得ぬ。詩や唱歌のみによらざれば音律動の美を

生徒に認知せしめることが出来ぬと思ふのは、少なくとも狹量な見界であると評し得る。この意味に於てヴェルリエールの説は吾人に一つの刺戟を與へたものと言ふことが出来る。

最後に言語教授と美的情操涵養の關係を多少實際的方面のことに立脚して論じてみる。

吾人が詩又は散文を讀むといふことは其原作者の思想なり感情なりを其原作者の口即ち音によりて聽くことに外ならぬ。言語教授はこの意味に於て生徒と原作者とを音韻的に契合せしめる方便となる。原作者は自己の思想や感情を文字で表現するが、その文字は彼れの音である。原作者は自己の手……筆及び文字が手の方便となる……といふ口で思想感情を發表し、教師は教科書の中で其原作者の手といふ口で發表された思想感情を、教師自身の目といふ耳で聽き、それを直接に生徒に傳へることとなる。故に生徒は原作者の音を聽くことによつて教育的價値を所有することとなるのである。言語によりて詩人や大思想家の思

想感情を生徒に取入れしめ、或は音韻の美的價値を生徒に意識せしめんとする際には、この事實を先づ省察しなくてはならぬと思ふ。こゝに言語教授者の難有味や貴さが在る。而して言語の美的教授の理想を實現する爲に最も必要な條件は生徒に想像力を起させることである。美の意識を解剖するならば想像力と美的情操の二つに分つことが出来る。然れども想像力は最も重みを占めてゐる分子である。想像力が活動しなければ美意識は殆ど成立しないと稱し得る。故に生徒の想像力に刺戟を與へることが最も緊要な事柄である。其方法は少なくとも次の如き階梯を経なくてはならぬ。

(一) 教授の目的を明かにすること。(二) 感情移入の準備を與へること。これは生徒に感受性を喚起せしむる準備行爲に外ならぬ。例へば詩の作られた事情とか、或は作家の境遇とかを説明する。(三) 直接刺戟、例へば吟詠朗讀の如し。(四) 理解的に且つ印象的に教授すること。これは前述理解に立脚せる美的情操の教養に最も密接な關係を有するものである。(五) 美的に讀ましむること。(六) 聯想教授、即ち既習のもの又は周知のものを材料として教授すること。(七) 綜合教授、即ち鑑賞力

の教授。(八) 應用及び練習。即ち想像力及び美的情操の涵養に重を置くこと。次に美的情操を喚起することが必要である。美的情操の生ずる時の吾人の心的態度は最初は沈思的・潛入的となるを要す。没我的となり、その美的對象物に自己が吸収せらるゝことが必要である。例へば美的對象物が耳を通しての音であるならば、其音に吾人の全部が吸収せらるゝことが必要である。これを他の言葉でいふならば吾人の心が求心的セントリビタンスとなることが必要である。藝術享樂の習性を作るに必要な條件は没我と興味心とである。故に言語の音韻的美意識を生徒に喚起せしめやうとする爲には享樂の習性を作ることが最大要件である。

第五章 大戦を中心として見たる歐米の外国語教授

歐洲大戦は種々の方面に於て大影響を興へてゐるが、教育上の諸問題に一種の革新的氣分を興へたことは拒む可らざる事實である。歐洲文明國の各方面に於ける教育界は少なくとも此大戦を中心として一つの革命を起してゐることは明かな事實である。而してその一つの現れは歐洲中等學校に於ける外国語の教育的立場が、戦前のそれに比して著るしく變化しつゝある事柄である。外国語科の教育的價値はこれを單なる功利的立場から見れば、實用的利益を興ふといふ簡単な言葉の中に一切を包含しつくす事が出来るであらうが、更にもつと深い所にその價値を求むるならば、テニスン卿の所謂「民族相互の親密を來すものは外交家よりも著作家の力によること多し」(“It is the authors, more than the diplomats, who make nations love one another”——Alfred Lord Tennyson) といふ所に見出さるゝのである。

テニスンの所謂著作家といふ意味は書物といふことで、換言すれば外国語といふことに外ならぬ。民族相互の親交は互にその國語を理解することによつて有効化さるゝものである。外国語を理解するといふことは外國の文化を理解し、その文化の長を知る、といふことである。外国語を教授する者の使命は外国語を通して外國の文化を自國の生徒に教授するといふ所に存してゐる。故に教育界に於ける外国語教師の立場は政治家や外交官以上に重大な職責を國家から興へられてゐる所に在る。かくの如く推定すれば外国語及び外国語科受持教員の教育的立場は實に高尚で且つ重大なものである。然れども過去に於ても現在に於てもこの重任は不幸にして完全に果たされてゐなかつた。歐洲文明國に於ても或は我國に於ても一つとしてこの高尚な理想が實現されなかつたのである。我國中等學校に於ける外国語科といへば先づ十中八九迄は英語科を指すものと見て差支ないが、その英語科なるものゝ中學校に於ける教授目的は、普通の英語を讀み又は聽き、綴り又は語る能力を養成し、以て智識を收得し且つ發表するの道を廣め、思想を豊富にし、徳性の涵養に資するにあるは固よりであるが、それ等は今日迄一つ

として理想的に遂行されたものは無い。例へば普通の英語を讀み又は聽き、綴り又は語る能力を養成するといった所で、今日の中學校卒業生には到底かゝる事は覺束無いことである。予の今日迄視察した中學校は僅に百校ばかりであるが、その比較的狭い經驗だけをもととして結論してみても、現今の中學校卒業生の英語力は米國の小學校第三學年生の力があれば先づ相當の出來榮えであると思ふ。況んや中學校ほど英語科に重きを置いてをらぬ師範實業高女等の卒業生に於てをや。中學校は英語科の教員數も多く、授業時數も多く、生徒の熱心も強烈であるが、それにして五ヶ年間後の努力の結果がこれしきのものであるならば、たゞに功利的立場から見たいけれども大に貧弱な成績であると斷定しなくてはならぬ。随つて英語を通して直接に外國人の智識を收得するとか、或は自己の思想を之によつて發表するとか、或は之によつて徳性の涵養をなすとかいふことは頗る覺束無いことだと思ふ。然れども予のかゝる悲觀説は英語教授の理想を餘りに高き所に置くからだといふ非難を受けるかも知れぬ。予も亦この點を承知してゐる。然れ

ども今日の英語科は學校當事者が努力をしてゐる割合にその成績が貧弱であることを認めざるを得ないのである。蓋し何人といへども今日の教育界の事情を實際的に目撃したならば、予と同一の結論を下すことに躊躇する者は無からうと思ふ。然らばその成績の良好ならざる理由は果して那邊に伏在してゐるか。それには多くの理由があることと思ふ。民族的事情が、換言すれば我國の國民的性質や國語の性質が、英語を學ぶ者に先天的に不便な條件を具備してをるといふことも一つの原因であらう。或は教授者、否な、もつと適切な語を用ひていふならば中學校の校長なり、或は學校其物の空氣が、英語を上級學校受験準備の便宜的學科として見てゐるといふ所に、上の如き不成績を來した原因が伏在してゐるかも知れぬ。或はかくの如き謬見を中學校當事者に抱かしむるに至つた上級學校其物が當面の責任者であるとも言ひ得るであらう。中學校卒業生の英語力考査の方法が、中學校の英語科の立場を了解してをらぬ上級學校當事者の爲に私されたといふことも、過去に於て明かにあつたことと思ふ。而して是等の多くの原因は中學校英語科の目的を左右し、その結果、今日の如き非教育的のものとなつたとも評

し得る。然れども如上の觀察は言はゞ責任轉嫁の議論に過ぎずして絶対論としては頗る價値の無いものである。吾人は純理の上に立ちて批判するならば教育者自身の無定見と無節操に如上の理由を歸するものである。上級學校も中學校も二つながら其れ自身の教育的使命を忘れた結果、この弊を招致したものであると斷定しなくてはならぬ。責任は上下の如何を問はず教育者自身の無定見と無節操に歸すべきものである。世人或は上級學校數の不足なることにこの弊を歸せんとするものもある。然れども此説も純理的には大きな價値を有するものは無い。蓋し實際問題としては學校の數の少數なるが爲に入學難を生じ、其結果、不自然な淘汰作用が教育界に生じて來るのは事實である。國家的問題としては上級學校數と下級學校數の比例を合理的に勘考しなくてはならぬものである。然れども絶対論としては左程價値ある説では無い。上級學校の數が少ないからといふ理由の下で入學生を拒む爲に、非教育的な試験法を行はなくてはならぬといふ譯は無い。同様にその非教育的な態度に順應しなくてはならぬといふ理由は下級學校にありうる譯は無い。

本邦の外國語教授の問題を考察する爲めの手段として先づ歐洲文明國の大戦前の外國語教授の趨勢を紹介して見度い。

英國に於ける外國語科は主として獨逸語と佛蘭西語の二つに限つて論ずることが出来る。英國人のこの二つの外國語に對する熟練の長所は論理的にいふならば平等でなくてはならぬ譯である。何故かと問ふならば今日の英語は獨逸語の古い形とも見るべきアングロサクソン語と、佛蘭西語の地方語とも見るべきノルマン語から出來てゐるからである。然るに今日の英國中學校程度の生徒は獨逸語よりも佛蘭西語を好み、且つ進歩の程度も獨逸語よりは佛語に於て著るしきものがある。而して此傾向は米國の中等程度の學校の生徒にも見らるゝ事實である。故に英國に於ける獨逸語科と佛語科の立場は、我國に於ける英語科と他の外國語科の立場に類似したものである。随つて我國に於ける中等學校の英語科教授の方法なり其教育的立場なりが、他の外國語科の教授法なり教育的使命なりを定める標準となつてをると同様に、英國中等學校に於ける佛語科の教授法や其價

値は、他の外國語の教授法なり値打なりを決定する目標となるのである。此意味に於て英國の大戦前の佛語教授の實況を觀察するに、先づ初年級の授業は數箇月にわたりて専ら聲音學上の記號で發音の基本的教授を行ふこととなつてゐた。教授上の根本主義としては直觀教授を以て一貫することに定めてあつたが、上學年の生徒には必ずしも然らず。譯讀及び文法教授にありては上學年に限りて母國語を用ひる場合が割合に多くなつてゐた。佛語科教員は我國の英語科教員と同様に内國人が大部分を占めてゐるが、長期にわたる休暇を利用して佛國に實地練習に派遣される機會が多つた。この事は獨逸語科教員の場合に於ても見らるゝ事柄であつた。中等學校に於て外國語を學ぶ生徒の年齢は十一歳か十二歳頃から十八歳乃至十九歳迄の間である。佛語科の課せらるゝ年限は一様では無いが長いのは八ヶ年、短いのは五年乃至六ヶ年である。獨逸語は三ヶ年乃至四ヶ年修了で第二外國語となつてをる學校が多つた。毎週の授業時數は概して我國中學校の英語科時數よりは遙に少なかつた。外國語科の目的は話す力を完全にするといふことよりは……即ち會話力の完成といはんよりは、寧ろ外國語の力を

かりて、外國の文化を味はせ、生徒の精神を向上豊富ならしむるといふ事にあつた。皮相な意味に於ての實用主義功利主義は英國教育界の初から期待してゐる事ではなかつた。而してかくの如き教育的見地から行れた此國の近世外國語科の實際的方面に於ける特色は中等學校初年級の生徒に教育的方案によりて精確な發音を教授することであつた。最近の最も進歩した聲音學上の原理に基いて發音教授を行ひ、言語教授の基礎的智識と音韻の美を聯想的に初學者に授けんとする所に此國の言語科教授の長所が現れた。而して此理想を有效的に遂行する爲に一教室收容人員を十名乃至廿名内外に制限した學校が多つた。大戦當時英國の經濟界が危機に陥り、教育界も其影響を被りて、所謂緊縮的消極的的方案によりて非教育的な設備をなさなくてはならぬこととなつたが、其當時文相の椅子に在つたフィッシャー氏は極力かゝる方案に反對した結果、教育界は時局問題と殆ど無關係の姿で、否な場合によりては戦前よりも景氣よく發展的設備を斷行することが出来た。特に言語教授の如き出征教員の爲に補充難を生じて實際的には打撃を受けたにも拘らず、實質的には必ずしも戦前の有様に比して消極的とはならなかつ

た。外國語科の教員の質も概して良好の者のみであつて、自己の専門的語學に對して造詣の深い者があると共に、實用的才能も豊富のものがあつた。然れども以上の事柄は此國の長所をのみ列記した譯であるが、缺點も亦多少あつたのは事實である。例へば上級學校入學試験の際には國文を外國文に譯させることが上級學校當局者によりて最も重要視されてゐた結果、中等學校に於ても此分科に非常に重みを置いてゐた。我國の中學校に於て和文英譯を過度に重じてゐると同じ譯である。但し此傾向は善用さるゝならば非常に好結果を生むものである。既習の外國語の智識を邦語の智識と比較し、且つ外國文と邦語文との構成的相違を確實に意識する上に、この分科は與つて力あるものである。たゞこの學科の病根はやゝもすれば受験式の型をのみ授けがちになることである。方程式で作文の型を授けんとする弊が生じ易いことである。次に他の缺點として指摘すべき事柄は、中等學校上學年の外國語教科書は、往々にして上級學校入學試験準備に都合好きものをのみ採用してをる事である。これも我國現在の中學校四・五年級用の英語教科書、特に補助又は科外的教科書が、受験希望者向きに出來てをるのと類を

一にしてゐる。

佛國の中等程度の學校に於ける近世外國語は主として英獨の二ヶ國の語學が重きを占めてゐる。七ヶ年制度の中等學校にありては生徒の年齢は十一歳頃から入學して十八歳頃に卒業することゝなつてゐて、第一外國語は(近世語なるは)六ヶ年間學ぶことになつてゐる。但し七ヶ年目は隨意科として課してゐる學校が多い。之に反して第二外國語は二ヶ年修了である。六ヶ年間課してゐる第一外國語科の課程は三つに大別されてゐる。(一)初の二ヶ年間は耳と舌の練習である。全部模放せしめることを以て教授の根本義となしてゐる。(二)中間の二ヶ年は讀書教授を以て一貫してゐる。(三)最後の二ヶ年間は作文及び其他の實地練習を課し、且つ讀本としては文學書を讀ましめてゐる。かくの如く六ヶ年間の教授方針が整然として定められてゐるが、實績は頗る不良であつた。初めの二ヶ年間の授業は實に巧みな教授法で指導されてゐる爲に生徒の力が著るしく進歩するが三年級四年級と進むにつれて成績が非常に不良になつて來る傾向がある。故に卒業後、生徒が獨力で英獨の近世文學を讀むことは殆ど不可能である。其理由は

種々の複雑した事情に歸すべきものであると思ふが、最も明かな原因の一つは、此國の言語教授の方針は餘りに形式に固執するからである。例へば直觀教授を行ふにしても、或は實物教授を應用的に行ふにしても、餘りに形式主義に執られて何等自覺的の所が無いからである。而してこの形式一天張りの教授法が初年級から卒業の時迄機械的に不斷に行はれてゐる爲に、何等の活氣も何等の自發的氣分も生徒に生じて來ないのである。換言すれば教育の對象物に順應しての教授法が此國に割合に少なかつたのである。皮相な意味に於ての直觀教授や、實利主義に祟られた應用主義の教授法が、終に佛國の中等學校に於ける近世外國語科の成績を貧弱なものとなして仕舞つたのである。外國語科教員の教育者としての自覺が確立しなかつた所に失敗の一大原因が在つたと評し得る。

獨逸は流石に教育の國であつた。外國語教授の根本方針を定むる點に於て、將た其根本方針を實地に運用する方法に於て、大戰前既に古き時代から英佛を凌駕するものがあつた。而して獨逸の此長所は其由來する所を考察するに、近世の各私教授法の長を採り且つ之を運用するに當りて全く受持教員の自覺心と個性と

に一任した點に在る。教員の自覺と個性に信頼したといふことは型に封執することなしに、隨所隨時生命の宿つた潑瀾たる教授法を要求したといふ事に外ならぬ。即ちこれによりて眞の人間味のある教授法が各學校に於て行はるゝに至つたのである。獨逸の中等程度の學校は大戰前の實際を見るに其種類が多様であつた。隨つて近世外國語の割當年限の如きも一樣で無つた。然れども極めて一般的に言ふならば中等學校は概ね九ヶ年修了の標準であつた。約九歳乃至十歳にして入學し、十八歳乃至十九歳又は二十歳にして卒業することゝなつてゐた。

外國語科は學校の性質によりて著るしく異なつてゐたが英語か佛語を必ず課してゐたか、或は英佛二國語を必ず課してゐた。先づギムナジウムと銘名されてゐた中等學校では佛語、拉典語、希臘語の三國語は必須的に課してゐたが、拉典語と希臘語は古典語であるから言語科と見做すのは或は不自然であるかも知れぬ。佛語は第三學年から始めて卒業迄合七ヶ年間授ける。時數は平均一週三時間と見れば大過無し。英語は第七學年から始めて卒業迄合三ヶ年間授ける。一週平均約二時間づゝである。次にレアル・ギムナジウムと名づくる中等學校に於ては古典語

は僅に拉典語だけを授け、希臘語の代りに英語を長期にわたりて教授し、且つ佛語を前掲ギムナジウム同様に長期にわたりて授けることゝなつてゐた。特に英語は第四學年から授けて卒業迄合六ヶ年間一週三時間位の割合で教授するのである。故に近世外國語の二つだけは長期にわたりて確實に授けらるゝ譯である。かくの如く近世語教授に重きを置いてゐる譯は前者即ちギムナジウム式の學校に比して、此種の學校は實際的人物を造らんとする所に理想を有してゐたからである。即ち多少實科的氣分を加へてゐたからである。次にオーベル・レアル・シューレと稱する中等程度の學校にありては古典語を課することを成るべく避ける方針で進んで來た。然れども古典語の一たる拉典語を全然排斥することに對しては多少の意見の相違も此國にあつたやうである。故に教育的立脚地から拉典語を多少保留することが安全であると認められたのである。大戰前にこの精神を尊重して拉典語を訓育的學科の意味で課してゐたものは少なくなかつたと言はれてゐる。但しオーベル・レアル・シューレの性質は自然科学や數學を特に重じて近世的科學思想の鼓吹に力めんとする所にあつた。故にその手段として近世語教

授に最も重を置いてゐた。例へば佛語は九ヶ年の長年月にわたりて教授してゐた。一週約五時間乃至六時間に及んでゐたのである。英語は六ヶ年間にわたりて一週四時間位の割合で教授してゐた。故に言語科は此種の中等學校にありては理科及び數學科と共に基礎的學科と見做すことが出來た。次に高等女學校を觀察するに佛語を七ヶ年、英語を四ヶ年にわたりて授けてゐるものが割合に多つた。最後に以上の學校には概ね補修科が設けてあつて一ヶ年で卒業することが出來るやうになつてゐた。近世外國語科として英佛二ヶ國語は必須科といふ意味で課せられてゐた。故に獨逸の中等程度の學校は大戦勃發の當初迄は明かに外國語に重きを置いてゐた事が何人にも了解し得ると思ふ。獨逸政府は一面に於て國語尊重論を唱へて極端迄外國語の勢力を排除することに努力してゐたが、他の一面に於てはかくの如く外國語の必要を認めてゐたのである。故に獨逸の教育界の言語科に對する態度は國語尊重と外國語尊重との矛盾路に立つてゐたやうにも見えるが、其根本精神を討尋するならば何等矛盾を見出すことが出來ぬ。國語尊重の精神を實現する爲に外國語排斥を試みたといふ事は、外國語の缺點を

盲目的に模倣して獨逸の國語の美點を汚損する者のあることを恐れたからである。

獨逸中等學校に於ける外國語教授の方法なり其成績なりについて少しく考察して見る。先づ發音教授に就て述べんに、聲音學上の記號を用ひ或はその原理に立脚して精確な音を生徒に授くべきか、若くは、全然生徒をして教員の發音に盲目的に模倣せしむべきかといふやうな事は、悉く受持教員の自由に一任してあつた。教授者の個性尊重の精神はこゝに最も明かに表示されてゐた。次に讀書(讀本)教授は外國語教授の中心と見做れてゐた。言語教授と情操教育、言語教授と常識教育が何れも讀本教授によりて統一された。讀本教授は原文を邦文に譯すこともあつたが概していへばかゝる事は成るべく避けてゐた。文法は系統的に教授することを旨としてゐたが、實用的といふことを常に必要條件としてゐた。作文科は外國語教授上非常に重きを置かれてゐた。邦文を外國語に譯すことを頻繁に行ふてゐた。説明は外國語を以てなすことを本體としてゐたが文法科だけは邦語で説明してゐた。教授上の通則としては初めの二ヶ年間は徹底的に直觀的教

授によつてゐた。上級に於ては多少折衷する所があつた。書取を課することは非常に猛烈であつた。本日書取として課した所を明日繰返へすといふことが屢々行れてゐた。亦分量を多くすることも特色であつた。

北米合衆國は概ね無理なことを行つてゐたやうである。英佛獨に於ては外國語教授は生徒の力としては極限迄要求されてゐた。教授者は外國語教科書を取扱ふに當りて量よりは質に重きを置くのが英佛獨の教育界の一般的傾向であつた。然るに米國特に都會の中等學校にありては教授者は生徒に過重の外國語を課してゐた。隨て生徒は外國語科に對して苦痛を感ずるのみであつて何等の興味をも持たなかつた。實際的の知識は之が爲に生徒に與へらるゝことは無つた。生徒は外國文學を味ふ心は更に無く、卒業後は直に外國語を棄て、仕舞ふといふのが一般的風潮であつた。米國の大學生は獨佛の何れの言語にも通曉してをらぬことは事實である。米國の中等學校は大陸に於て一ヶ年を費して教授する外國語の分量を半ヶ年の間に教授しやうとしてゐる。速成科的の取扱を言語教授の上に流用するのは教育的で無いことは自明の理である。米國はこの不

自然なことを試みて失敗を招いたのである。

大戦開始當時の英佛獨米の外國語教授は確定的の方針によつて行れてゐなかつたことは明かな事實である。但し頗る獨斷的に而も國家的命令の下に直觀的實物教授によりて外國語を生徒に教授してゐた國は佛國である。英國では教授の方法は必ずしも國家的に統一されてゐなかつた。教科書も教授法も或る程度迄は受持教員の自由に一任されてゐた。獨逸では英國以上に受持教員の個性が尊重されてゐた。然れども此國は一般に教育が進歩してゐて、教授法の如きも舊式の翻譯主義や文法詰込み主義が非教育的と認められてゐた。新舊何れの教授法でも受持教員が自由に採用するといふ事は獨逸の風潮であつた。米國の外國語教授法はやゝもすれば極端に走らんとする傾向がある。餘りに新しきを求める結果、生徒を犠牲に供する弊がある。概して質よりは量に重きを置く缺點がある。大陸の中等學校の外國語科教員は其隣國に旅行し或は隣邦人の來訪を受くる機会が多いが、米國の外國語教員は此好機會を受くることが稀れである。隨つ

て外國語を實地に練習する機会が少ない。英獨佛の中等學校の生徒は外國語を學ぶ年限は概して夙くから始つて廿歳前後迄つゞく。即ち國により、學校の種類によりて一樣では無いが、先づ九歳乃至十一歳頃から學び出して九ヶ年乃至、短くとも六ヶ年間を學ぶのである。(獨逸では九ヶ年、英佛では六ヶ年平均である)。然るに米國では漸く十四歳に至りて外國語を學び始め、長くて四ヶ年間……但し平均三ヶ年間だけ學ぶに過ぎぬ。故に中等學校だけで家庭に入る者は外國語の力は極めて貧弱である。米國にはこの外、外國語教授上不便な事情が多い。例へば大陸から此國に移住して來た者が多いが、其れ等の人々は家庭に於ても社會に於ても概ね英語を用ひてゐるから、外國語を家庭で練習する機会が生徒に與へられ無い。且つ是等の父兄が彼等の母國語たる外國語を家庭に用ふることがあるにしても、其大多數は無教育者であるが故に教育的の外國語を用ひることが殆ど無い。隨つて其等の父兄の間に混じてゐる中等學校生徒は外國語を精確に習得することは不可能である。米國中等學校の校長及び上級學校當事者が數年前、外國語教授法に關して當局者に意見を陳述したことがあつたが、其内容は米國中等學校の外國語科教授法は餘

りに皮相な實際的方面のことに捉はれてゐて、外國語の教育的價值を等閑視してゐるといふことにあつた。この意味は結局、外國語で書いた良書を讀破する力及び之によつて受くる智徳兩方面の効果が實際的に生徒の一身上に現れて來ないといふことを攻撃したに外ならぬ。かゝる非難の聲が智識階級から現れて來たのは外國語に對する教育的價值の存在を認めんとする輿論の叫びに外ならなかつた。外國語を文化教育の一分科と見做すことの傾向がこの攻撃の叫びの中に明かに含れてゐたのである。こゝに言語科革新の曙光が認められたのである。

大戰當時の歐米諸國、特に英佛米の三ヶ國に於ける外國語教授の概況を觀察するに、英國は少壯外國語教員が多數に出征した爲に大きな攻撃を教育界に加へられた。然れども政府當局は教育的方面に對して甚しき動搖を生ぜしむることを避けた結果、外國語科の實際上の打撃は吾人の想像するが如き甚大なものが無つた。吾國が大戰の打撃を受けて多くの英語科教員を肉彈の代りに黄金の犠牲者として失つて仕舞つたのに比して、教育上の損失は遙に少なかつた。否、或意味

に於ては英國の中等學校は外國語獎勵の好機會を握り得たのである。敵としての獨逸を詳細に識ることが彼等に最も必要であつた。獨逸語を知らざる者は敵の力を批判し得る資格が無いといふ思想が國民の心を支配し、特に愛國の血に熱してゐた中等學校生徒の氣分を支配してゐた。吾人が日露戦争の勃發によりて露語を知らんとする念が刺戟された事實を経験してゐるが、何れの國民といへども我が父兄或は親族の者が國家を護らんが爲に強敵と生命の奪ひ合ひをなしてゐる時に當りて、敵國の人々が發表する思想感情に無頓着であり得る筈は無い。敵國の國語に多大の興味を有するに至るは當然の結果である。故に大戰開始以來、英國の中等學校は獨逸語科に對して多大の興味を生徒に抱かしめる機會を得したのである。然れども其反面に於ては坊主憎くければ袈裟まで憎しの心理的表現が一部分に張つてゐたことも明かである。獨逸語を教育的立場から眞面目に考へて、之に對しては尊敬の心を以て習得しやうといふ感じは多少減殺されたこともあつた。佛語に對する國民の態度は徹頭徹尾親交的であつた。自國と利害關係を一にしてゐる國の言語は何れの國民によりても感情上から一種の親

みを以て研究さるゝものである。日英同盟が結れて以後の我國民の英語に對する興味と親みはこの事實を證明してゐる。大戰以來英國の中等學校は佛語教授の上に多大の利益を獲得した。かくの如く大戰其物は英國の教育界に有形的方面から大なる損失を與へるやうに向つてゐたが、以上の如き理由がもとゝなつて此國の中等學校の近世外國語科は實質的には甚しき打撃を受けなかつたのである。

佛國の中等學校は大戰當時甚しき打撃と動搖とを近世外國語科の上に與へられた。獨逸の強敵に苦しめられてゐた此國の人々は或意味に於ては冷靜に教育のことを思ふたり實行したりしてをる餘暇が無つたのである。特に中等學校の近世外國語科教員は大部分は戰線に立つて國難に殉ぜんとしてゐたのである。故に場所によりては學校が閉鎖されたり、或は或特殊の學科が教員不足の爲に休講となりし例が實に多つた。教育界の打撃は恐らく此國建設以來稀に見るところのものであつたと思ふ。上級學校特に大學の如きは男學生が多數出征した關係上、生徒數が激しく減じ、加ふるに教授の陣歿する者或は戰線に立つ者多數に及

び、到底完全に授業を行ふことが出来なかつたとさへ傳へられた。男學生が減じた反動として女學生が激増したのも大戰影響の著るしき現象の一つであつた。今後の智識階級は女子の多數を以て占有せらるゝであらうとは此國の識者が既に豫言してをる所である。大戰中に於ける佛國教育界は内面的にも著るしき動搖を生じてゐた。例へば中等及び高等程度の學校組織を改變することの可否論は大戰の中頃から末頃にかけて最も喧しく論じられてゐた。凡人教育を犠牲に供して天才教育を施すことの必要なる理由を述べたものが、非常に有力で且つ影響を及ぼすことが大なるものがあつた。特に科學的方面に優秀な才能を有する者は中等學校時代より特別の便宜と指導を與へ、大學は國費を以て其秀才を教育するを至當とすといふ議論さへ唱へられてゐた。一部分の才能の長を採りて然も其才能が僅に中等學校初年級に於て現れたものであるにも拘らず、これを將來の科學の天才或は巧妙な技術家の卵として、國家的に教育してやらうといふのは餘りに人格の完全を無視した議論であるが、科學的武器を以て自らを眼前で惱してゐる獨逸其者の強さを見ては、かゝる國家的功利説に捕はれざるを得なかつた

のである。國家即ち民衆が彼等全體の爲の存在をのみ病的に考慮する時は、必要論の一天張りで個人其者の存在を認める雅量が無くなるものである。民衆の力が極端迄合一化さるゝ時は一種の専制君主國が出現した時である。民衆國共和國は専制君主國の別名に過ぎぬ。佛國の教育界は大戦當時危くも教育的専制國を造らんとした。然れども此思想に反動があつた。而して假令其反對論は力の弱いものであつたにもせよ、少なくとも敵の論者の心ある者をして反省せしめるだけの刺戟力を有してゐた。而してこの教育上の二つの異なつた思想は言語教授の方針を定むるに當りて最も強烈に表示されたのである。古典語を中等學校教科課程の中から削除して近世外國語だけになして仕舞ふといふのは、教育界に於ける科學尊重論者の主張する所であつた。之に反して古典語の必要を力説し、科學的功利論の非教育的なるを攻撃した者は眞に國家の將來を憂ふる者か、然らざれば教育の畠に育つた教育抽象論者であつた。此二派の論争は大戦の終り頃に至るや倍々激烈となつた。然れども實際的傾向はこゝ一二年間の事實をもとゝして言ふならば、古典を排斥し、近世外國語科を功利的見地に即して尊重してを

るやうである。これは大戦前迄佛國の外國語科教授の目的と甚しく相違してをる點である。今日の如き方針を極端迄進めてゆくならば外國語教授の教育的使命は極めて皮相的なものとなつて仕舞ふ。

大戦當時最も大仕掛に(見様によつては多少廣告的であつたが)教育上の活躍を試みた國は北米合衆國であつた。有り餘るだけの財力を握り、且つ大西洋を隔てゝ自國の安全を背景として歐洲の戦争に参加した關係上、文化の爲といふ大きな旗幟の下に、最も役割りのいゝ仕事を無事に果すことが出來たのは、言はゞ米國の思ひもよらぬ幸福であつたと思ふ。何れにもせよ、米國は各方面に動員令を下して所謂正義の爲に人道の爲に文化の爲に景氣のいゝ喧嘩をしてくれた。この各種の動員令の中で最も吾人に興味のあつたのは外國語、特に佛語の實地研究といふことゝ、教員出征問題を巧みに結びつけた事實である。二百萬の米國の大軍が大西洋を横斷し、英國海峽を渡つて大陸に運ばれた。この大軍の兵員の中には教育の畑に育つた人々が相當に多つた。米國の教育界の權威者は流石に先見の明があつた。其等の教育に關係ある人々、例へば教育者、大學生、陸軍の將校にして軍

事教育に定見ある者は、是等の智識階級の人々は渡佛後の言語研究の方針に關して議するところがあつた。勿論此案は米國聯合大學の總裁たるエール大學のストークズ博士が爲に佛國に赴いて種々の實際問題について詳細な調査をやつたのである。ストークズ博士は之が爲に佛國に赴いて種々の實際問題について詳細な調査をやつたのである。シカゴ大學・ハーバード大學・カンザス大學、其の他多くの著名な大學の當事者は何れもこの案に好意を表してゐた。其案の骨子となれる者は出征米軍を數團に分ち、其等の各團に教育者の老練なる者を割當て、戦争の閑ある毎に普通學の教授をなし、特に佛語を實地に練習せしむる機會を與へるといふことにあつた。戦争の終つた曉に二百萬の人が一時に米國へ歸還するならば就職難の生ずることとは明かである。故に佛國に在る間に十分に佛語を學び置き、戦争が終熄したならば米國又は英國の中等學校に就職して、佛語科の教員となるのは一身の安全であるのみならず、大戰によつて亂された教育界を救済する方便にもなる。この理由の下で此大仕掛の企が着々實行されたのである。吾人はこの成績が今日果して何れの點まであらはれてゐるか、未だ米國教育界の權威者から明かに聞くこと

が出来ないが、かゝる企のあつたことは教育的に見て頗る人意を強うするものであると思ふ。大戰勃發の前既に二三年頃から、米國の外國語科問題は著るしく活氣を呈してゐた。中等學校外國語教授の方針なり方法なりに關して、高等程度の學校からも將た父兄の側や實社會の代表者側からも、種々の註文が出てゐた。之が爲に紐育市の如きは歐洲文明國の外國語科教授の實況を視察せしむる目的で専門家を派遣させた程である。外國語科の成績が貧弱であるといふ聲は米國に於て大戰當時から喧しかつた。而して大戰後の今日に於ても依然として甚しきものがあるといはれてゐる。然れども米國の政府も教育社會も生徒の父兄も此問題をどこ迄も教育的に考察してみやうとする態度は、こゝ數年來毫も異なる所が無い。外國語教授の根本問題や或は實際的問題に關する研究調査の機關は米國は實に整頓してゐる。これを我國の現狀に比するならば雲泥の差があると思ふ。故に米國中學校の外國語科の問題は必ずや近き將來に於て解決せられ、それが歐洲文明國の教育界にも認めらるゝであらうと思ふ。

大戦後の歐米教育界は各種の方面に於て一大發展と一大革新を試みんとしてゐる。義務教育の延長、學科の改廢、教育費問題、各程度の異なつた學校の連絡問題、社會と學校との結びつき問題、家庭と學校との結合問題、其他各種の問題にわたりて各種の考察が行れてゐる。然れども吾人のこゝで主として興味ある事柄として見るべきは、中等學校に於ける外國語問題である。大戦以後恐らく外國語問題及びこれに關係して國語問題ほど、教育的に變動を來したものは他に無からうと思ふ。大戦前にありては國語及び外國語の中等學校に於ける教育的立場は、その標榜する所が如何に堂々たるものであつたにせよ、多くは皮相な意味に於ての功利的性質を帯びてゐた。國語及び外國語を通じて眞に生徒の精神的教養に資せんとする言語教授は、實際的には果して如何なる程度迄行れてゐたか疑問であつた。然るに大戦以後の歐米言語科の教授上の方針は著るしく變じ來りて、今や大戦前の如き功利的見地に立つて此科を取扱んとする者は少なくなつてゐる。カルチュア即ち文化への道順として言語科を見るのが今日の一般的傾向になつてゐる。生存競争の場裡に立つ際に用ひる武器として之を見る事が今は止んでゐる。

。自らの精神の糧として之を學ばんとする氣分が著るしく發達して來たのである。外國の文化を味ひ、自らの思想と感情の野を肥して、以てゆとりのある人間の生活を送らんが爲に外國語を學ばんとする者が甚しく増加して來た。其證據には學生以外の者で外國語を熱心に學ばんとする市民が英國及び米國に著るしく多くなつて來たと言はれてゐる。中等學校の言語教授はこの文化的機運に共鳴せざるを得なくなつて來た。上級學校への入學試験の準備目的とか、或は實業界に入る者の爲に速成的に外國語を教授してやるといふやうな、教育的に何等の根據も無い皮相な教授方針は、日一日と其の存在の影を薄くしてゐる。昔伊太利文藝復興當時の人々は文化生活を送らんが爲に古典語を研究した。大戦以後の英米人は現代的將た世界的文化生活を享樂する爲に現代外國語を學ばんとしてゐる。この傾向が今後順調に進んで行くならば世界的文化實現の爲に外國語教授の貢獻する所は大なるものがあると思ふ。獨逸も大戦以後この大勢に促されて、所謂從來のやうな狭き意味に於ての國家主義を棄て、人道的な將た文化的な方面へ言語教授の針路を向けることであらう。たゞ此間に介在して最も時代錯

誤と思はるゝは佛國の言語教授の方針である。佛國には古典語尊重論者と近代外國語尊重論者があつて、何れも其極端な所迄行つてみやうとする論であるが、こゝ一二年來の傾向を見るに著るしく近代外國語尊重論に傾いてゐる。然かも佛國の近代外國語尊重の思想は餘りに實用的といふ方面に傾き過ぎてゐる。故に佛國がこれ迄古典語特に拉典語を教育の中心として重じて來た其意義ある歴史を棄て、近代外國語を皮相的に取入れるやうになるならば、國民教育の爲に由々しき事を生ずるであらうと思はる。これは既に佛國の心ある人々が杞憂してゐる事柄である。拉典的文化は拉典語科を通じて之れ迄佛國の文化を培養してゐた。拉典思想は拉典語其物の文法及び發音と同様に、如何にも人道的で、如何にも典雅優麗で、如何にも整頓したものであつた。然るに之を根本から放棄して仕舞ふのは果して如何なるものであらう。否、此科を規則面からは取除かないにしたところで、事實上之を輕んずるやうになつたならば國家的教育の見地から見て一大事件であらねばならぬ。我國民が漢文科の尊重すべきことを中學校の場合について論ずるに當りて、折々佛國又は英國中等學校の拉典科に關係づけて説く

者があるが、佛國に於ける中等學校の拉典科の教育的價值は、我國の中學校に於ける漢文科どころの話では無い。現代の佛國教育界の功利論者が、若し皮相な國家主義にとらはれて、近代外國語や科學の應用的方面にのみ重きを置くことを主張して、それが教育界全部の空氣を支配するやうになるならば、佛國の將來は悲しむべきものである。國語科に於ては特にそうである。何れの國に於ても見らるゝ如く、國語尊重論は即ち愛國論と同一視されてゐるが故に、國語を辯護する者は愛國者といふ都合よき看板を與へらるゝのである。然れども多くの場合に於て國語尊重を口にする者は外國語に理解の無い人々である。自國の言語を完全に理解する者は外國語を理解した人に限ると獨逸の詩聖はいふた事があるが、實際其通りである。佛國の教育界に於ける國語尊重論者は、徒に古典語を斥け、愛國心を鼓吹することを以て能事終れりと信じてゐる。新しき意味に於ての文化生活はかゝる人々によつて理解され得べしとも思はれぬ。世界の人心は民衆の爲の文化へと進展してゆく。人の思想と感情を端的に寫してゐる言語は、文化生活への通行券であらねばならぬ。然るにこの世界的な通行券を小さなタイラントの手

によつて握り潰さんとするは罪の大なるものと言はざるを得ぬ。吾人は今後佛國の教育界が加何なる方面に新しき針路を開拓してゆくかを刮目して見度いと思ふ者である。こゝ一ヶ年や二ヶ年間に斷片的に現れた姿を見て、この歴史ある歐洲先進國の前途を豫言するやうな大膽なことは、少なくとも吾人に出來ぬ仕事である。過去に於て多くの哲人や教育家を出した此古い文明國が、吾人の想像するほど先きの見えぬやうな事を斷行するものではないと固く信じてゐる。(佛國の大戦當時の教育界を得た参考書) Thamin: L'université et la guerre, Paris. Sarraut: L'Instruction publique et la guerre. G. Goblot: La Guerre et l'enseignement des langues vivantes en Allemagne..... Revue pédagogique, juin, 1918. 所掲. Hersent: La Réforme de l'éducation nationale, 1917.

第六章 我國の中等學校の言語教授

我國に於ける言語教授の實際的問題として最も教育者の頭を悩ましてをることは二種類ある。一は初等教育に於ける國語科問題、他は中等程度及び高等程度の學校に於ける外國語科(主として英)である。而して前者は教育的見地に立ちて種々考察された結果、現在の有様では非常にその教授法が進歩して來た。然れどもなほ大なる缺點として見なくてはならぬ事柄は、國語其物に對する言語學的理解が教員に缺乏してをることである。初等教育の國語科は文學的材料及び文學的色彩に富んでをるものゝみでは無い。否な其等の分子に富んでをるものが多いとしても、その方面の教授は獨り國語科教員によつてのみ行はるゝものでは無く、歴史科の教授でも、唱歌の教授でも、修身の教授でも、相當に成績を上げうるものである。初等教育の國語科は言語學的方面に於て教育的使命を果さなくてはな

らぬものである。文學的趣味を生徒に授けると共に、言語其物に對する語學的興味及び語學其物に附帶してゐる教育的價值を發揮させるのが國語科の責任である。然るに今日の我國小學校國語教授にはこの氣分が大に缺乏してゐる。師範卒業生には此方面の力が著るしく缺けてゐることは予は固く信ずる者である。國語の言語學的研究は、恰も漢文の言語學的研究の貧弱であると同じ意味に於て、將た同じ程度に於て、頗る貧弱であるのは我國の國語科の實狀である。文學の研究は興味があつて且つ研究甲斐もあり、同時にそれに對して所謂自分のオビニオンなるものが容易に造り上げることが出来る。紫式部や近松翁に對して人好きのする感想を述べるとは割合に容易である。何々歌聖の人生觀とか、何々作家の道德觀とかいふ題目の下で、故人を論じることが、見方によりては何人にも出来る仕事である。内容の是非は姑く措て問はずとして、然れども言語學の見地に立ちて是等の故人の作品を研究し、その特色を批評することは容易のわざで無い。言語學的研究は極めて世間榮えの無い、極めて論理的な且つ根氣のいゝ學究的態度を研究者に要求するものである。空想・想像・抽象はこの畑では禁物である。

科學的な根據ある議論でなければ一文の價值も無い説として識者から取扱れる。故に最も眞摯な態度で此方面に針路を向けなくては研究の効果が無いのは明らかである。かくの如き氣分は過去及び現在の我國の初等教育國語教授者の間に缺けてゐる。吾人は初等教育の國語教授者は或意味に於ての言語學者でなくてはならぬと信ずる者である。若し此點に於て缺くる所がありとすれば、國語教授者の使命は半分以上も失敗に終つたものと推斷しなくてはならぬ。

中等及び高等程度の學校に於ける外國語科の立場は、我國現在の有様では、國語科が初等學校に於て重要學科として何人からも認められてゐる程度と同一の程度に於て、或は其れ以上の程度に於て重大視されてゐる。英語科は中學校に在りては數學科と相並立して最も重要な位を占め、この兩學科の成績の善惡は、その學校の鼎の輕重を問はるゝものとしてさへ見做されてゐる。生徒・受持教員・校長・父兄は言ふもさらなり、縣當局者も亦此兩學科の前に跪き、その熱狂的信仰の有様を到所で見せつけてゐる。高等の學校に在りては數學崇拜は文科的方面の教師と生徒から惜氣も無く棄てられて仕舞ふ。然れども外國語のみは少部分の文理科

方面の異教徒を除く外、大部分の信者からは依然として渴仰禮拜の標的となるのである。故に我國各種の教育階梯を通じて、最も長きにわたって、又最も力強く根を張つてをるものは外國語科である。かくの如く我が教育界は今日以後もなほ外國語を尊重する必要があるか否かは慎重に考慮した後でなくては斷言が出来ぬが、今日の現状其物に關係をつけて言ふならば、皆人が此學科に重みを與へてをるにも拘らず、頗る非教育的に取扱れてをる事が事實である。外國語特に英語科の教員は言語學的素養に富んでゐる人が決して少なく無い。然れどもこれを教育的に教授し得た人及び現在に於て其教育的見地から、固い強い信仰を把持して、これを教授してをる人は果して何人あるであらうか。多くは自己の辿へてをる道が生徒の上級學校入學試験準備の爲に引づられてをるものであると意識しながら、然も其道が頗る非教育的な邪路であることを意識しながらも、日毎にその矛盾路を辿つてをるものである。甚しきはその矛盾をすら自覺しない教育者もある。この有様は先年物價暴騰の折の米の價の高くなつた事情に類似してゐる。民衆は何の爲に米價が高まるのであるかを知らなかつた。米の小賣商人もその

理由を知らなかつた。然れども、我れも人も競うて其高値の米を多量に消費する事を敢てした。口にその高値を憤りながら、怪しみながら、愁へながら、平氣で、贅澤的にこれを消費してゐた。而してその濫費的行爲は倍々米價の騰貴を促した。今日の我國の英語教授の現況は實にこれに類似したものである。而してその最も大なる病弊は言ふ迄も無く自他共に教育的に盲目であるが故である。英語を重んずることが正當であるならば、我れも人も、その正當なる理由を教育的に自覺してをらなくてはならぬ。然らざれば英語を重んずることは一種の迷信である。迷信は國家を精神的に死の深淵に導くものである。かくの如く觀察し來たれば我國の中等學校及び高等程度の學校の英語科は、初等學校の國語科に比して教育的に取扱れてをらぬことは明かである。こゝに吾人の深き省察と大なる改善の餘地があると思ふ。

我國の中學校の英語科は中學校に於ける言語科の殆ど代表的のものとなつてをると斷言しても大過なからうと思ふ。國漢科は文學的色彩を濃厚にしてをるのは、中學校創立以來、なほ傳統的に見受けらるゝ事實である。その教授法の如き